

K-562

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第68集

米沢城東二の丸跡

発掘調査報告書



吉田正一 著
米沢市教育委員会編

平成12年3月

2000

米沢市教育委員会

米沢城東二の丸跡

発掘調査報告書

平成12年3月

2000

米沢市教育委員会

序 文

本書は平成 10 年に米沢城東二の丸跡を米沢市教育委員会と財団法人山形県埋蔵文化財センターが合同で調査を実施した、米沢市教育委員会担当の調査区の成果をまとめたものです。米沢城の東二の丸にあった県立米沢工業高校が移転し、その跡地に米沢市新博物館(仮称)の建設と同時に山形県立置賜広域文化施設(仮称)も計画されたためその建設に先立つ発掘調査も、米沢市教育委員会と財団法人山形県埋蔵文化財センターが総面積 10,000 m²を二分しそれぞれ 5,000 m²ずつを担当することになり、従って、報告書も担当区ごとに分けて作成することになりました。

米沢城跡は今まで数次にわたって発掘調査が行われていますが、今回の調査は最大規模の調査でありました。絵図によると米沢市教育委員会担当地区は寺院があった場所、財団法人山形県埋蔵文化財センター担当地区はそのほとんどが二の丸の堀に当たります。

調査区は市街地の中心部であり、また、本市の観光名所である松ヶ岬公園に隣接しているため、調査区の周囲にフェンスを巡らしました。また、堀跡からは多量の水が湧くことから、大型のポンプと泥の沈殿槽を設置しました。

調査の詳細については本文に譲りますが、遺構、遺物とも、大名屋敷ならではのものが出土しており、これらの成果については平成 11 年に速報展を開催し、市民に発表しております。

米沢城跡は本市のシンボルであり、その本丸跡は築城当時のおもかけを今に伝える全国的にも稀有な城跡のひとつです。今後も周辺の開発が予想されますが、それらとの円滑な調整を図りながら推進してまいる所存ですので、関係各位のより一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の合同調査に際し、ご指導、ご協力を賜りました文化庁、山形県教育庁文化財課、山形県文化環境部文化振興課、東南置賜教育事務所、関係各位に心から御礼申し上げます。

平成 12 年 3 月

米沢市教育委員会

教育長 佐 藤 政 一

例　　言

1 本報告書は米沢市新博物館(仮称)、山形県立置賜広域文化施設(仮称)の建設に伴い米沢市教育委員会と財団法人山形県埋蔵文化財センターが合同で発掘調査を実施した米沢城二の丸跡の発掘調査報告書である。

総面積 10,000 m²を二分し、5,000 m²をお互いに担当した。米沢市教育委員会は寺院があった場所、財団法人山形県埋蔵文化財センターは堀跡について発掘調査を実施した。従って本報告書は米沢市教育委員会が担当した地域の報告書である。ただし、遺構全体図については両調査区をまとめて示した。

2 調査はそれぞれの担当区を設定し、米沢市新博物館(仮称)の建設地について、米沢市教育委員会が主体となって実施したものであり、期間は平成 10 年 7 月 27 日～同年 12 月 10 日までの延べ 106 日間であった。

3 調査体制は下記の通りである。

調査主体	米沢市教育委員会
調査総括	小杉 基(文化課長)
調査担当	手塚 孝(文化課文化財係主任)
調査主任	菊地政信(文化課文化財係主任)
調査補助員	黒崎 勉 黒沢富雄 長澤由紀
調査参加者	浅井忠士 遠藤富男 近野慶子 今野周藏 佐藤四郎 佐藤高義 高橋信子 高橋洋三 西野勇二 新田弘二 松本三郎 鈴木ひろ美 比佐二男 松田利雄 長澤朋人 藤倉春子 海谷庄八 武田房次郎 下島占一 伊藤博美 秋山信一 尾形昭雄 広瀬春子 後藤キシノ 荒井安蔵
事務局長	小林伸一(文化課長補佐)
事務局	山本 卵(文化課文化財係長) 平間洋子(文化課文化財係主査) 月山隆弘(文化課文化財係主任)
調査指導	山形県教育庁文化財課
調査協力	山形県文化環境部文化振興課 東南置賜教育事務所

4 挿図の縮尺は、各挿図にスケールで示した。方位は真北に統一した。挿図内の遺構に対し

記号は次の通りである。土壙－D Y・池跡－N N・柵列－O N・ピット－P・柱穴－T Y・溝状遺構－K Y・石組水跡遺構－T N・掘立柱建物跡－B Y・礎石建物跡－Z Y・礎石－W Y・井戸跡－D Nとした。遺物の記号は土器－A Z・礫器－C Z・鉄製品－E Z・陶磁器－H Z・土製品－F Z・木製品－G Zを使用する。

- 5 本報告書で使用した遺構・遺物の分類記号及び遺物等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第15集」に沿っている。
- 6 遺構出土の遺物については一括して挿図に示した。「f」は遺構を表す。
- 7 柱穴の平面図、土壙断面図で使用したスクリントーンは、柱根跡が明確なものに砂目を使用した。なお、掘立柱建物平面図のスクリントーンは各図の中で関連する柱跡について使用した。礎石建物跡については礎石に砂目で示した。
- 8 土師器・須恵器に関する調整方法の分類基準は、米沢市埋蔵文化財報告書第36集「大浦」に掲載したものを使用した。
- 9 本報告書作成にあたっては、水野 哲・山口博之・高桑 登・青木昭博・角屋由美子の各氏から御教示を得た。記して感謝申し上げる。
- 10 本調査により出土した遺物については整理、復元し米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山269-3）に一括保管している。
- 11 本報告書の作成については菊地政信が担当し、長澤由紀が補佐した。纏集については菊地が行ったが、全体については手塚 孝が総括した。責任校正は岡本善彦がその責務にあたった。
- 12 城下絵図については、米沢市立図書館所蔵の絵図面を活用させていただいた。
- 13 挿図の中で示した例として「125-6」は、第125図6の略である。

本文目次

序文	
例言	
1 調査に至る経過と調査の経過	1
2 遺跡の立地と歴史的背景	1
3 検出された遺構	5
(1) 奈良・平安期の遺構	5
(2) 中世期の遺構	5
I期の建物跡	5
II期の建物跡	5
III期の建物跡	6
土壙	6
溝状遺構	6
4 近世の遺構	20
(1) 碇石建物跡	20
Z Y 1	20
Z Y 2	20
Z Y 3	29
(2) 石組水路跡と抗列	29
(3) 溝状遺構	35
K Y 4・5	35
K Y 6	35
K Y 9	35
K Y 8	35
K Y 12・30・40	43
K Y 7・26	43
K Y 3・13・15・17・18	43
K Y 20・22・24・33・36・38・45・46	43
(4) 土壙	43
A形態	43
B形態	44
C形態	44
(5) 池跡	59
(6) 井戸跡	59
5 検出された遺物	60
A群	60

B 群	60
C 群	84
D 群	112
E 群	112
F 群	112
G 群	120
H 群	138
I 群	138
J 群	138
K 群	143
6まとめ	143
奈良・平安期	143
中世期	143
近世	147
引用参考文献	173
報告書抄録	174

挿 図 目 次

第1図 米沢城東二の丸跡調査区位置図	3
第2図 米沢城東二の丸跡グリット位置図	4
第3図 米沢城東二の丸跡B Y 1 平面図(1)	7
第4図 米沢城東二の丸跡B Y 2 平面図(2)	8
第5図 米沢城東二の丸跡B Y 3 平面図(3)	9
第6図 米沢城東二の丸跡B Y 4・5, ON 4 平面図(4)	10
第7図 米沢城東二の丸跡B Y 6・8 平面図(5)	11
第8図 米沢城東二の丸跡B Y 7・9 平面図(6)	12
第9図 米沢城東二の丸跡B Y 10平面図(7)	13
第10図 米沢城東二の丸跡B Y 11平面図(8)	14
第11図 米沢城東二の丸跡B Y 12, DN 2 平面図(9)	15
第12図 米沢城東二の丸跡B Y 13平面図(10)	16
第13図 米沢城東二の丸跡B Y 14平面図(11)	17
第14図 米沢城東二の丸跡掘立柱建物跡柱穴土層断面図(1)	18
第15図 米沢城東二の丸跡掘立柱建物跡柱穴土層断面図(2)	19
第16図 米沢城東二の丸跡K Y 11・2 平面図(3)	21
第17図 米沢城東二の丸跡K Y 11・4・K Y 26・5, DY 79平面図(4)	22
第18図 米沢城東二の丸跡K Y 11・7・K Y 8・4 平面図(5)	23

第19図	米沢城東二の丸跡 K Y 19 - 11平面図(6)	24
第20図	米沢城東二の丸跡 K Y 19 - 1・2平面図(7)	25
第21図	米沢城東二の丸跡 K Y 19・4・37・33平面図(8)	26
第22図	米沢城東二の丸跡 N N 2, K Y 28・29・32平面図(9)	27
第23図	米沢城東二の丸跡 K Y 8 - 7・6平面図(10)	28
第24図	米沢城東二の丸跡 Z Y 1, O N 3平面図(1)	30
第25図	米沢城東二の丸跡 Z Y 2平面図(2)	31
第26図	米沢城東二の丸跡 T N 1 - 1・2平面図(1)	32
第27図	米沢城東二の丸跡 T N 1・3・4平面図(2)	33
第28図	米沢城東二の丸跡 T N 1・5・6・7・8平面図(3)	34
第29図	米沢城東二の丸跡 K Y 4・5平面図(1)	36
第30図	米沢城東二の丸跡 K Y 6平面図(2)	37
第31図	米沢城東二の丸跡 K Y 9平面図(3)	38
第32図	米沢城東二の丸跡 K Y 8 - 5平面図(4)	39
第33図	米沢城東二の丸跡 K Y 8・12・13平面図(5)	40
第34図	米沢城東二の丸跡 K Y 7・12・30平面図(6)	41
第35図	米沢城東二の丸跡 K Y 26平面図(7)	42
第36図	米沢城東二の丸跡 D Y 27~30・77, K Y 7平面図(1)	45
第37図	米沢城東二の丸跡 D Y 45・72・74・75平面図(2)	46
第38図	米沢城東二の丸跡 D Y 4・44・46・47平面図(3)	47
第39図	米沢城東二の丸跡 D Y 20・32・88・89平面図(4)	48
第40図	米沢城東二の丸跡 D Y 8・34・42・48・72・81平面図(5)	49
第41図	米沢城東二の丸跡 D Y 1平面図, D Y 1出土遺物実測図(6)	50
第42図	米沢城東二の丸跡 D Y 1出土遺物実測図(7)	51
第43図	米沢城東二の丸跡 D Y 63・80・82・115・116平面図(8)	52
第44図	米沢城東二の丸跡 D Y 5平面図(9)	53
第45図	米沢城東二の丸跡 D Y 49・73平面図(10)	54
第46図	米沢城東二の丸跡 D Y 21・36・40・62平面図(11)	55
第47図	米沢城東二の丸跡 D Y 10・37・41, N N 2平面図(12)	56
第48図	米沢城東二の丸跡 D Y 21・36・40・62平面図(13)	57
第49図	米沢城東二の丸跡 D N 1・2平面図(4)	58
第50図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	61
第51図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	62
第52図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(1)	63
第53図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(2)	64
第54図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(3)	65
第55図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(4)	66
第56図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(5)	67

第57図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(6)	68
第58図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(7)	69
第59図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(8)	70
第60図	米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(9)	71
第61図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	72
第62図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	73
第63図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)	74
第64図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)	75
第65図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(5)	76
第66図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)	77
第67図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(7)	78
第68図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(8)	80
第69図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(9)	81
第70図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(10)	82
第71図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(11)	83
第72図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	85
第73図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	86
第74図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)	87
第75図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)	88
第76図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(5)	89
第77図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)	91
第78図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(7)	92
第79図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(8)	93
第80図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(9)	94
第81図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(10)	95
第82図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(11)	96
第83図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	97
第84図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	98
第85図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)	99
第86図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)	86
第87図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(5)	101
第88図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)	102
第89図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(7)	103
第90図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(8)	104
第91図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(9)	105
第92図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(10)	106
第93図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(11)	107
第94図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(12)	108

第95図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(13)	109
第96図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(14)	110
第97図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	111
第98図	米沢城東二の丸跡出土かわらけ分類図	113
第99図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	114
第100図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	115
第101図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)	116
第102図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)	117
第103図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(5)	118
第104図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)	119
第105図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	121
第106図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	122
第107図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)	123
第108図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)	124
第109図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(5)	125
第110図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)	126
第111図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(7)	127
第112図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(8)	128
第113図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(9)	129
第114図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(10)	130
第115図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(11)	131
第116図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(12)	132
第117図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(13)	133
第118図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(14)	134
第119図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(15)	135
第120図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(16)	136
第121図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(17)	137
第122図	米沢城東二の丸跡出土土箸分類図	139
第123図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	140
第124図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	141
第125図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	142
第126図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)	144
第127図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)	145
第128図	米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)	146
第129図	土器調整手法分類図	148
第130図	米沢城東二の丸跡調査区寺院配置図	149
第131図	米沢城東二の丸跡調査区寺院配置図想定図	150
第132図	往古御城下絵図(写) 寛永年17年	151

第133図 米沢城東二の丸跡建物変容図	152
---------------------	-------	-----

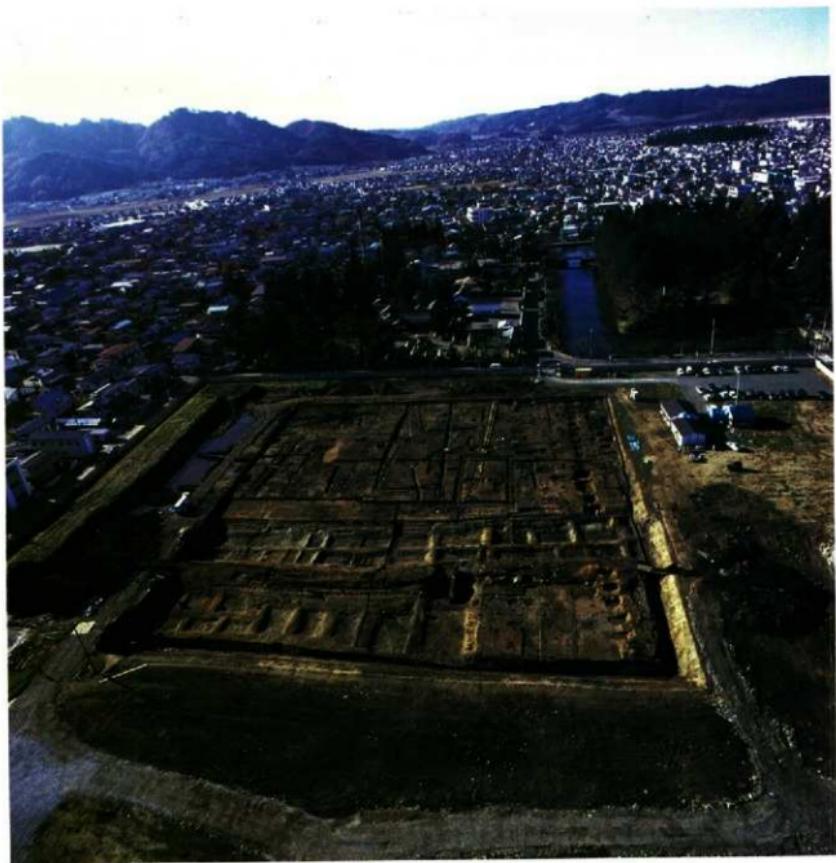
付 表 目 次

第1表 米沢城東二の丸跡出土土師器・須恵器観察表	153
第2表 米沢城東二の丸跡出土瓦器類観察表	157
第3表 米沢城東二の丸跡出土陶磁器観察表	158
第4表 米沢城東二の丸跡出土染付陶磁器観察表	160
第5表 米沢城東二の丸跡出土かわらけ観察表	163
第6表 米沢城東二の丸跡出土漆器観察表	167
第7表 米沢城東二の丸跡出土木器観察表	167
第8表 米沢城東二の丸跡箸出土表	170
第9表 米沢城東二の丸跡出土鉄製品観察表	171
第10表 米沢城東二の丸跡出土石製品観察表	171
第11表 米沢城東二の丸跡出土硯観察表	172

図 版 目 次

卷頭図版1	米沢城東二の丸跡調査区全景（上空東方からの空中写真）
卷頭図版2	米沢城東二の丸跡遺構全景（空中写真）
図版1	礎石建物跡（Z Y 2）東方から 堀立建物跡（B Y 3・4）南方から
図版2	石組水路と角列・礎石
図版3	溝状遺構セクション状況
図版4	遺物出土状況・桶出土状況・D Y 1セクション・B Y 10のT Y 6掘方と柱根跡
図版5	出土土器・摺鉢・土師器・火鉢・かわらけ
図版6	出土瓦質土器類
図版7	出土かわらけ
図版8	出土壺形土器
図版9	出土瀬戸菓子小皿
図版10	染付蓮池水禽文大皿
図版11	輸入青磁・中皿・小皿・国産染付皿
図版12	出土陶磁器
図版13	D Y 1出土遺物
図版14	出土木器

卷頭図版 1



▲米沢城東二の丸跡調査区全景（上空東方からの空中写真）

巻頭図版 2



▲米沢城東二の丸跡造構全景（空中写真）

1 調査に至る経過と調査の経過

米沢城の東二の丸にあった山形県立米沢工業高等学校（以下工業高校）が移転し、その跡地に米沢市新博物館（仮称）の建設が計画された。同じ建物の中に県立の文化施設も計画されたため、その建設に先立つ発掘調査も、財団法人山形県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）と米沢市教育委員会（以下米沢市教委）の合同調査で実施することとなった。

総面積 10,000m² を二分し、それぞれ 5,000m² ずつを担当する。米沢城跡は今日まで市教委によって、数次にわたって発掘調査が行われているが、今回の調査は最も大規模である。絵図によると市教委担当区は寺院があった場所にあたる。調査区は本市の観光名所である松ヶ岬公園に隣接しており、人通りが多いことから調査区の周辺をフェンスで囲った。また堀跡からは多量の水が湧くことから大型のポンプと泥の沈殿槽を設置した。

調査区は工業高校があったことから、グランドや校舎建設のための盛土が約 1 m あり、盛土は重機によって、遺構が確認できる深さまで掘り下げた。この工程を平成 10 年 7 月 27 日から開始した。表土の剥離が進むに従い、遺構確認面が明確になってきた。しかし、すでに削平された場所もあり、遺構確認が困難な箇所を認められた。付図のスクリントーンで示した箇所が削平された箇所であり、工業高校の建物があった北方部に集中する。

溝状遺構や柱穴・土壤等が確認され、溝状遺構の覆土からは瓦器類の遺物が認められた。柱穴は南西・東方・南方地区を中心に検出され、掘立柱建物跡 14 棟、礎石建物跡 2 棟が認められた。12 月 4 日には空中写真撮影を実施した。この日は天候に恵まれ順調に終了した。

遺構の測量は業者に委託事業としたので、12 月 10 日までに発掘調査を終了し、同日に発掘用具を収納した。

2 遺跡の立地と歴史的背景

米沢市は、山形県の南端部福島県境に位置する。周囲を山に囲まれた盆地であり、市街地は城下町の様相を今も色濃く残す。この城下町の中心である本丸跡は、現在上杉神社が造営されている。米沢城跡は、本丸・二の丸・三の丸の一部を加えた南北約 560 m、東西 560 m の範囲 336,600m² を遺跡として登録している。

米沢城に関する調査として昭和 61 年に初めて実施し、その後 5 回を数える。その成果を要約すると、上杉氏以前の遺構群も確認されている。ちなみに中世の米沢盆地は長井氏、その後伊達氏（1591）、蒲生氏（1598）、1598 年から上杉氏 30 万石（のち 15 万石）の領地となって維新をむかえた。1870 年（明治 3 年）に二の丸寺院を破却し、藩士住居にすることを許されている。1871 年には米沢城周囲の土壘・堀の取り壊しを申請、許可される。

米沢城は白子神社の縁起によると、長井時広によって築城されたと言われる。1189 年（文治 5 年）頼朝奥州泰衡を征する。この時長井左衛門大江時廣供奉し、彼泰衡が興賊の武将良元が拠点とする御館山（羽前南置賜郡中津川村）の柵を攻めてこれを亡す。頼朝その功を賞し即ち当郡を賜う。この「城を築く」という記事が米沢事跡考にあることを紹介し、さらに「時廣が今の米沢市松ヶ岬公園の地に四条天皇、暦仁元年（1238）の預かりと称せられる」とある。

城は「松ヶ崎城」、「松ヶ岬城」などと称せられたといわれるが、明らかではない。また長井氏が論功行賞により長井庄を所領したものの、はたして長井氏自身がここに居住していたかについても一切不明である。

長井氏は1380年（天授6年）伊達氏8代宗遠によって滅亡される。米沢は伊達氏の版図に算入されるが、実際に伊達氏が米沢に居住し、ここを本拠としたのは1549年（天文18年）15代晴宗からで、在城期間は1591年（天正19年）17代独眼竜政宗までの42年間である。

以上のことから、長井氏時代に確証はないものの今日の米沢城の原形らしきものが造られ、その後、伊達氏時代に何らかの手直しはあったと考えられる。豊臣秀吉によって陸奥岩出山に転封される際に、米沢城下の六町（柳町・柳町・東町・立町・大町・南町）の主だった町人も一緒に移っていることから、少なくともこれだけの町並みはあったといえる。

1598年（慶長3年）の上杉景勝の会津移封により、米沢城には腹心の直江兼続を置く。次いで1601年（慶長6年）には会津120万石から米沢30万石（出羽国置賜郡18万石と陸奥国信夫・伊達郡12万石）へ移封され、上杉景勝は11月に米沢に入り、二の丸を普請してこれに居住したといわれる。その後「1604年（慶長9年）に門・堀・橋などの拡張工事を始め、更に1608年（慶長13年）5月から外曲輪を造営し、外濠を掘り城西に掘立川（掘立川）を穿った。」とある（上杉家記）。その規模本丸四方890間、二の丸北方170間、南方180間、東方200間であった（直江兼続伝）。1609年（慶長14年）に景勝、米沢城東南隅に謙信遺骨を安置する廟堂（御堂）の高台造営を命じ、二の丸には御堂を仕える寺院を置く（探史月表）。

御堂に勤仕する真言宗寺院数は時代によって変化するが、江戸中期頃から21ヶ寺となった。この21ヶ寺は、法音寺・大乗寺等の能化衆（院家衆とも）と呼ばれる11ヶ寺、御堂衆9ヶ寺、御堂を管轄する靈仙寺（本丸内に位置する）に分けられる。第130図に示したのが寺院の配置図である。今回の調査区には教王院・□明院・蓮藏院・大乗寺・善性院・安養院、さらに彌勒院・寶藏寺・万秀院・法性院の10ヶ寺が構築されていた場所にある。

調査区からは焼土が多量に発見されている。これを裏づけるように米沢城内の火災は記録に残るだけでも21回ある。本丸内の焼失は嘉永2年の御堂の火災だけであるが、二の丸に関しては寺名がたびたび登場する。城内の火災においては、幕府への報告が面倒な問題となり、藩では先例を調べたり、幕閣に伺いを立てたり慎重な対応がなされた。

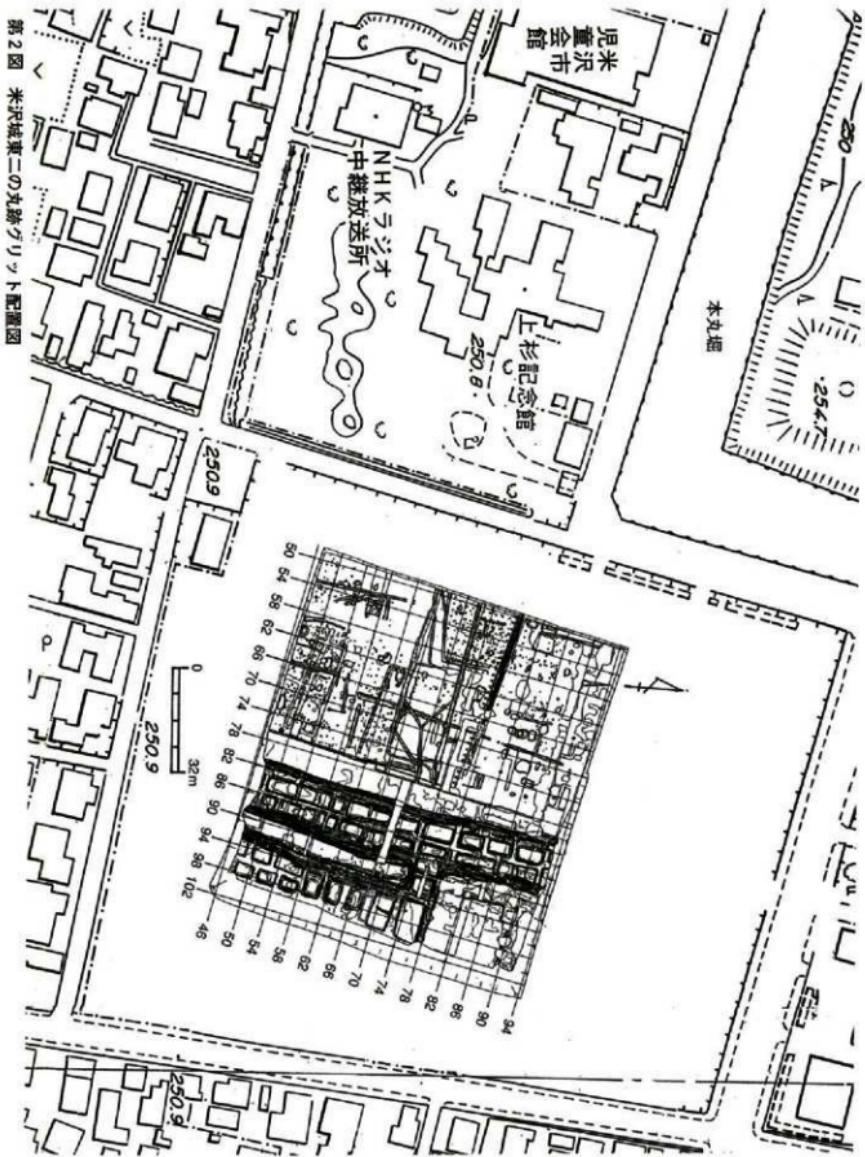
再建が城の普請と関係するかが問題で、無許可の城普請が禁止されていることによる。作事屋や寺院の焼失は届けなかったが、大手門・御堂・新御殿の焼失は報告されている。調査区にある寺院についての火災は延宝2年2月28日大乗寺、元禄15年7月4日大乗寺、文化11年5月18日法性院・万秀院、天保5年3月20日大乗寺等がある。

前述したようにこれらの寺院は明治4年をもって移転及び消滅する。明治5年羽前国米沢城下絵図にはその痕跡をとどめない。

工業学校は明治30年4月に開校、翌31年4月に県立となり、二の丸跡に移転した。大正4年と6年の米沢大火で焼失し、その復興作業の中で二の丸東城門の礎石が偶然発見されたと言う。長径1.1m、厚さ48cm、12.5cm×12.5cmの方形の穴が掘られている。



第1図 米沢城東二の丸跡調査区位置図



第2図 米沢城東二の丸跡グリット配置図

3 検出された遺構

今回の調査区からは総計 848 基の遺構群を検出した。これらを形態別に分類すると、掘立柱建物跡 (BY) 14 棟 (以下建物跡)、礎石建物跡 (ZY) 3 棟、井戸跡 (DN) 4 基、池跡 (NN) 2 基、石組水路 (TN) 1 基、築地塀・礎石築地塀・柵列 (ON) 6 基、土壙 (DY) 93 基、溝状遺構 46 基、柱穴 (TY) 135 基 (建物跡を構成する柱穴を含む)、ピット (P) は 545 基であった。

これらの遺構の大半は中・近世期に位置する。重複しているものや、削平された状況を呈することから復元して説明を加えたい。奈良・平安期・中世・近世・近代の時期別に述べる。以下説明に入る。

(1) 奈良・平安期の遺構

遺物は出土しているが、明確な遺構は発見されなかった。出土土器の吟味から大浦編年のⅡ期からⅢ期に位置づけられる。422 点を数える遺物出土数からみて周辺に集落が営まれていたと判断できる。過去の調査によても数点出土しているが、今回のように数百点まとめて出土したことはなかった。

(2) 中世期の遺構

長井・伊達時代に相当する時期である。遺物としては瓦器質土器類が主体をなす。遺構は掘立柱遺物跡と溝状遺構・土壙・柱穴・ピット等が発見された。建物跡に関しては中世・近世の区別が困難なものもあるが、覆土や方向を吟味することによって、I～Ⅲ期に分けられる。

第 130 図で示した二の丸跡調査区寺院配置図である。1802 年のものであり、火災などによって建て替えられたが、規模・方向・間取りは基本的に変容しないと考えれば今回の建物跡は上杉以前、すなわち伊達・長井時代と考えられる。従って近世の寺院跡ではない。調査区からは河原石が多量に出土している。これらは礎石として使用したと考えられる。各建物跡について説明したい。なお、間尺については柱根の中心から中心を測定値とした。

柱根が確認できなかった柱穴間の間尺については (-) 印で示す。間尺は (m) で記した。

○ I 期の建物跡 (第 8・10 図)

BY 4・5・7・9 の 4 棟が位置する。調査区西方部中央に隣接して構築されている。BY 4 は中央に仕切りを有する建物跡で、東西長の形態である。桁行東西 4 間 ($1.92\text{ m} \times 2.0\text{ m} \times 2.64\text{ m} \times 2.06\text{ m}$)、南北梁行 2 間 ($1.9\text{ m} \times 1.96\text{ m}$) となる。中央に仕切りが認められる。北方箇所は削平された 2 基あると判断され、破線で示した。

西側に隣接して BY 5 がある。東西長の建物であり、桁行東西 2 間 ($1.94\text{ m} \times 1.92\text{ m}$)、梁行 1 間 (2.45 m) となる。なお、2 棟の建物跡は接続しているものと考えられる。

北側に東西に延びる KY 26 の覆土から、須恵器・内耳土器・染付碗が出土している。染付碗は 17 世紀以降に位置づけられることや、柱穴群を削平して構築しており、I 期の建物群には伴わない溝状遺構と考えられる。

○ II 期の建物跡 (第 6・7・9・11・13 図)

BY 2・3・8・10・12 の 6 棟で構成され、北西と南東に位置する。北西箇所は I 期の建物跡

と重複する。BY 2 は調査区南東に位置する。柱穴を礎石大型建物跡のZY 2 床掘によって南方側を削平されている。東西長の 4 間、南北東側 2 間、南北西側 1 間の建物跡であり、桁行東西 (2.02 m × 1.86 m × 2.12 m × 1.82 m)、梁行南北東側 (1.82 m × 1.83 m)、梁行南北西側 (3.9 m) となる。

BY 3 は I 期の BY 4 と重複している。柱穴の重複関係から BY 4 の後に BY 3 を建替えたことは明らかである。北方の東西に延びる KY 26 によって、柱穴が削平されている。南北 3 間の東西 3 間の建物跡で桁行南北 (2.00 m × 1.96 m × 1.96 m)、梁行東西 (1.90 m × 1.86 m × 2.02 m) となる。北方から延び BY 3 の柱穴 TY 138 の箇所で西方に曲する KY 29 は BY 3 ~ BY 5 に伴う溝状造構に伴うものと考えられる。ON 4 の構列も同様である。

BY 8 は BY 3 の北方に隣接する。南北 4 間、東西 3 間の南北長である。桁行南北 (1.94 m × 1.88 m × 1.78 m × 1.92 m)、梁行東西 (2.30 m × 2.30 m × 2.44 m) である。BY 1 と重複する。北方を石組水路及び構列造構によって柱穴が削平されている。

BY 10 は調査区南部に位置する。大型土壙の DY 37 や礎石建物跡 ZY 3 の床掘によって削平されている。東西の柱穴は確認できなかった。ゆえに南北だけを記す。桁行南北 5 間 (2.06 m × 2.36 m × 2.30 m × 2.14 m × 2.60 m) である。柱穴の掘り方も大きく、大型の建物跡である。この建物跡が存在する場所は調査区の中で最も高い。

BY 12 は西北に位置し 4 間の 4 間である。南北がやや長いがほぼ方形を呈する建物跡である。桁行南北 (1.92 m × 1.98 m × 1.86 m × 1.84 m)、梁行東西 (1.98 m × 1.94 m × 1.88 m × 1.86 m) である。ON 5 の構列が伴うと推測される。

◎Ⅲ期建物跡 (第 5・12・14・11 図)

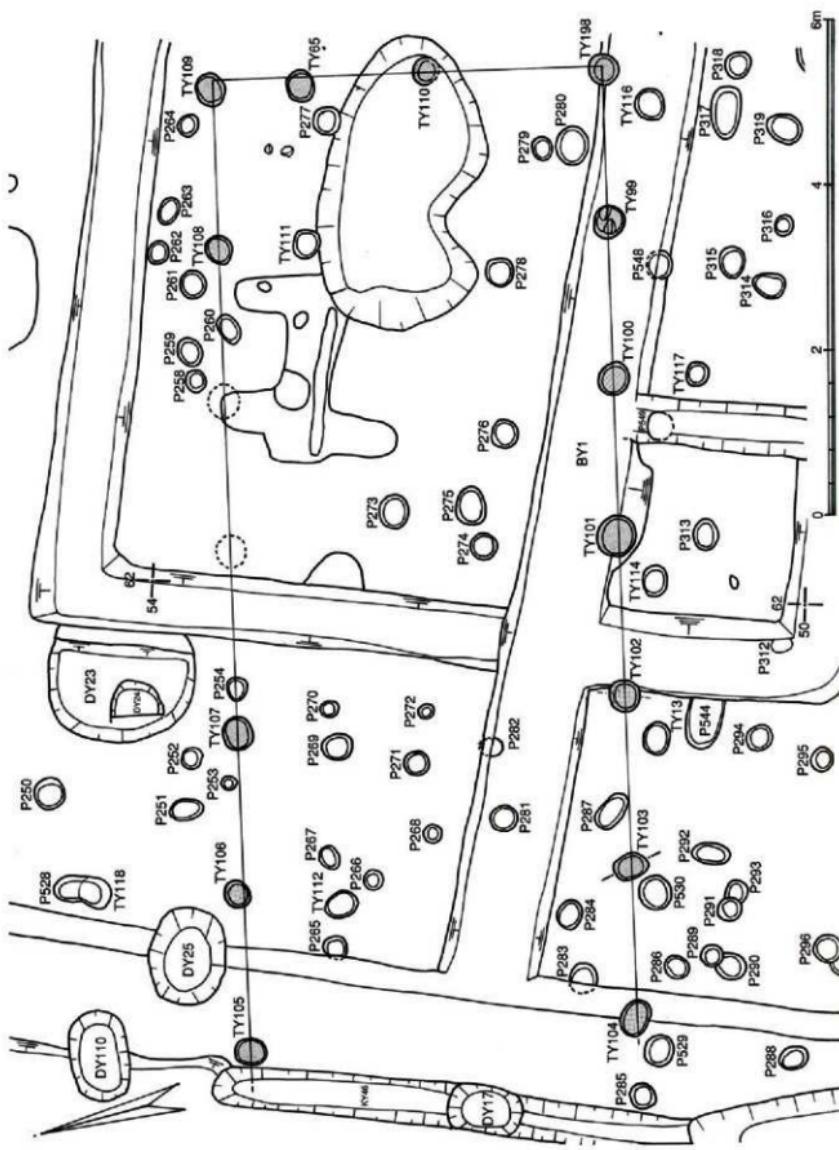
BY 1・11・13・14 の 4 棟が認められ、調査区の南方に位置する。BY 1 は東西長の建物跡であり、西方箇所は近代の削平によって確認できなかったので現況を記する。桁行東西 (1.96 m × 2.44 m × 1.98 m × 1.94 m × 1.92 m × 1.94 m) の 6 間、梁行南北 3 間 (2.12 m × 1.54 m × 1.12 m) となる。BY 11 は東西長の建物跡であり、桁行東西 3 間 (1.86 m × 1.86 m × 1.98 m)、梁行南北 2 間 (1.96 m × 1.90 m) である。BY 13 も東西長の建物跡であり、KY 19 と重複する。KY 19 を埋めて構築している状況を呈する。桁行東西 4 間 (1.94 m × 1.90 m × 2.10 m × 2.10 m)、梁行南北 2 間 (1.11 m × 1.68 m) となる。BY 14 は南北長の建物跡で桁行南北 4 間 (1.92 m × 1.88 m × 1.92 m × 1.40 m)、梁行東西 2 間 (2.38 m × 2.62 m) となる。

◎土壙 (第 45 図)

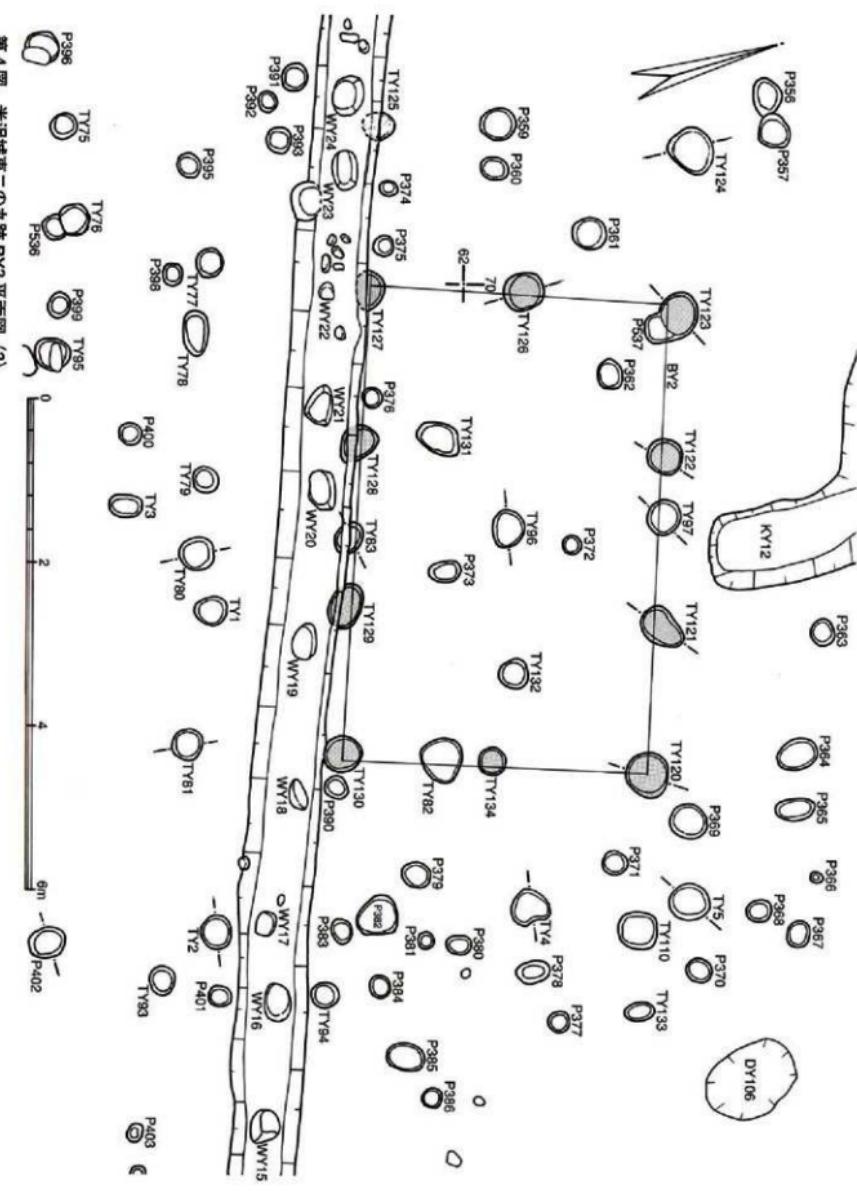
中世期に明確に位置すると考えられる土壙は確認されなかつたが、覆土から推測して DY 45 ~ 47・104 が上げられる。いずれも浅く遺物を含まないのが特徴である。

◎溝状造構 (第 24 ~ 28 図)

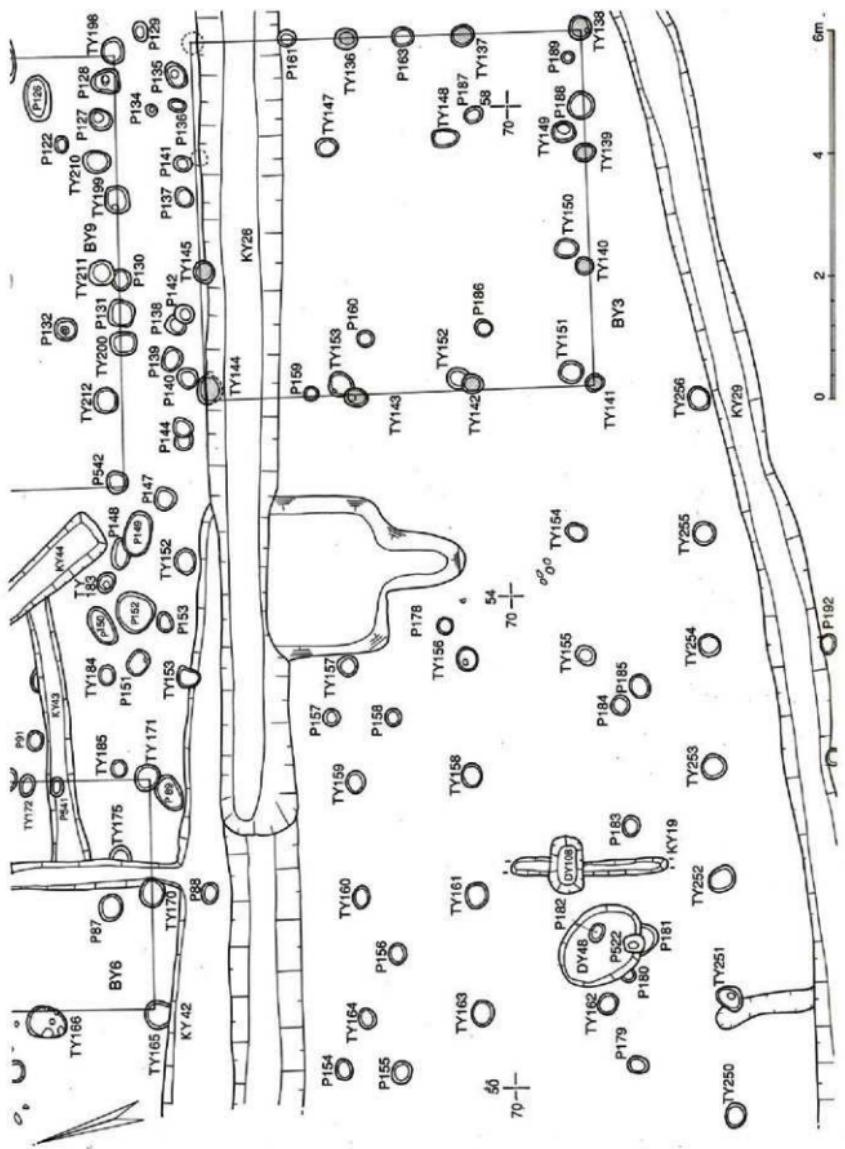
調査区を南北に走る KY 11・19 がある。北方で 34 m、南方で 30 m 離れて構築された溝状造構である。KY 11 は北方から南方に 18.8 m で止まり 4.4 m の空間を有し再度南方に 42 m 延びている。断面形態は「V」字形を呈し、深さ 60 ~ 70 cm を有する。KY 9 も南北に掘られた溝状造構であり、両者の形態から同時期と考えられ、意図的に食い違いに掘られたと推測される。



第3図 米沢城東二の丸跡 BY1 平面図 (1)

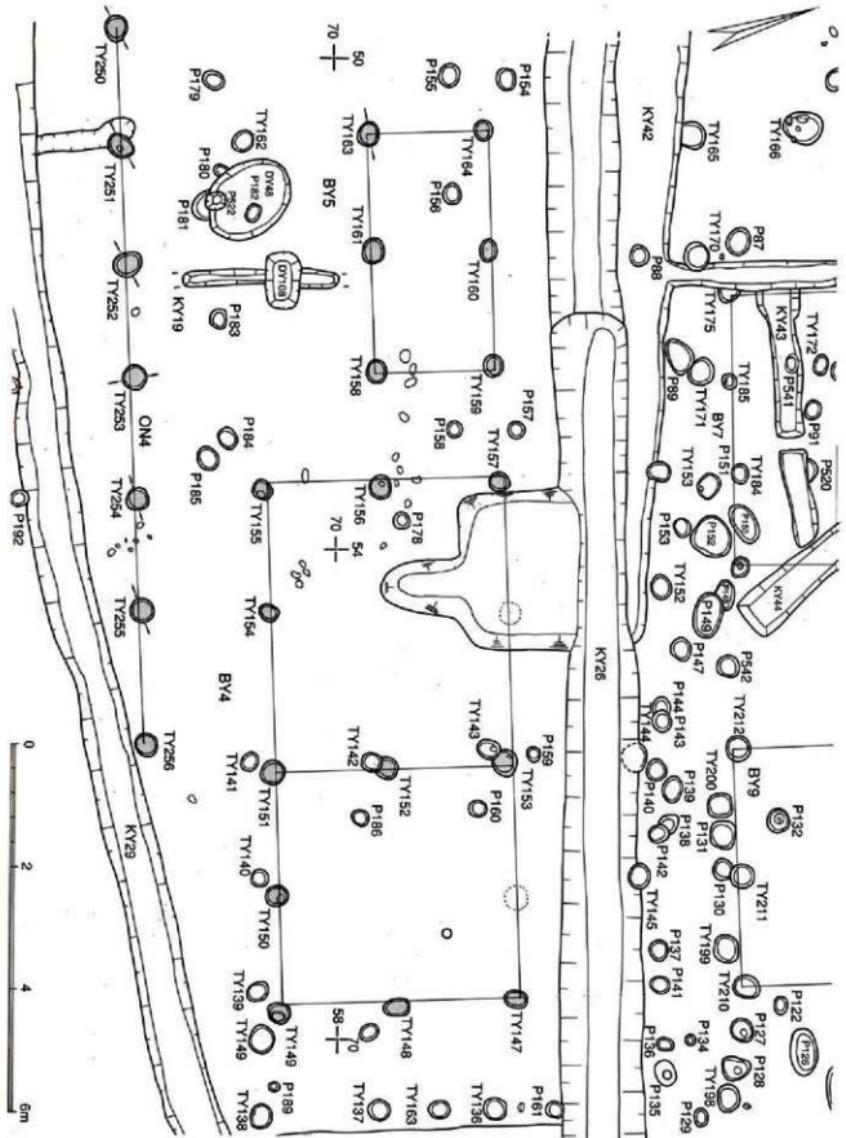


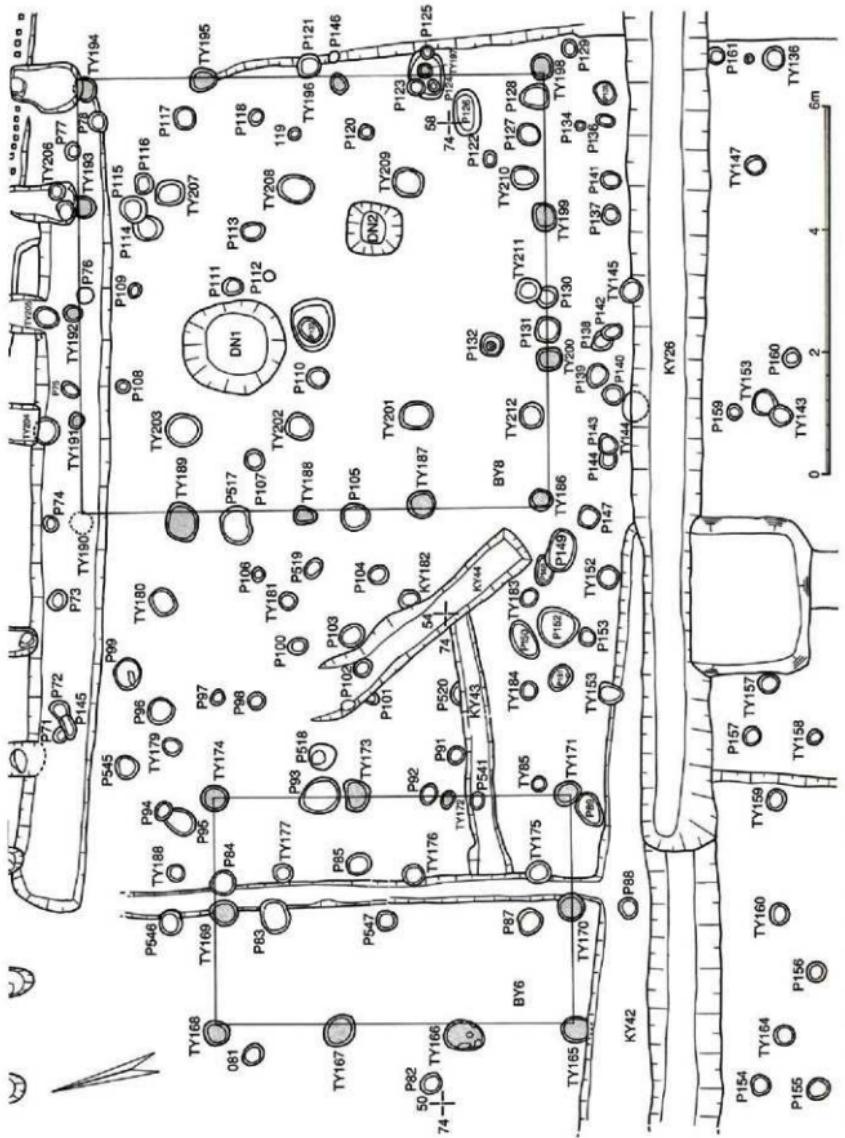
第4図 米沢城東二の丸跡 BV2 平面図 (2)



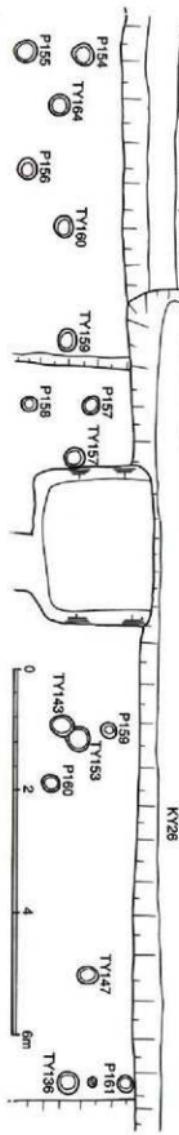
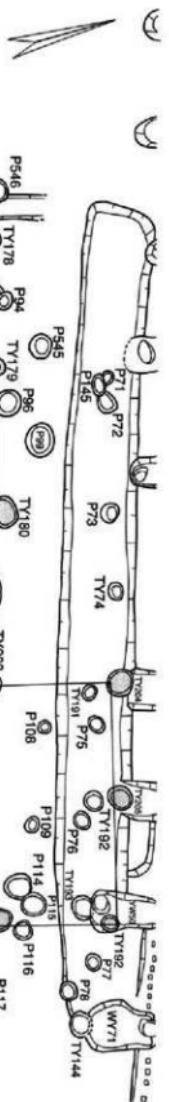
第5図 米沢城東二の丸跡 BY3 平面図 (3)

第6図 米沢城東二の丸跡 BY4・5・ON4 平面図 (4)

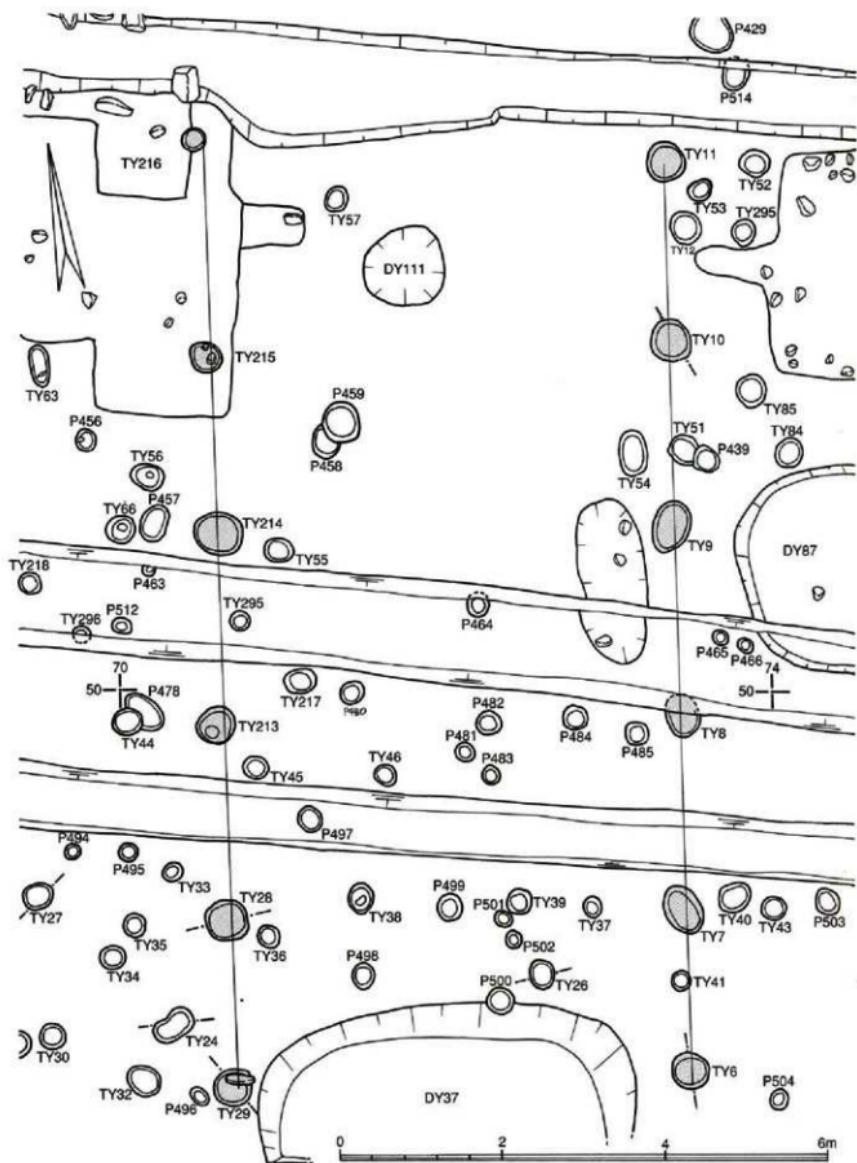




第7図 米沢城東二の丸跡 BY6・8平面図 (5)



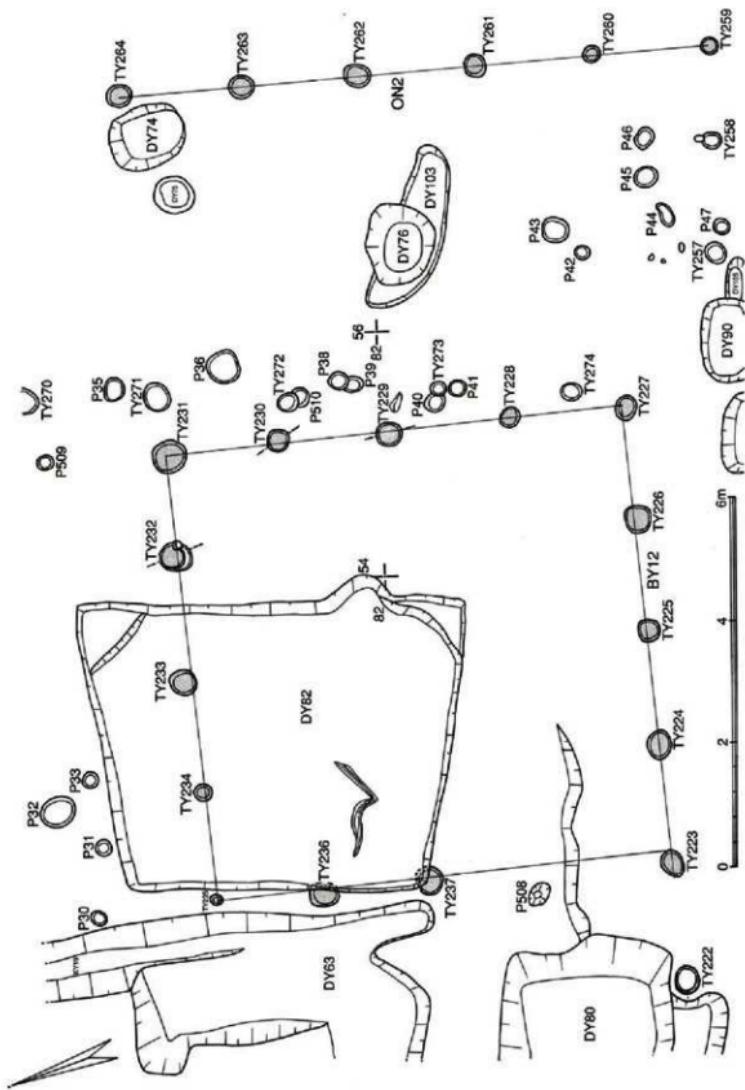
第8図 米沢城東二の丸跡 BY7, 9 平面図 (6)



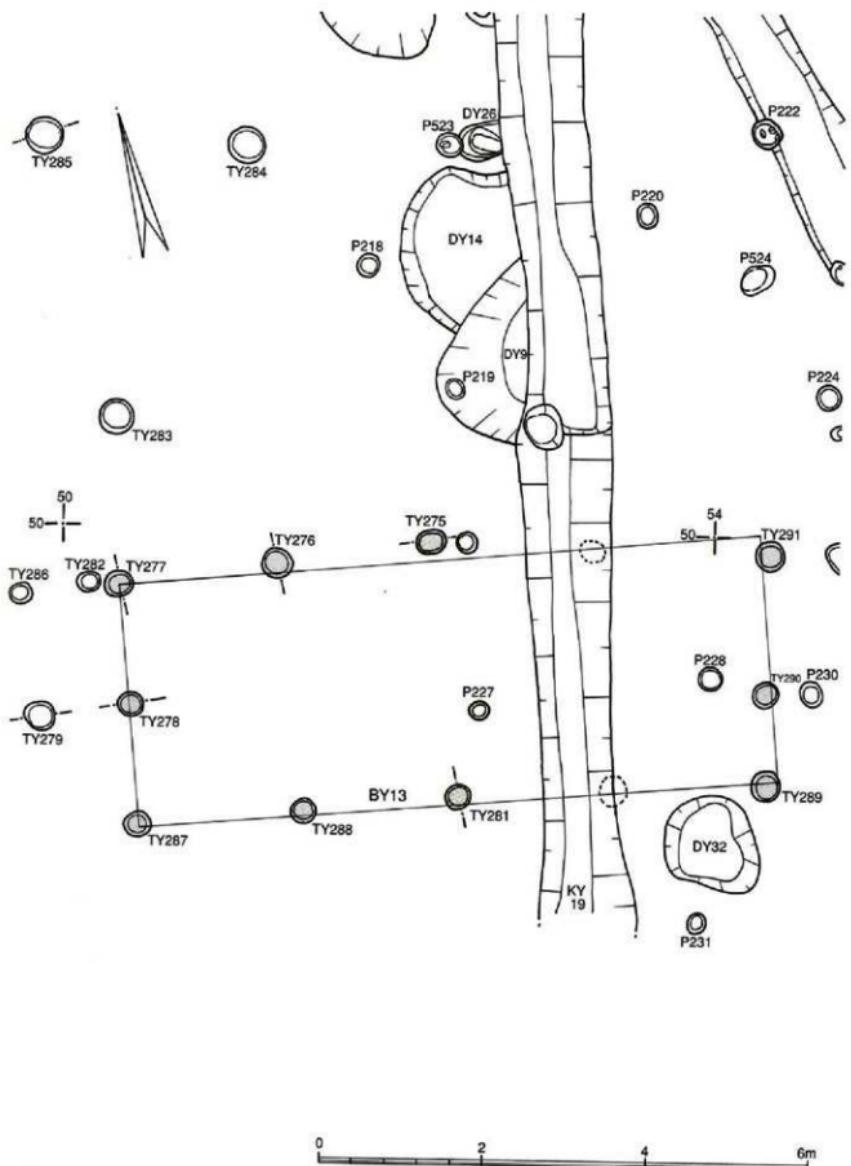
第9図 米沢城東二の丸跡 BY10 平面図 (7)



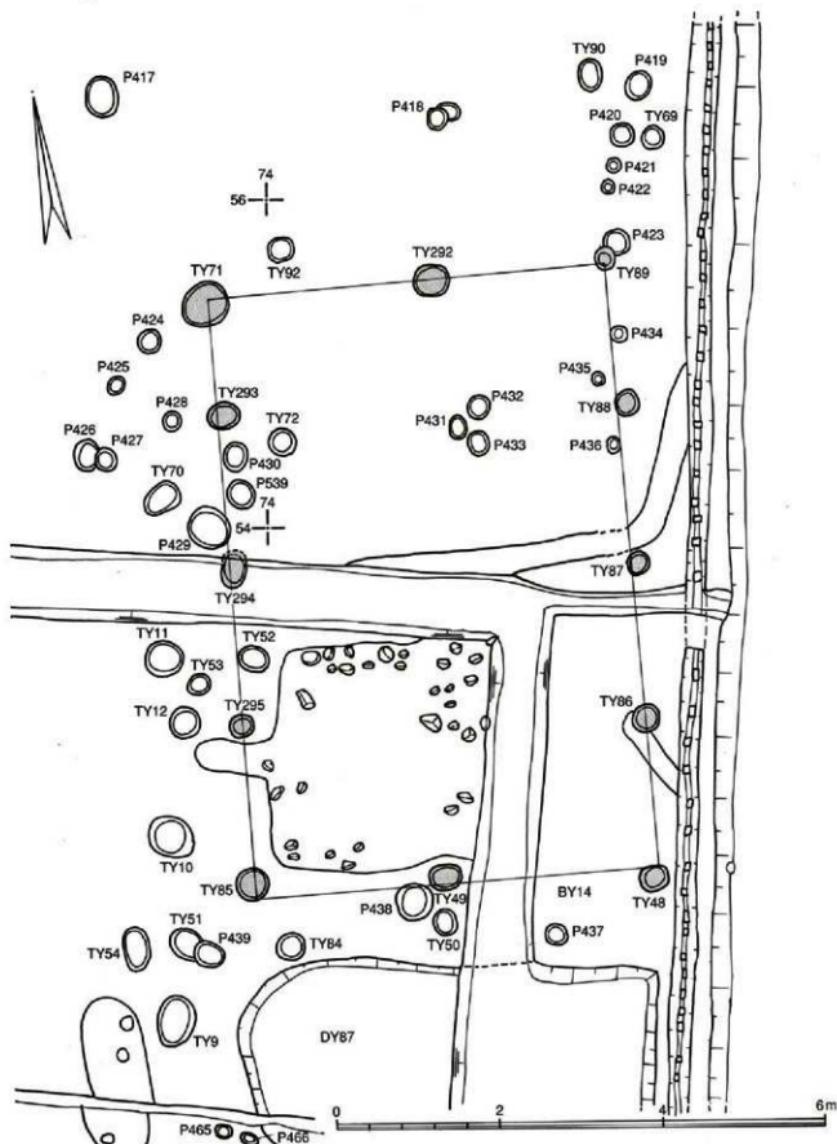
第10図 米沢城東二の丸跡 BY11 平面図 (8)



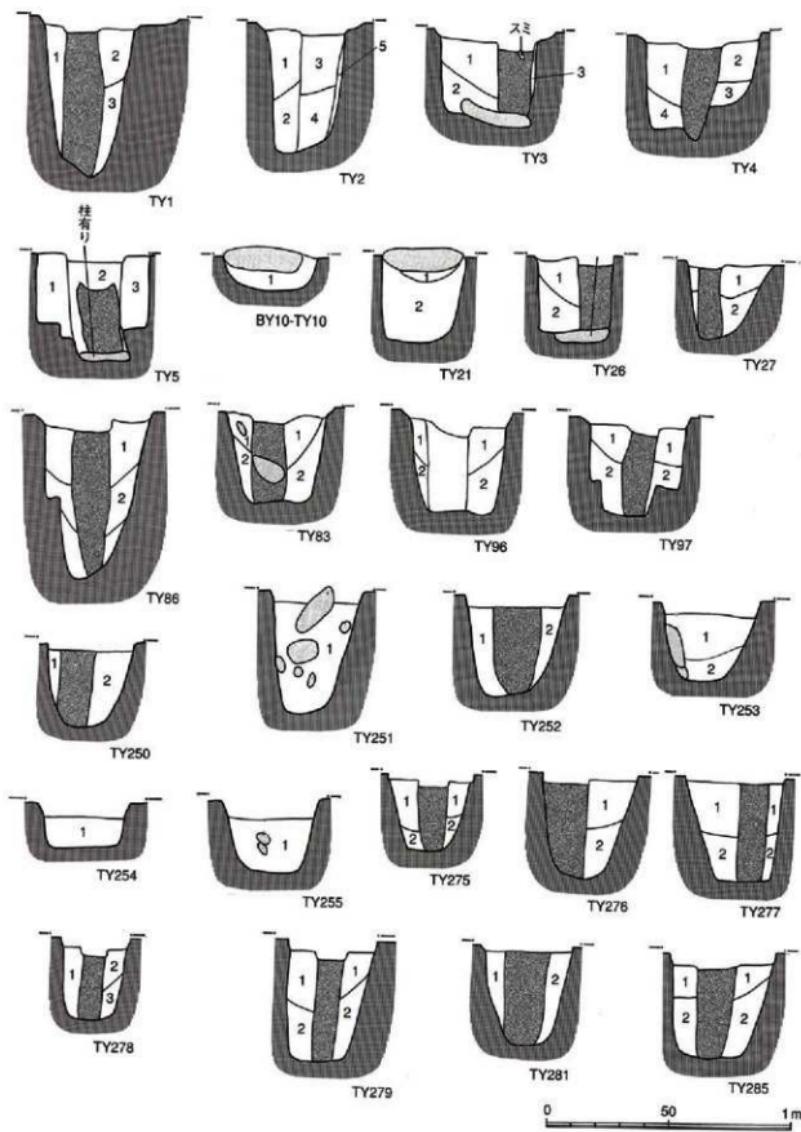
第11図 米沢城東二の丸跡 BY12・ON2平面図 (9)



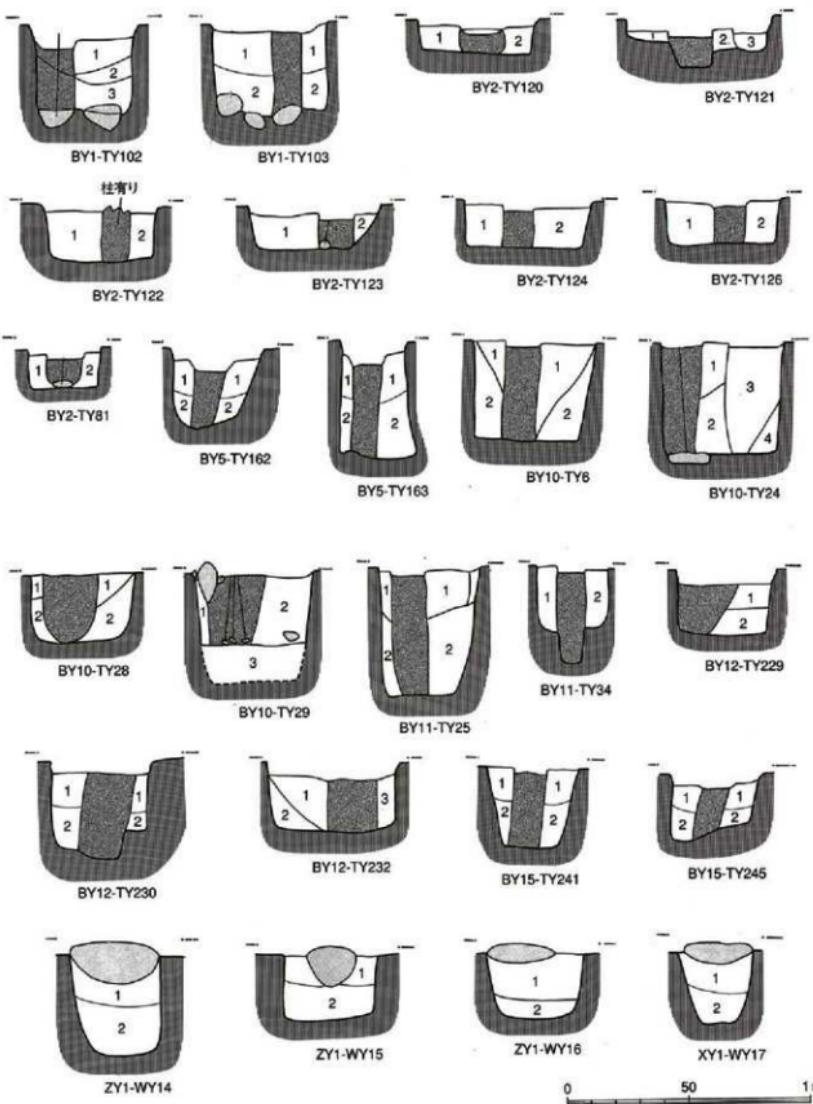
第12図 米沢城東二の丸跡 BY13 平面図 (10)



第13図 米沢城東二の丸跡 BY14 平面図 (11)



第14図 米沢城東二の丸跡堀立柱建物跡柱穴土層断面図 (1)



第15図 米沢城東二の丸跡堀立柱建物跡柱穴土層断面図（2）

覆土から第24図で示すように景德鎮染付小皿や瀬戸小皿等が出土しており、16世紀前半の遺構と考えられる。KY 19も第28図で示すように漆器や手あぶりとKY 11と同様な瀬戸小皿が出土しており、両者は同時期と考えられる。館跡を構成する遺構であり、建物を区画するために構築されたものであろう。内耳土堀と同様な年代が考えられる。

4 近世の遺構

慶長6年(1601)に上杉景勝は徳川家康の命により、会津120万石から米沢30万石へ移封される。すでに3年前の慶長3年(1598)には腹臣の直江兼続(6万石)を置いてるのでこの年から上杉氏の時代と言える。従って近世の遺構は1598年以降から明治4年(1871)の間に構築された遺構群である。273年間存続した米沢城下において、記録に残る火災は21回ある。実際に13年に1回の割合で発生したことになる。上杉氏時代の最後の火災は元治元年(1864)の小森沢火事と称される火災であり、1,248戸を焼失している。死者も7名と記録されている。

城内の昌寿院住居、作事屋、御厩が焼失した。二の丸にある寺院も火災によって変容したことを念頭に置いて、遺構を説明したい。

(1) 磁石建物跡（第24・25付図）

上杉氏が所蔵する住吉御城絵図によると、今回の調査区には大乗寺、安養院、宝蔵寺の3カ寺が認められる。二の丸堀も本丸の南東で止まっている。この絵図から判断するとZY 1・2・3・4の4棟が確認された。ZY 1・ZY 2の中間西方に位置する。なおZY 4はZY 1の西方16m地点にあり、磁石が発見されたが建物跡として把握するまでは至らなかった。理由は後世の削平があり、掘方が深い溝状造構や土壤が確認された場所にあたる。遺構でいえばDY 80・91～94等が位置する。ZY 1・2・3について説明したい。

◎ZY 1（第24図）

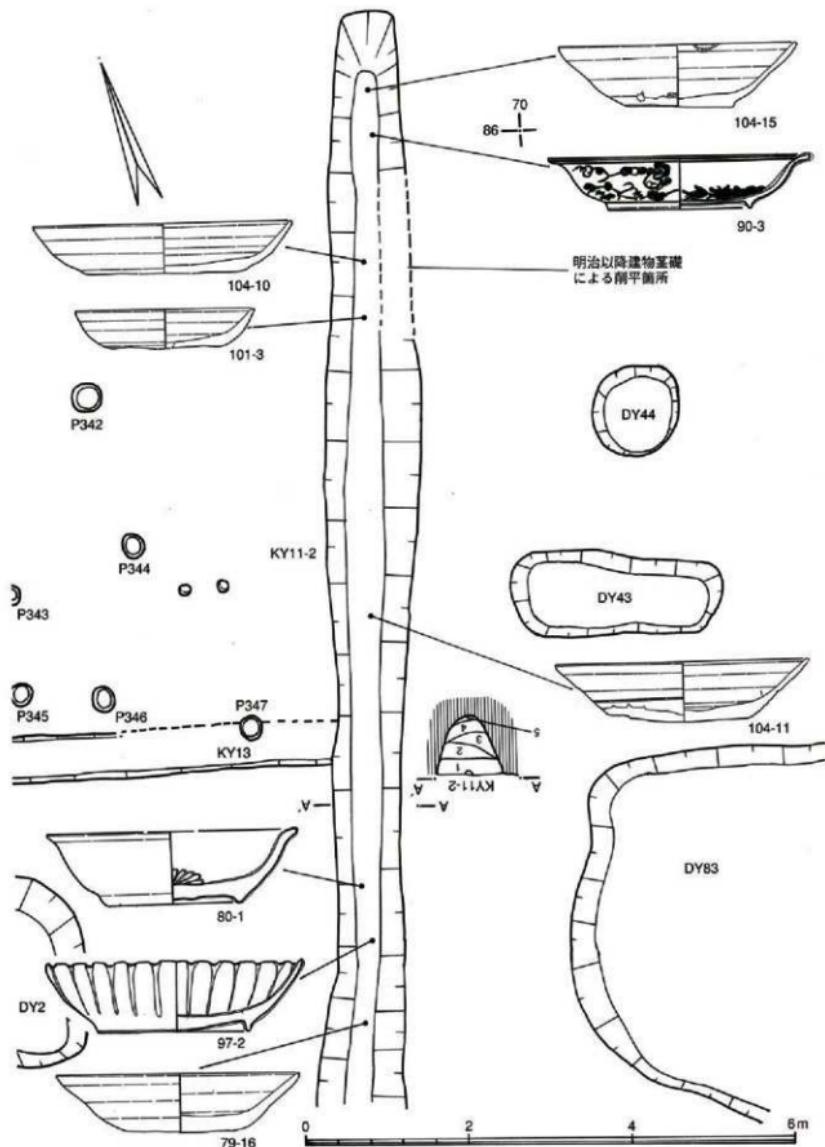
磁石は8点を確認した。第17図示すような構造であり、穴を掘って土と小砾を突き固めその上に磁石を配置している。建物跡は東西2間、南北西方1間、南北東方3間の変形を有する。

東方3.8m地点にWY 22・23の1間が付随するものと考えられる。間尺はほぼ正方形に構築され、南北西方3.70m、東方は(90cm×3.54m×90cm)、東西は(1.8m×1.8m)となる。大型の磁石建物跡と関連する蔵跡との見方が強い。

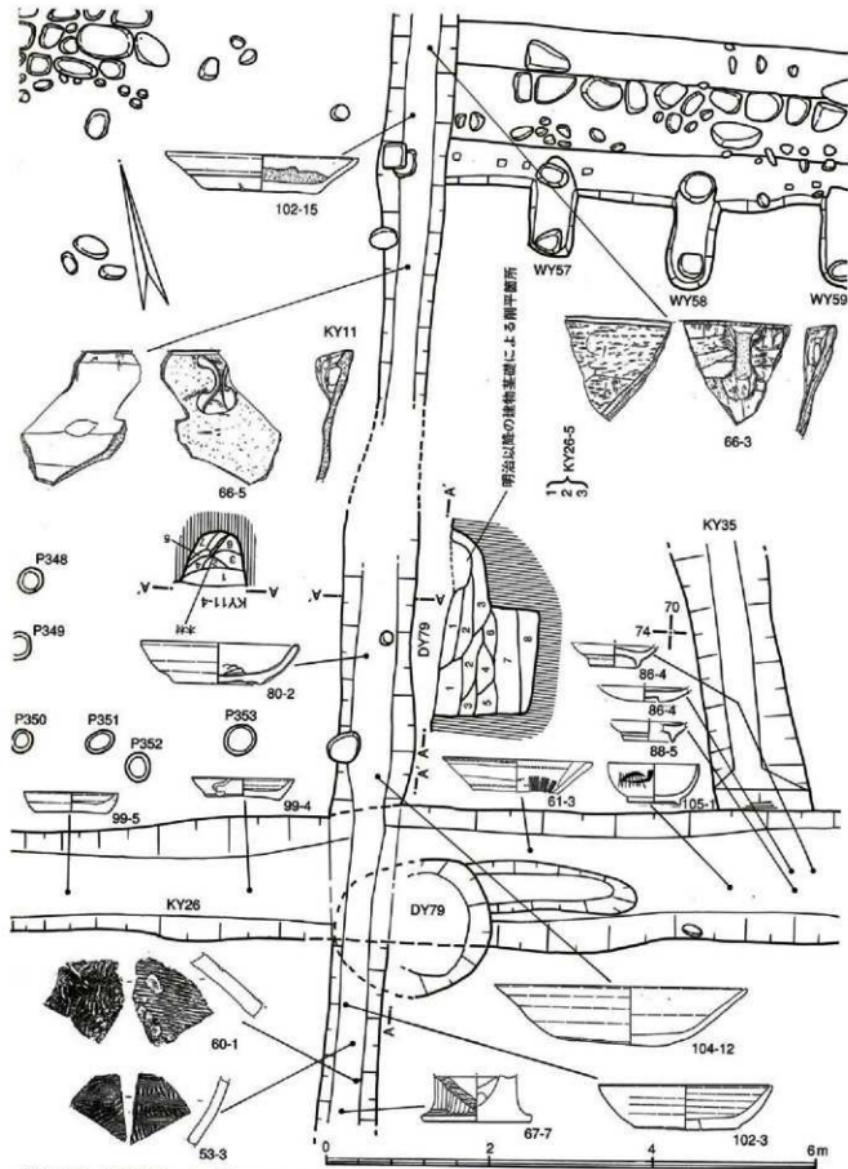
◎ZY 2（第25図）

東西27.3m、南北9.2mを有する大型磁石建物跡である。幅90cmの溝を掘り込んで、磁石を配置する工法であり、布堀式工法である。この形態を有する建物跡としては現存する藩主の墓所である御廟所に見られる。北東部は削平されているが、東西のコーナー部が確認されたので破線で示した。磁石は全部で35個が現存していたが、削平された箇所を加味すれば43～45個で構成される。磁石の間隔は2m以内の範疇におさまると推定したい。なお図面の中で西方に位置するDY 5は重複関係から言えばZY 2の布堀を削平して、構築した土壤である。覆土からは第86図11の完形小壺が出土している。相馬焼と考えられ17世紀以降に位置づけられる。

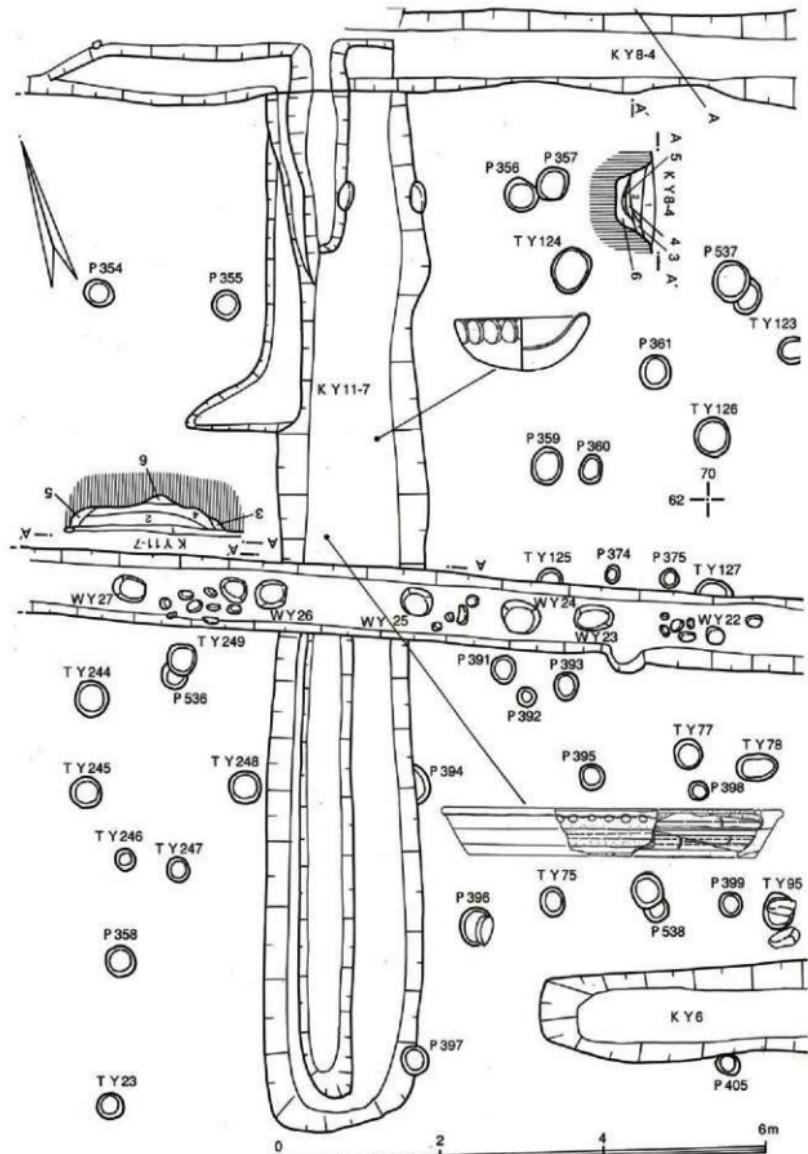
中央近くには南北に延びるKY 11、さらに東西に走るKY 8も交差する状況を呈する。これ



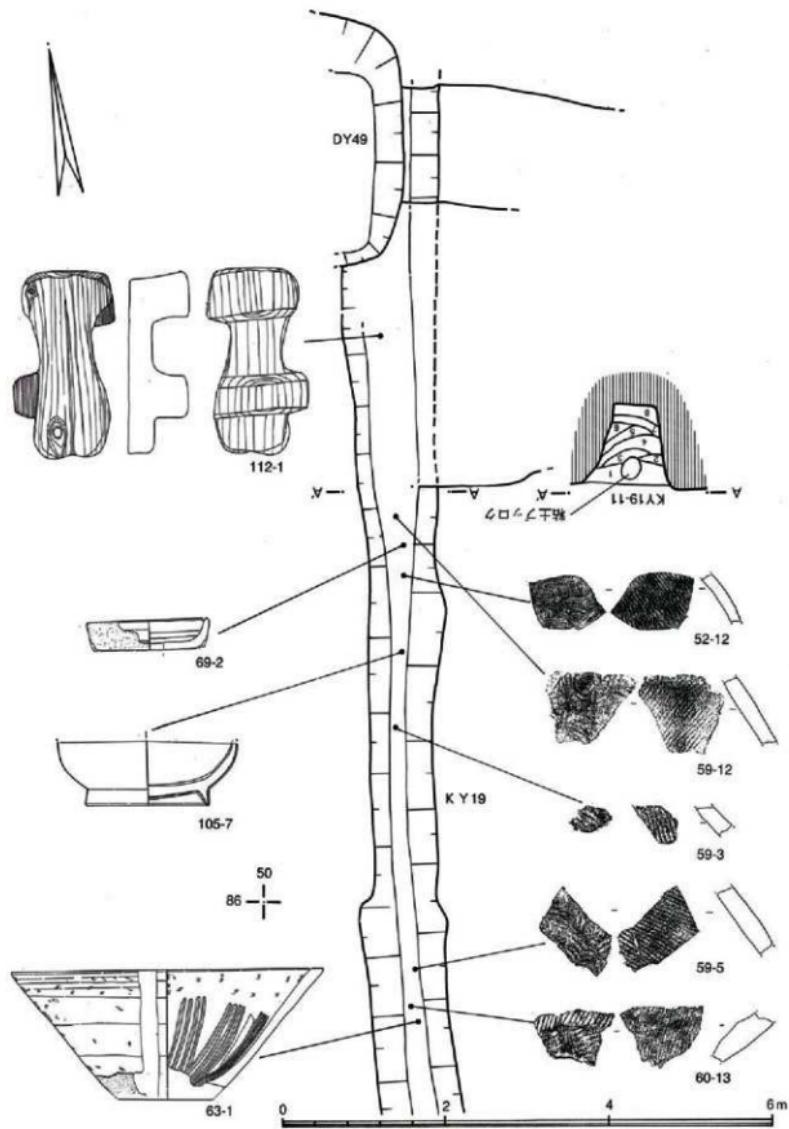
第16図 米沢城東二の丸跡 KY11-2 平面図 (3)



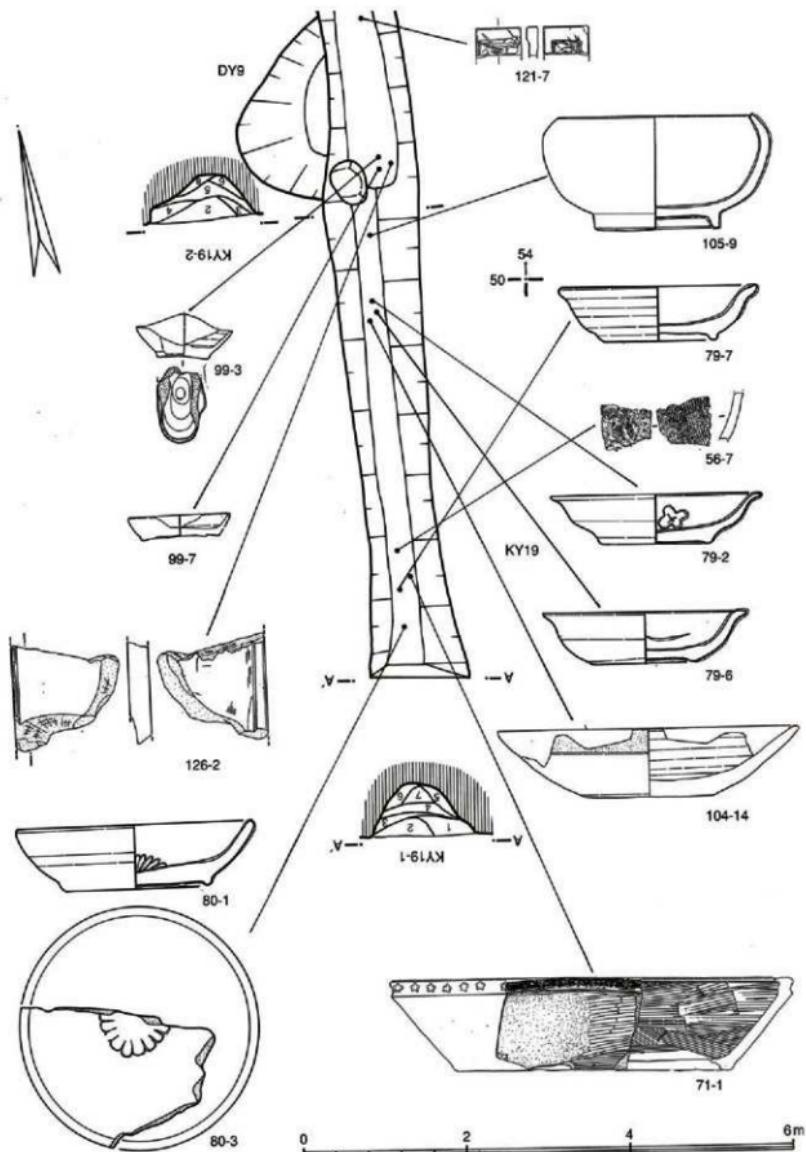
第17図 米沢城東二の丸跡 KY11-4・KY26-5, DY79 平面図 (4)



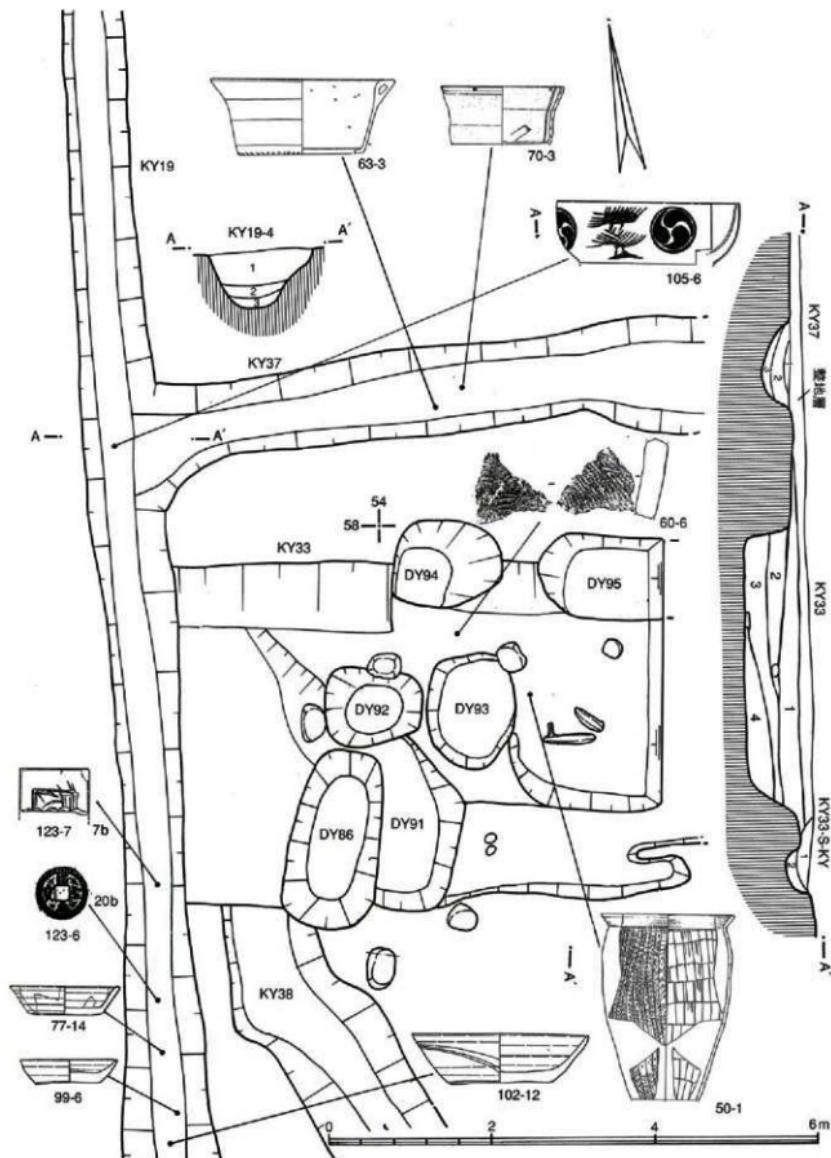
第18図 米沢城東二の丸跡 KY11-7・KY8-4 平面図 (5)



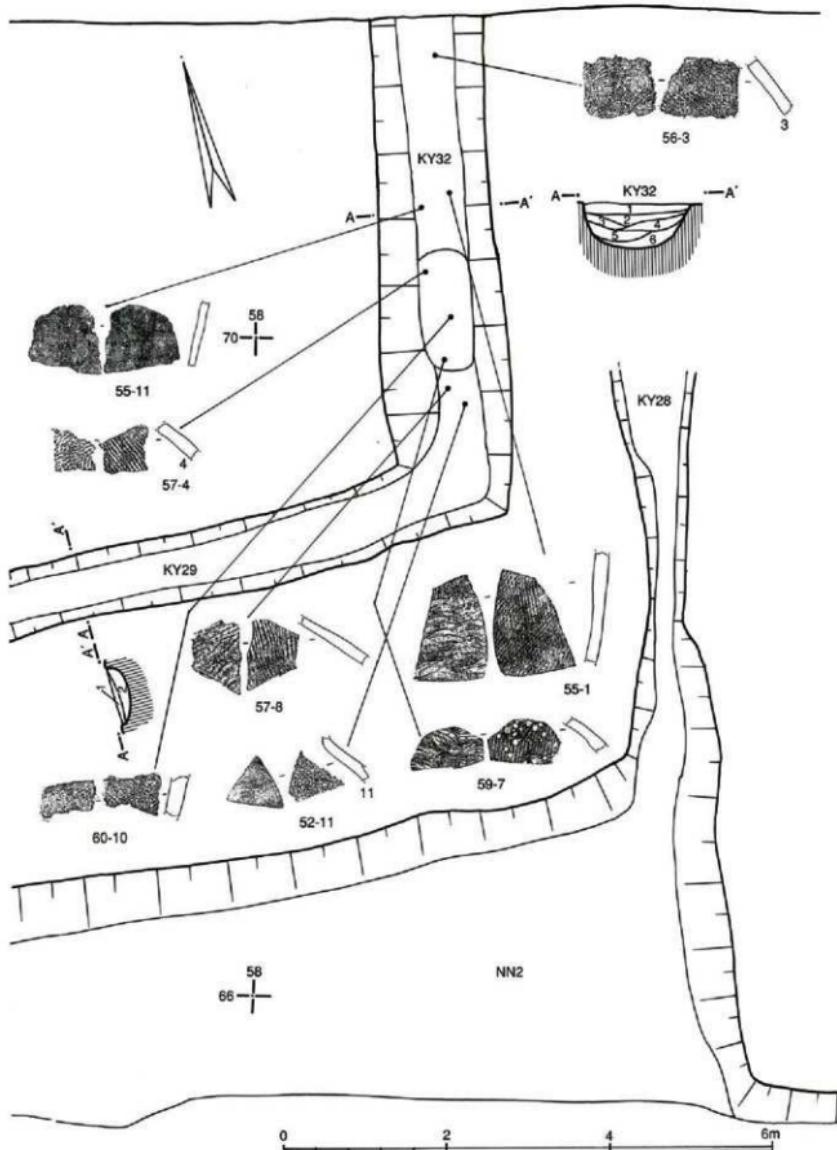
第19図 米沢城東二の丸跡 KY19-11 平面図 (6)



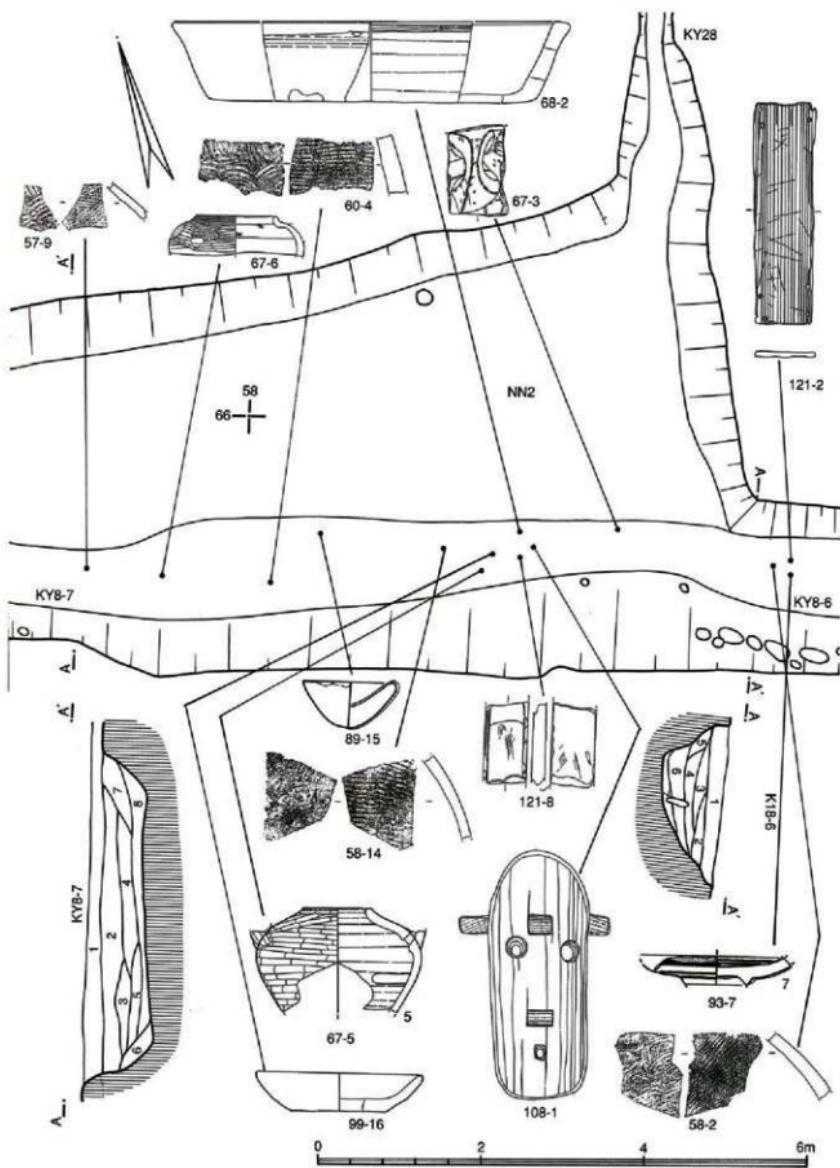
第20図 米沢城東二の丸跡 KY19-1, 2 平面図 (7)



第21図 米沢城東二の丸跡 KY19・4・37・33 平面図 (8)



第22図 米沢城東二の丸跡 NN2, KY28・29・32 平面図 (9)



第23図 米沢城東二の丸跡 KY8-7・6 平面図 (10)

らの遺構は時間的差をもって構築されたものであり、覆土に相異が認められた。

南方に位置するKY 6は東西13.8m、幅1.20m、深さ1.20mを有する規模であり、覆土は焼土で占められる堆積状況であった。

ZY 2に関連する溝状遺構はKY 40から別れるKY 1が推測される。KY 1とKY 5の分岐点に樋を配する溝状遺構である。ZY 2の流し場に通じる水路として構築された可能性が強い。

◎ZY 3(付図)

前述したZY 2の南方13.6mに位置し、形態はZY 2と類似する。この2棟の礎石建物跡は計画的に地割し、構築したことは間違いない。両者とも中世期の建物跡が集中する範囲にあたるのは地盤がしっかりしていることの証明でもある。

ZY 3の礎石は取り除かれて、布堀だけの確認であった。南方のやや幅の広い堀り方は近代の遺構である。南東にはDN 3とした井戸跡が発見されている。位置から判断して、この礎石建物跡に関連すると考えたい。以上3棟の建物跡について述べた。いずれの掘方からも伴出した遺物は認められなかった。

(2) 石組水路跡と杭列 (第26図~第28図 付図)

TN 1とした石組水路は二の丸堀端部から東西に配置された遺構と考えられる。これと一緒にON 1とした柵列が並列する構造であり、さらにWY 50~78を伴う。この三形態の遺構は同時期に構築されたもので、石組水路に柵列が伴うものである。柵列は堀に沿って南に延びる。柵列は角柱を配した痕跡を有する。

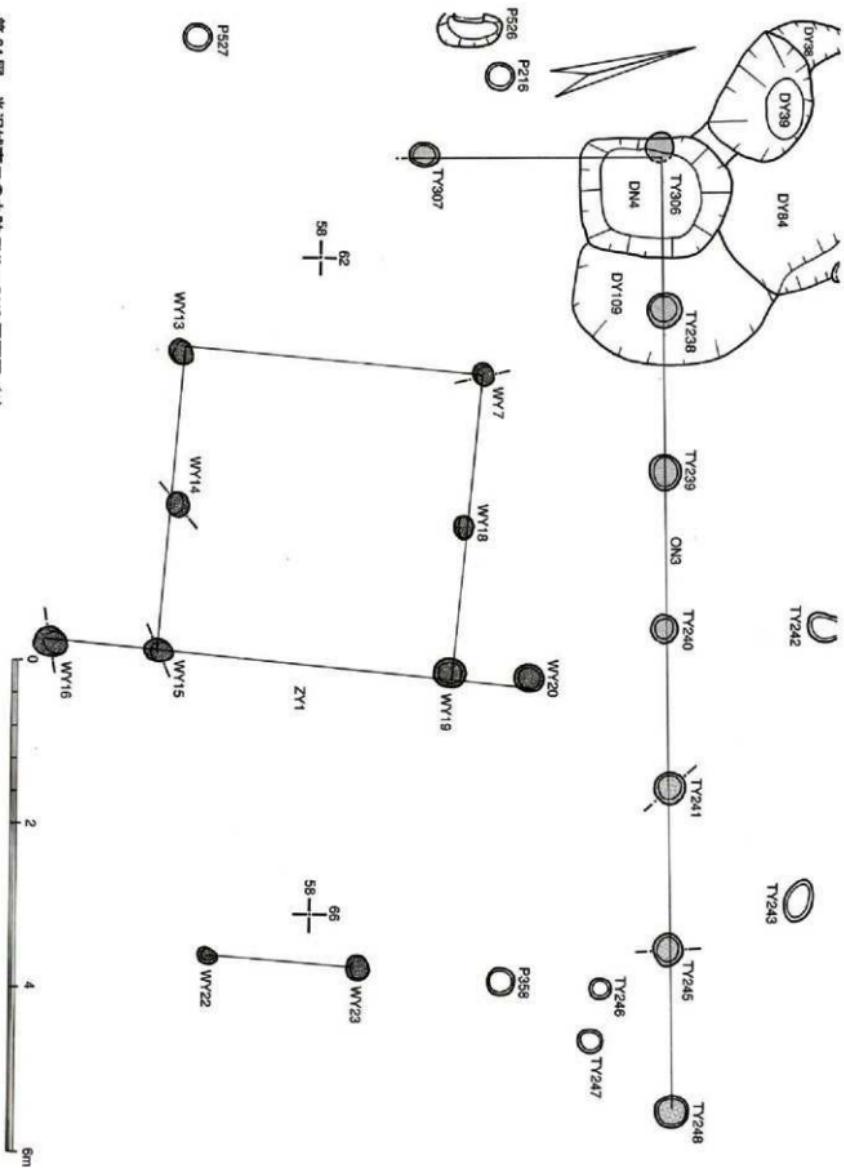
石組水路は上面に玉石が敷かれていた。機能を失った時点で埋めたものと理解したい。使用されている石材は本市の西方に位置する矢子山の岩石を使用している。方形に整形された割石である。全長58mを今回の調査で確認した。西方にまだ延びる様相を呈する。幅は1.2mを測り、堀方は1.8mある。西側に柵列の堀方があり、柵列には1.8m間隔で梢円形の堀方で礎石を2個を組み合せた構造となっている。

石組水路の底面は薄く剥離された石材が使用され、透き間には粘土が貼付された手法であった。なおこの遺構の石材は番号を付けて保存してある。石材の産出地である矢子山は石切山とも呼ばれ、昭和の中頃まで操業されていた。現存する万年堂や石の祠等はこの山の石材を使用している。特に万年堂は置賜独特の形態と言われ、直江兼続の発案と言われている。柵列は水路と並列するものであり、上部構造を想定すれば築地堀が連想される。ただし築地堀は瓦で屋根をふいた土堀のことであり、今回の調査で瓦は発見されていない。このことから、屋根はこぼぶきと考えられる。従ってこの遺構の上部構造はこぼで屋根をふいた土堀という構造であろう(以下築地堀と言う)。

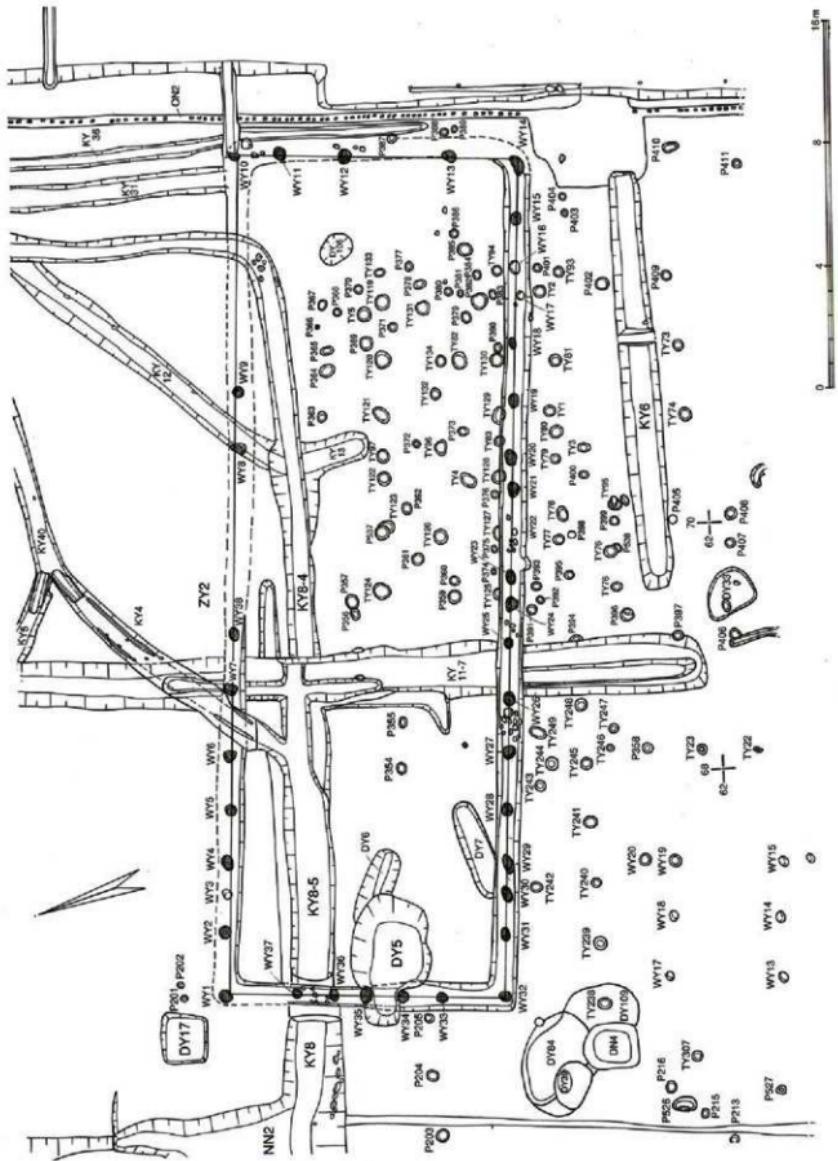
柵列は石組水路が堀の端部に位置する場所から南に延びる。角列だけの構造となり、55mに渡って確認されている。角列は10cm×5cm位方形で20cm間隔で立ち並ぶ構成である。堀に並列する土堀に直下に構築された施設と考えられる。なお寛永17年の絵図面にはこの柵列がある場所には門や櫓等の建造物は見当たらない。

整理すると、石組水路に築地堀を伴う遺構が東西長に58m確認され、角柱列が南北長55m

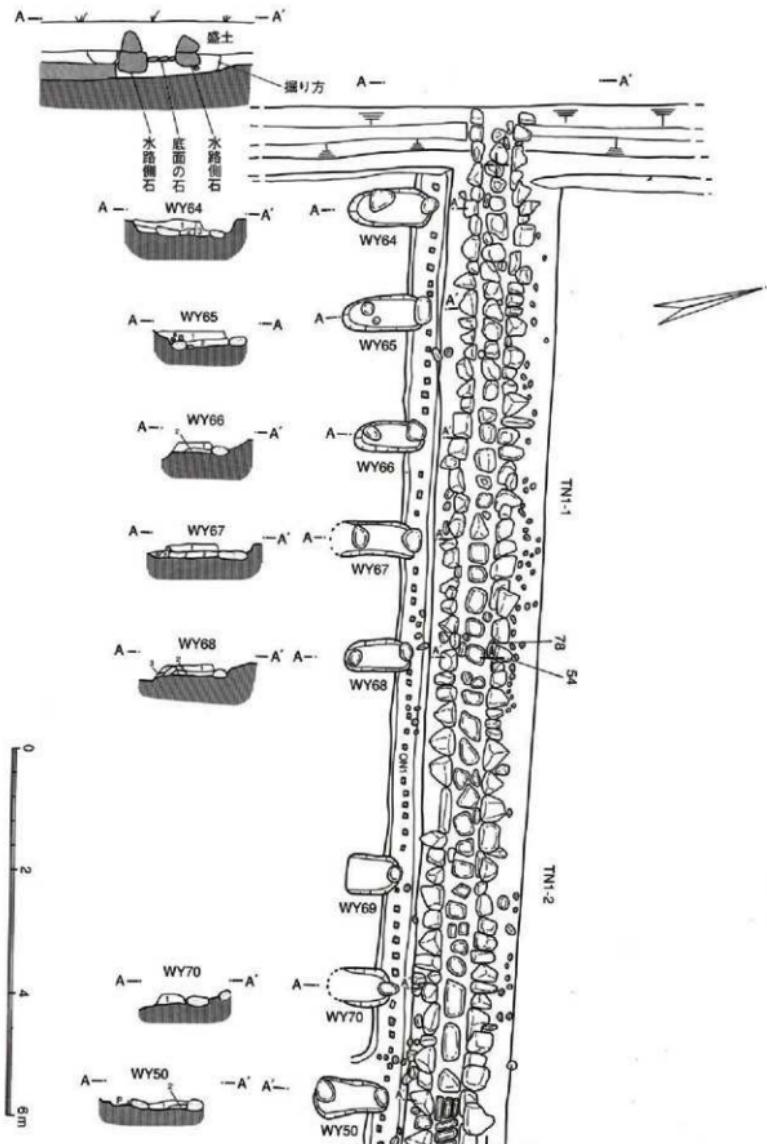
第24図 米沢城東二の丸跡 ZY1・ON3平面図(1)



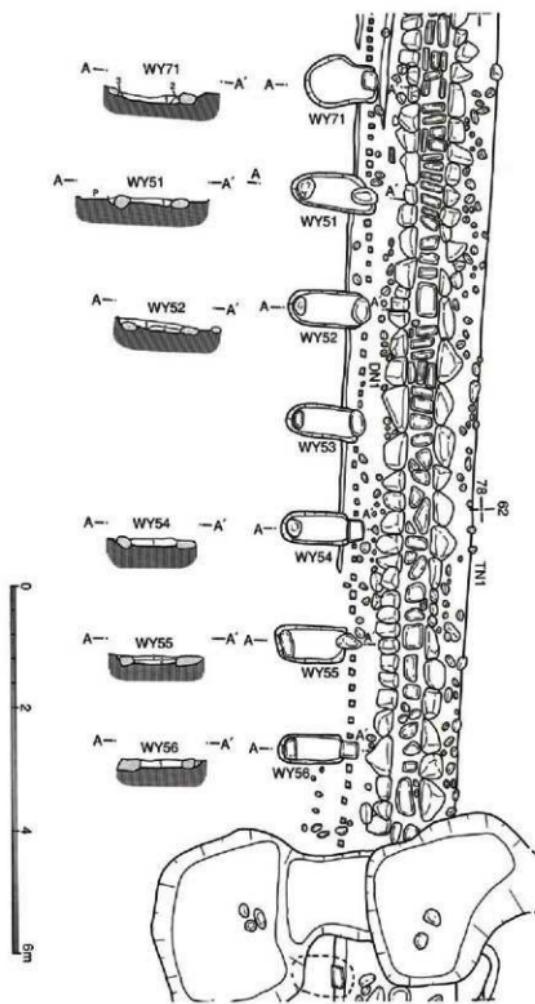
第25図 米沢城東二の丸跡ZY2平面図 (2)

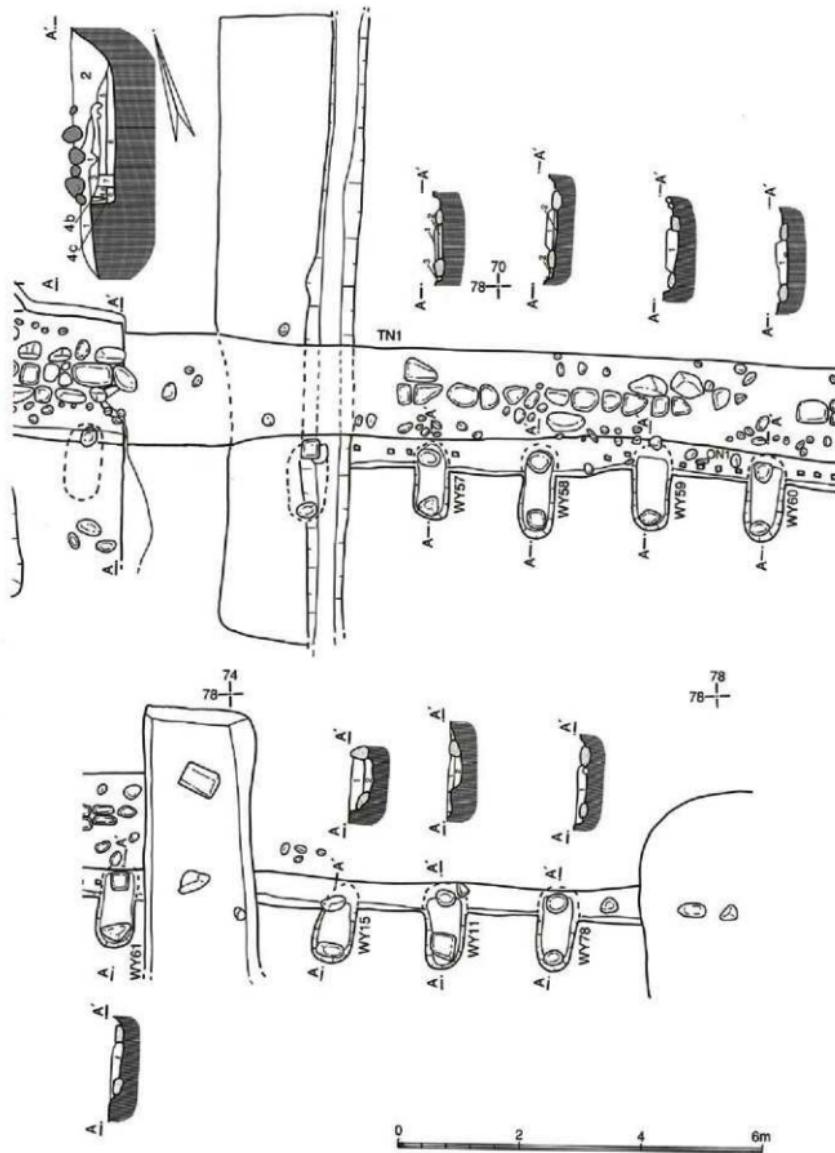


第26図 米沢城東二の丸跡 TN1-1, 2平面図 (1)



第27図 米沢城東二の丸跡 TN1・3・4 平面図 (2)





第28図 米沢城東二の丸跡 TN1・5・6・7・8 平面図 (3)

確認されたことになる。これらの遺構はZY 1～4に認められる工法と類似する点や絵図の検討から同時期と考えられる。年代は創建期から寛永年間と推測され、近世の遺構に位置づけたい。

(3) 溝状遺跡構（第29～35図）

調査区のほぼ全域に分布している。中世期に位置するKY 11・19を除く44基が近世に構築された遺構群と想定できる。中世の遺物を出土した溝状跡もある。これは中世の遺構からの流れ込みと考えられる。出土遺物としては、肥前磁器・瀬戸・美濃・相馬産陶器・产地不明の摺鉢、かわらけ、木器類が認められる。少量であるが中国産染付も出土している。遺物の中には明らかに明治以降のものも含まれていたが、削平箇所からの混入であることから除外した。溝状遺構の構築理由は飲料水・排水路・庭園の施設が上げられる。建物の変容によって場所を変え堀られた結果、多数存在するものと考えたい。出土遺物や絵図等の重複関係を吟味して下記に述べたい。

◎KY 4・5（第29図）

調査区の東中央部から西へ16m延び、二方向に別れる溝状遺構である。分岐箇所には樋が設置されている。樋については第121・122図に示した。樋は大木を半割にして、中を割り貫いた形態で木目から判断して針葉樹の一種と考えたい。長さは1.2m、幅は65cmであり、下に台木を配してあった。北西に延びるKY 5には全域に樋を施した痕跡が認められるが、すでに腐食しており、縁辺の杭だけが現存していた。覆土からは第97図の中国産染付小皿や「永樂通寶」、第71図3の七厘が出土している。染付皿は16世紀代の所産である。I期のZY 2には関連する遺構と考えられる。

◎KY 6（第30図）

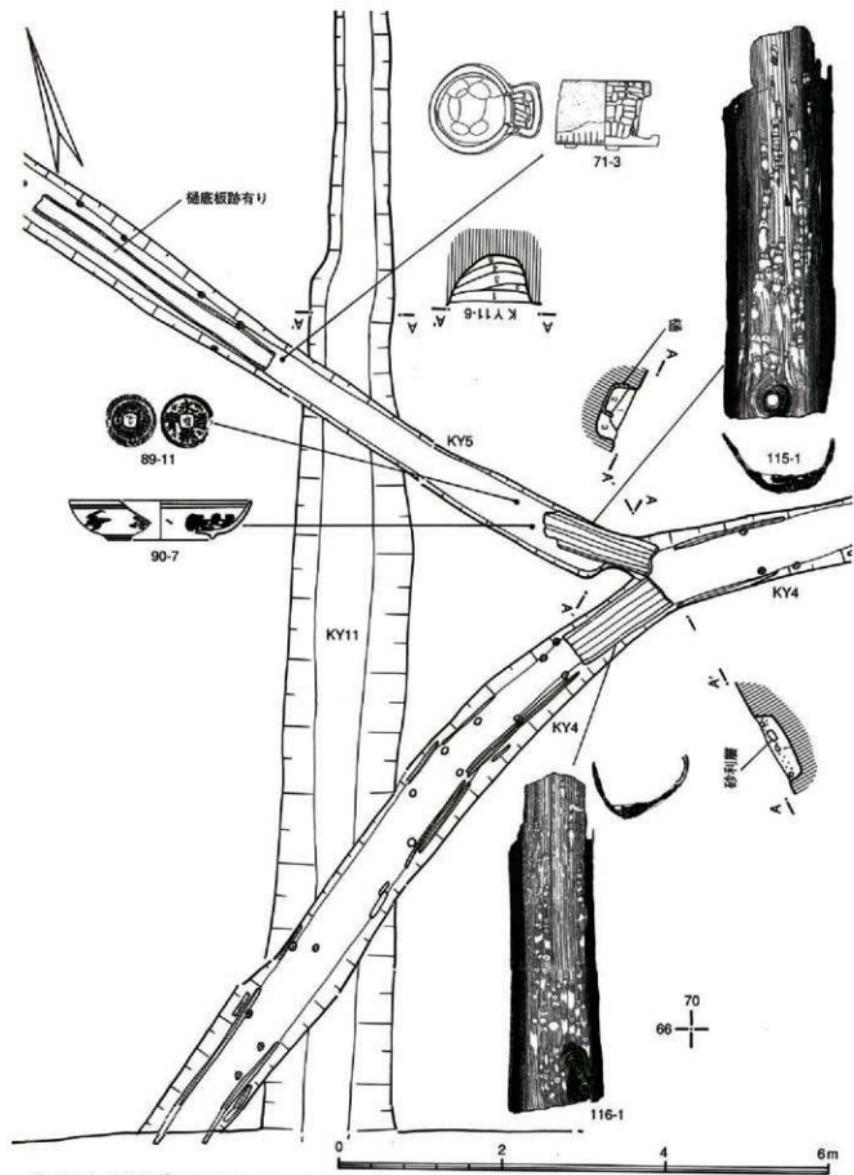
礎石建物の南方に位置し、東西長13.8m・幅1.2m、中央部が最深で90cmを有する。断面形態は「U」字形を呈する。覆土は焼土で覆われ底面からは第108図3の「パイ」、第109図の楔形木製品が出土している。年代を示す遺物が出土しておらず、明確に言えない覆土から判断して、18世紀代に埋没した遺構と考えられる。

◎KY 9（第31図）

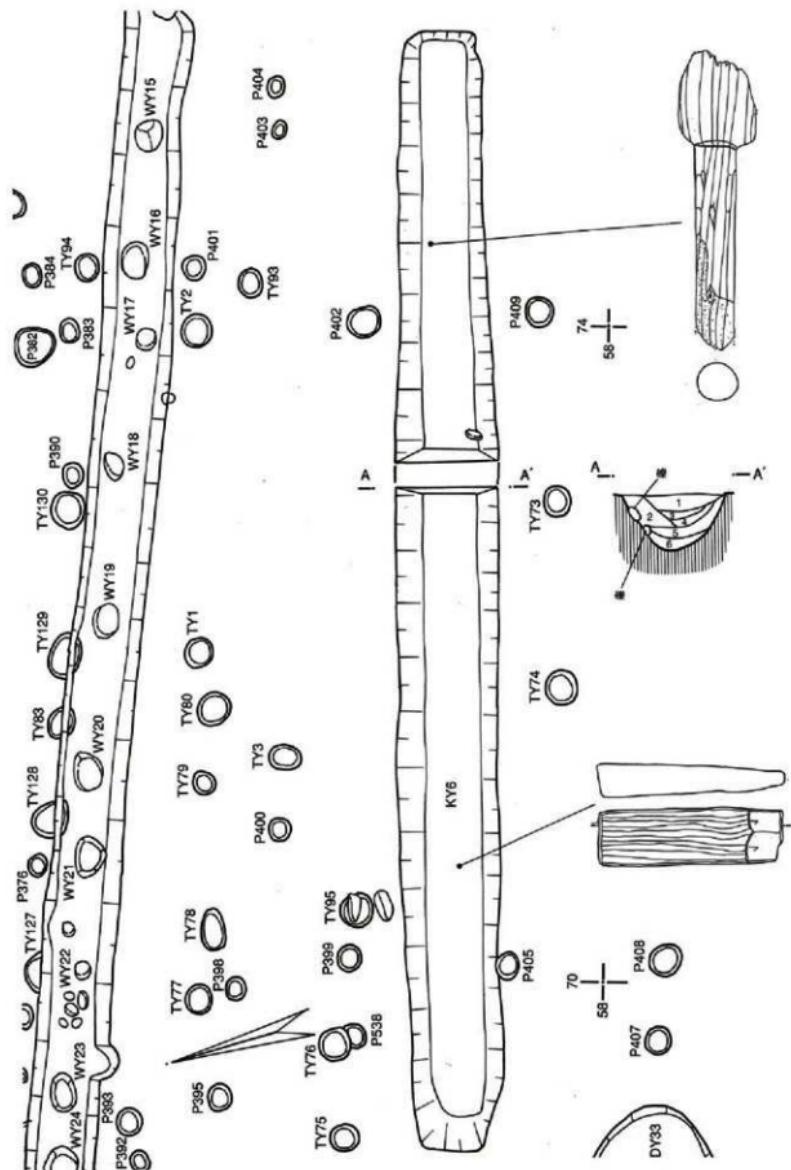
幅1.6mを有し、南北長に14.6mを確認した。南に延びる溝状遺構である。覆土や断面形態から判断して、掘立柱建物跡の時期に掘られた可能性をもつ。

◎KY 8（第32・33図）

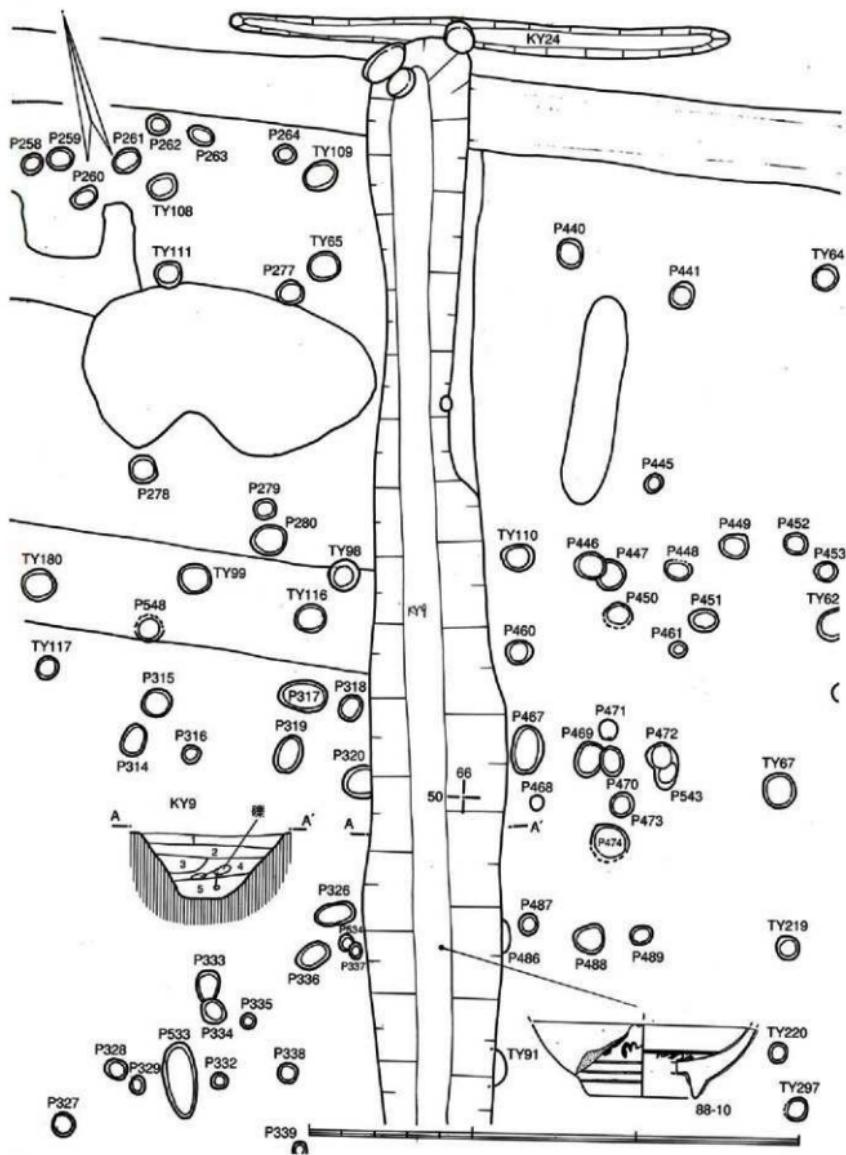
調査の中央やや南方に位置する東西長の溝状遺構であり、東方堀跡近くで北方に曲する形態である。ZY 2を削平して掘られており、ZY 2の廃絶後に掘られたと推測される。西方箇所でNN 2とした池跡と合流する。幅が広くなる部分であり、重複している。底面からは瓦器質土器が出土しており、覆土に相異が認められた。このことから上面が近世、下層は中世に位置づけられる。東方の北方に曲する箇所で第61図1の摺鉢が出土している。瓦質の遺物であり、古いタイプである。年代としてはZY 2廃絶後の17世紀後葉から末葉に位置づけたい。ちなみに大乗寺が焼失するのは延宝2年（1674）であり、この後の構築と想定される。この火災後大乗寺は元禄15年（1702）と元文元年（1736）、天保5年（1834）と火災にあってい。



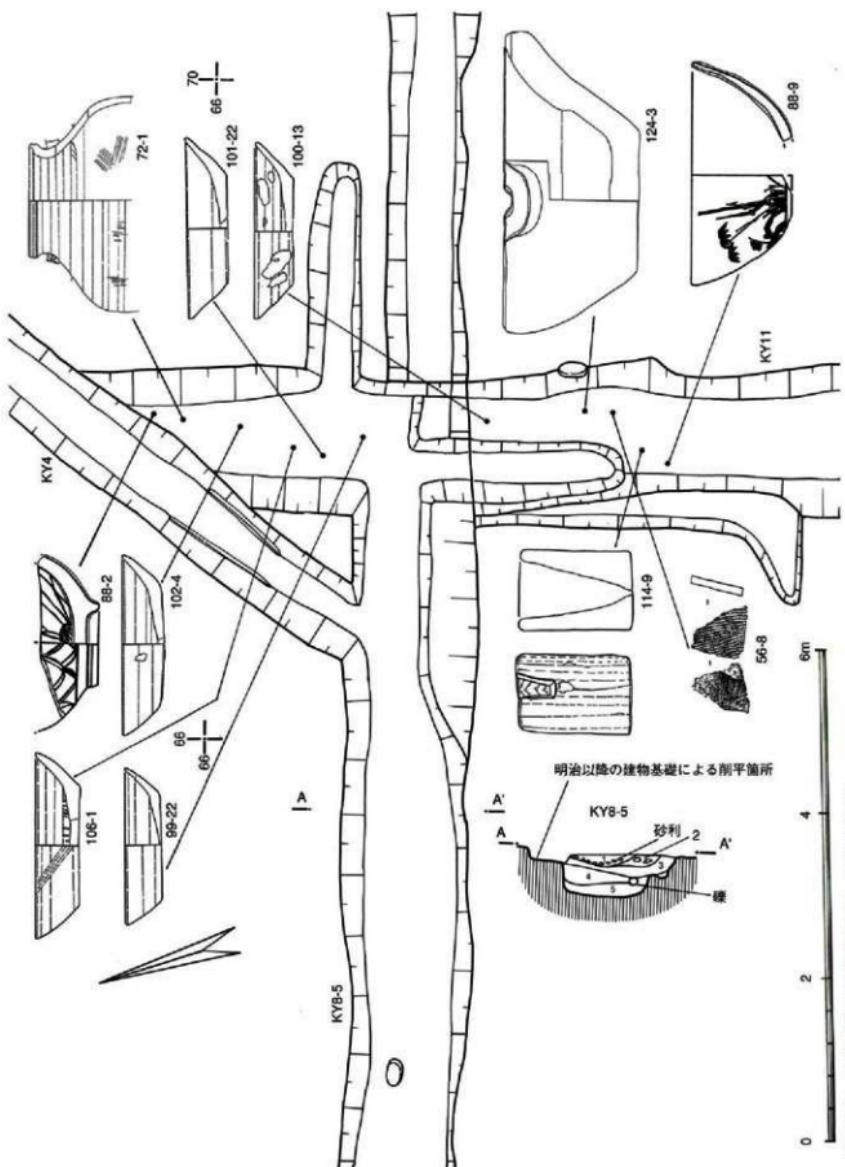
第29図 米沢城東二の丸跡 KY4・5 平面図 (1)



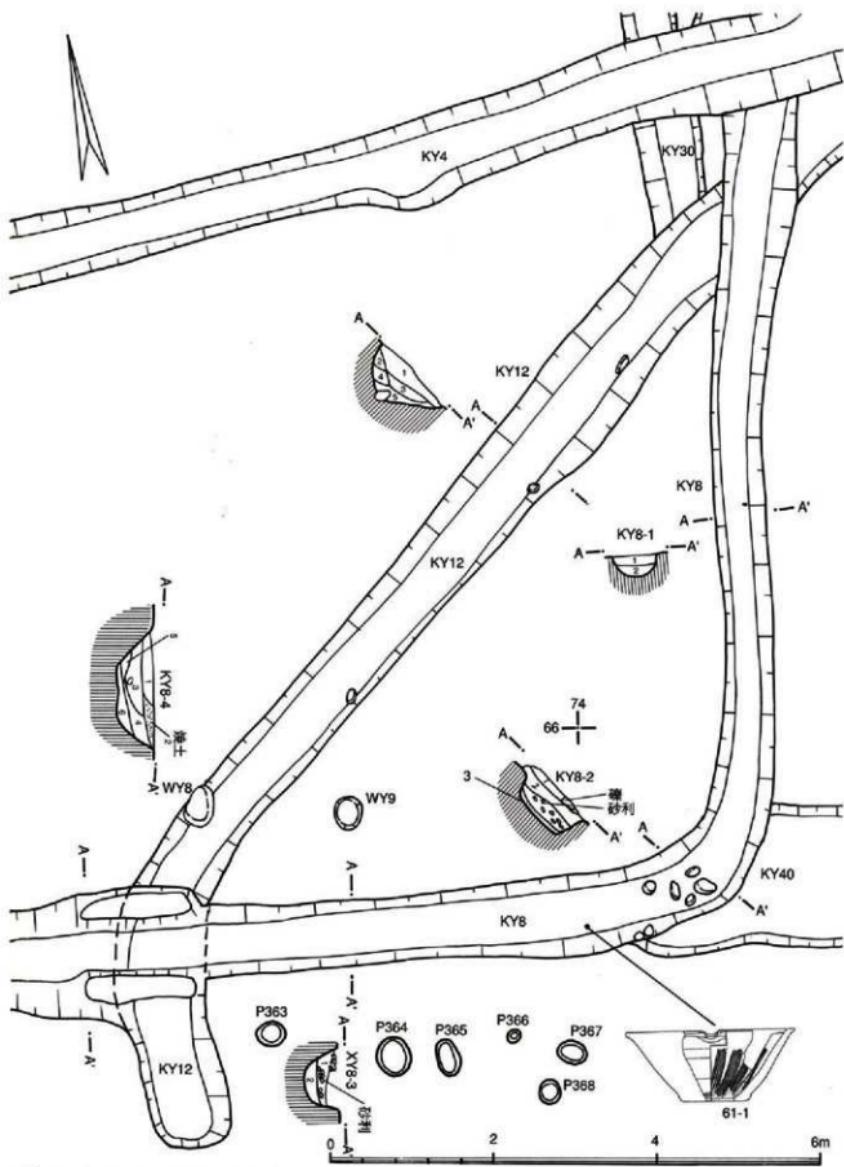
第30図 米沢城東二の丸跡 KY6平面図 (2)



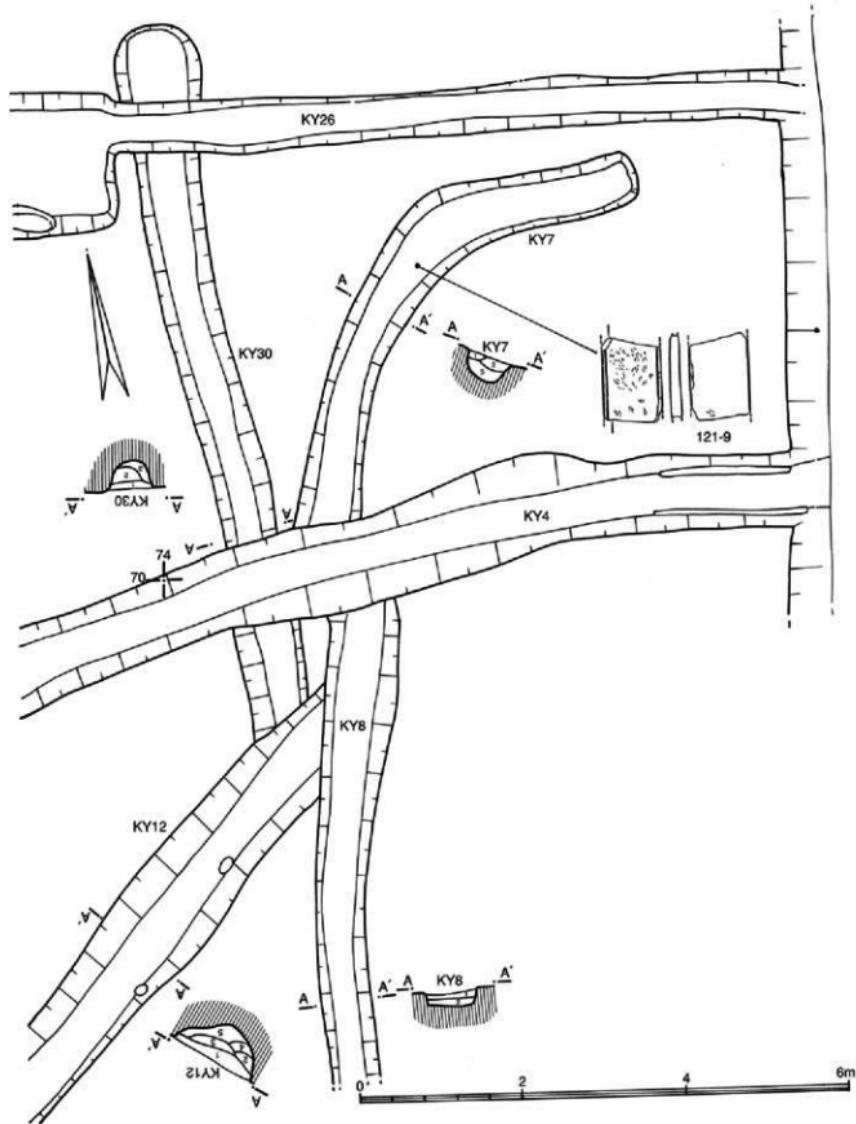
第31図 米沢城東二の丸跡 KY9 平面図 (3)



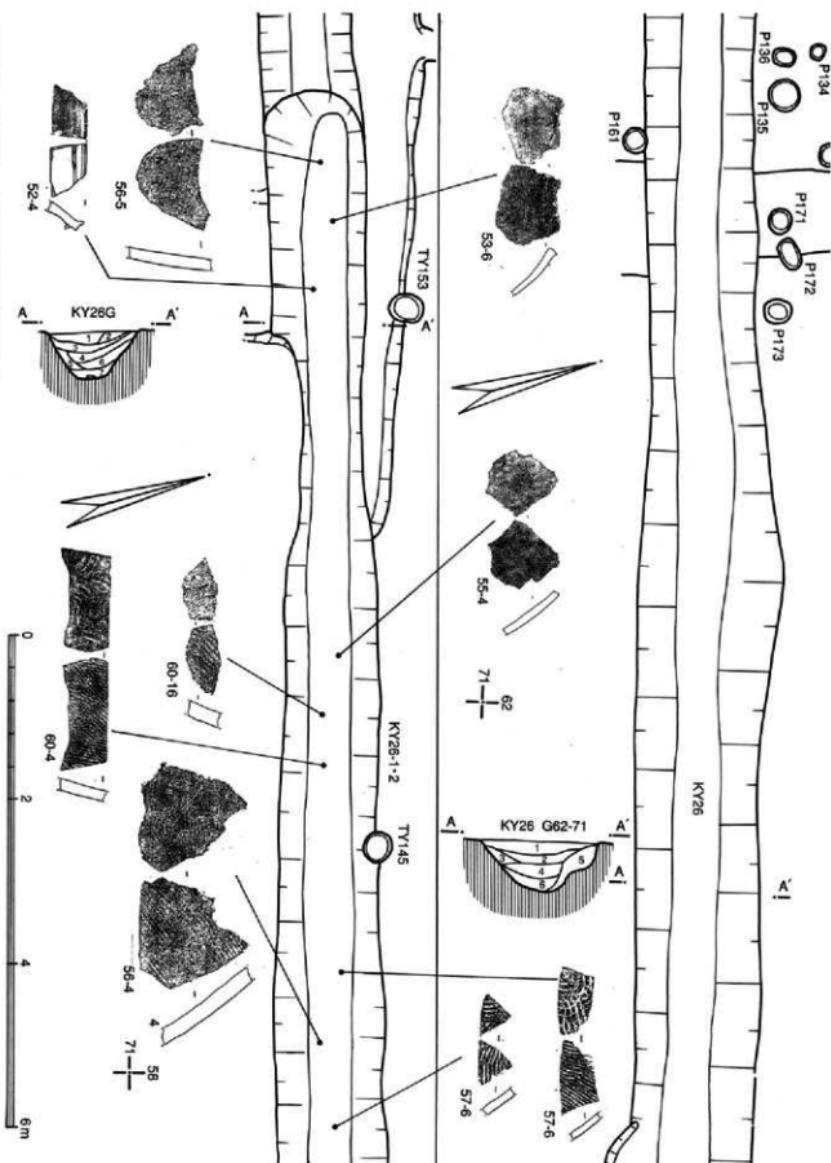
第32図 米沢城東二の丸跡 KY8-5平面図 (4)



第33図 米沢城東二の丸跡 KY 8・12・13平面図 (5)



第34図 米沢城東二の丸跡 KY7・12・30 平面図 (6)



第35図 米沢城東二の丸跡 KY26 平面図 (7)

◎KY 12・30・40（第33・34図）

調査区の東方中央部に集中して確認された。KY 12はKY 8・30と重複する。幅は80cmから1m、深さは平均で50cmを測る。遺物はほとんど認められなかった。覆土に多量の砂と小砾を含む特徴を有する。焼土を含まないことからKY 8とは年代差があり、重複関係からすればKY 8以前の年代が想定される。17世紀と推測したい。KY 30は南北に8.6mを確認した。KY 4やKY 12の重複関係からすれば17世紀初頭の溝状遺構である。KY 40は幅が広く深い形態であり、KY 30・31と重複している。ZY 2の礎石を削平して掘り込んでおり、従ってZY 2以降の年代となる。

◎KY 7・26（第34・35）

南方に位置するKY 8から続くと考えられるのがKY 7である。ただし、断面形態が異なることから北方をKY 7とした。覆土から第123図9の硯が出土している。遺物から判断して18世紀代と考えられる。図の中ではKY 4の掘り方が深いことからKY 7・8・30を削平しているように見える。

KY 26は東西に延びる。全長55mを確認したが、まだ西側に延びるものとみられる。幅は平均1.2mあり、深さ1.2mある。覆土から須恵器甕片が出土しているが、KY 11を掘り込んでいることから、須恵器の年代ではないことは明らかである。覆土に近世の遺物が少ないので、この各時期を通して機能していたことも考えられる。覆土は人工堆積であり、固くしまった土質で底面には砂層が認められた。

◎KY 3・13・15・17・18（付図）

調査区の北方東部に位置する遺構群である。浅く幅の狭い形態であり、覆土からの遺物は確認されなかった。近世の建物群に関連するものと考えられる。

◎KY 20・22・24・33・36・38・45・46（付図）

調査区の南北に位置する遺構群であり、KY 33を除き北方の遺構と形態が類似する。KY 33は削平や攪乱が著しく、全容を解明するには至らなかった。形態としては幅3.6mで東西に延びる大型の溝状遺構と考えられる。底面は明緑灰色の土色で、瓦器質土器が少量出土した。

以前から小河川として存在したもので、上面の覆土は版築して埋めたもので粘土と土を混合していた。地盤がやわらかい場所であったことから、このような埋め方で平坦地を整地したと思われる。上面は焼土で覆われていた。

（4）土壤（第36～48図）

今回の調査区からは90基を確認した。出土遺物や重複関係・覆土から吟味すると大半は、近世に構築された土壤群と言える。特にDY 1は遺物を多量に含む形態であった。土壤は平面形狀や、断面形態から3形態に細別した。これらの土壤群は調査区の北方及び南方に多く分布している。形態別にA～C形態の順で述べる。

◎A形態（第36～40図）

平面形状が梢円形状や長円形状を呈し、「U」字形の断面形態を有する。深さは20～50cmと浅く、長径0.5～1.2m位の規模である。最も多く認められる形態で、67基を数える。覆土は1層から3層が認められ、自然堆積を呈している。覆土に遺物を含まない土壤が多い。代表的な土壤としては第48図DY 77がある。伊万里染付皿が出土している。18世紀に位置づけられ

る遺物であり、土壙も18世紀以降となる。

A類の土壙67基は次の通りである。DY 2・6～9・11・13・14・16・17 A・17 B・18～20・23～33・35・38・39・41～44・72～77・79・81・84～86・88～95・98・100～112・119の土壙群である。これらの中には、奈良・平安期・中世の遺物を伴出するのも認められるが流れ込みと考えられ、近世の土壙群とした。

◎B形態(第38・40～43・45図)

方形状の平面形状を呈し、竪穴状に掘り込んだ形態の土壙群である。DY 1・4・12・21・49・63・80・82・87・99・114～116の13基が存在する。第41・42図で示すDY 1・99の他にDY 113が重複する図面になっている。これは掘り上げて判明したものであり、方形状に一括される形態であった。従って、DY 99・144を含めて、DY 1と呼ぶことにする。上面は若干削平を受け、遺物が周辺に散乱する検出状況であった。

出土遺物は総数1,542点であった。かわらけが最も多く334点、次いで染付陶磁器309点、陶磁器224点が主流である。他に瓦器質土器、輸入陶磁器が少量含む程度である。出土遺物から判断して、18世紀の土壙である。図化できた遺物を一括して示した。

覆土、黒色焼土が全体的に認められ、出土した遺物は二次焼成を受けているのが多い。土壙で焼成したものではなく、他の場所で二次焼成を受けた遺物を廃棄した土壙である。

第38図で示したDY 4は長さ3.2m、幅1.8mを測り、深さは60cmある。底面にピットが2箇所認められ、壁は直角に立上がる。出土須恵器は混入したものであり、年代の決手とはならない。半地下式の小規模貯蔵穴と考えられ、形態から察して食料を貯蔵するための土壙であろう。

第43図のDY 63・80は中世期の遺物を出土するがKY 19と重複していることから吟味すると近世が妥当と考えられる。東に隣接するDY 82は竪穴住居跡とは考えにくい状況であった。

DY 49は全体の約3分の1を完掘した土壙で覆土からは第108図1・2の木製品が出土している。1は刃形、2は人形を呈するもので、祭祀的要素を有する土壙と考えられる。他に第81図2の信楽の茶壺が出土している。16世紀から17世紀の遺物である。

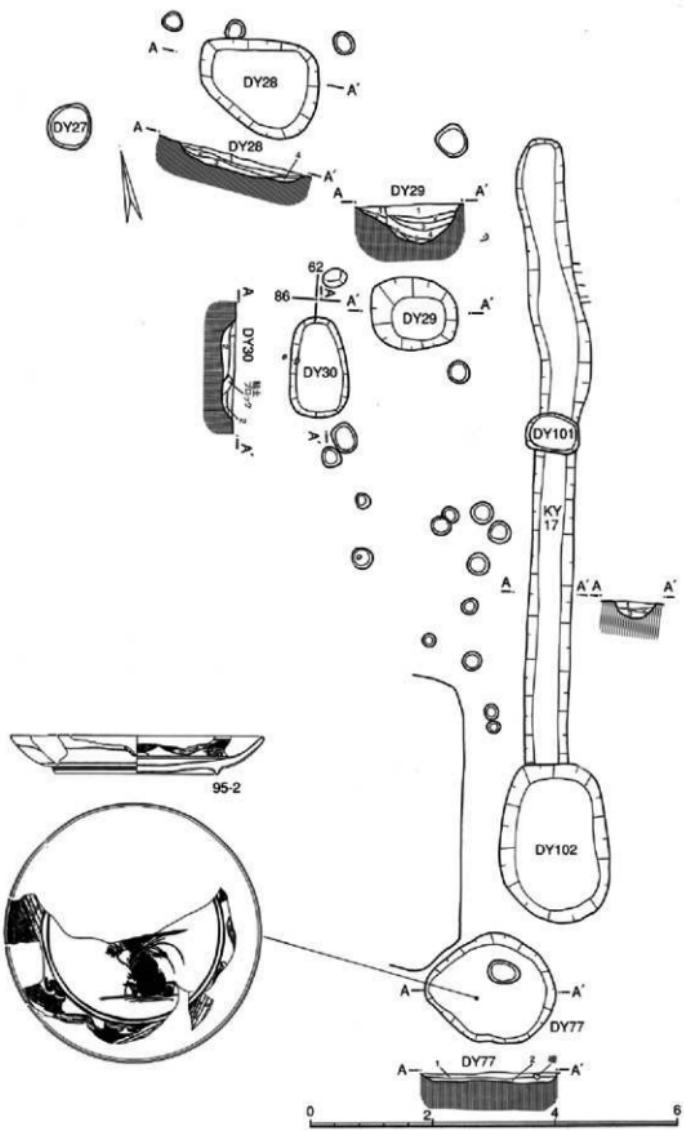
◎C形態(第44・46～48図)

大型で円形状や橢円形、不整円形状を有する土壙群であり、深く掘り込んでいるのが特徴である。DY 83は上面が削平された箇所の検出であり、本来の形態を想定し本群とした。木器類を多数検出した土壙群である。特にDY 36からは箸がまとまって出土している。伴出した染付陶磁器から18世紀以降の遺構と判断している。DY 5・10・36・37・40・62・83の7基がある。

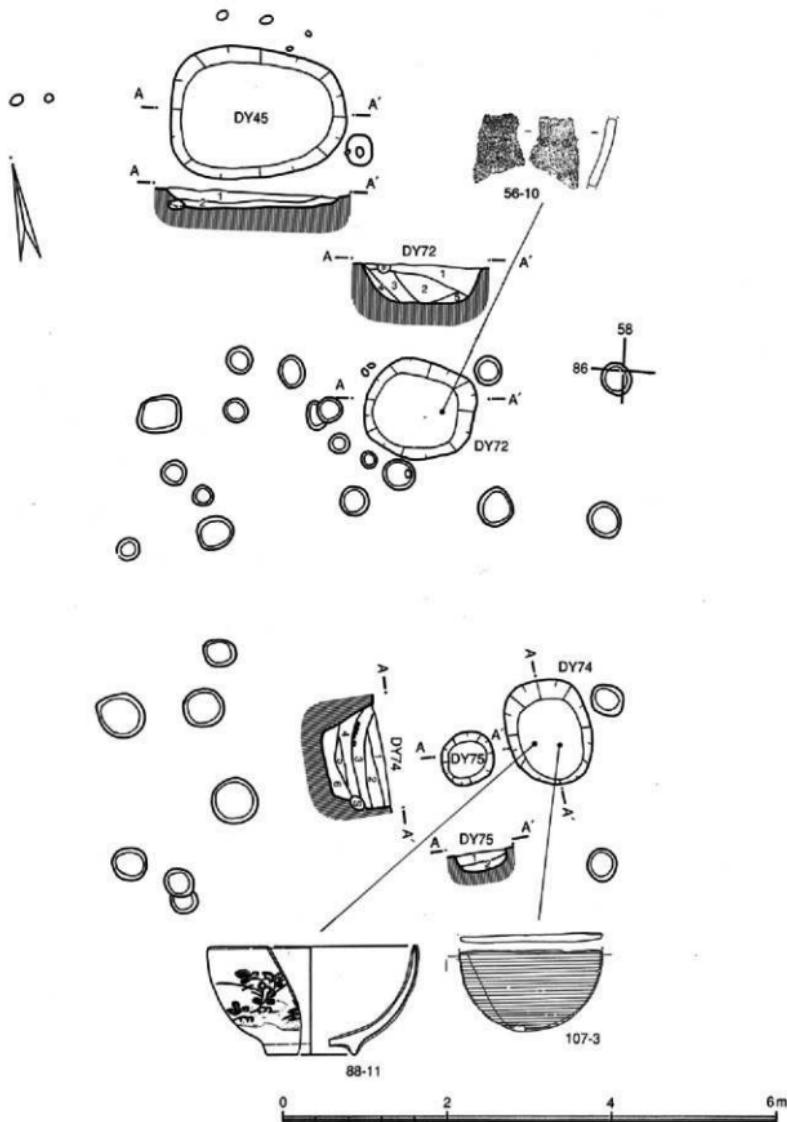
DY 36と重複して、DY 40がある。DY 36の底面から確認したものであり、DY 36の上面ではプランは確認されなかった。DY 40の底面からは下駄やこずか着装柄等が出土している。

DY 36の南方にはDY 62が位置し、DY 36を削平して掘り込んでいる。覆土からは漆器・かわらけが出土している。漆器の底面に「吧」の刻線がある。

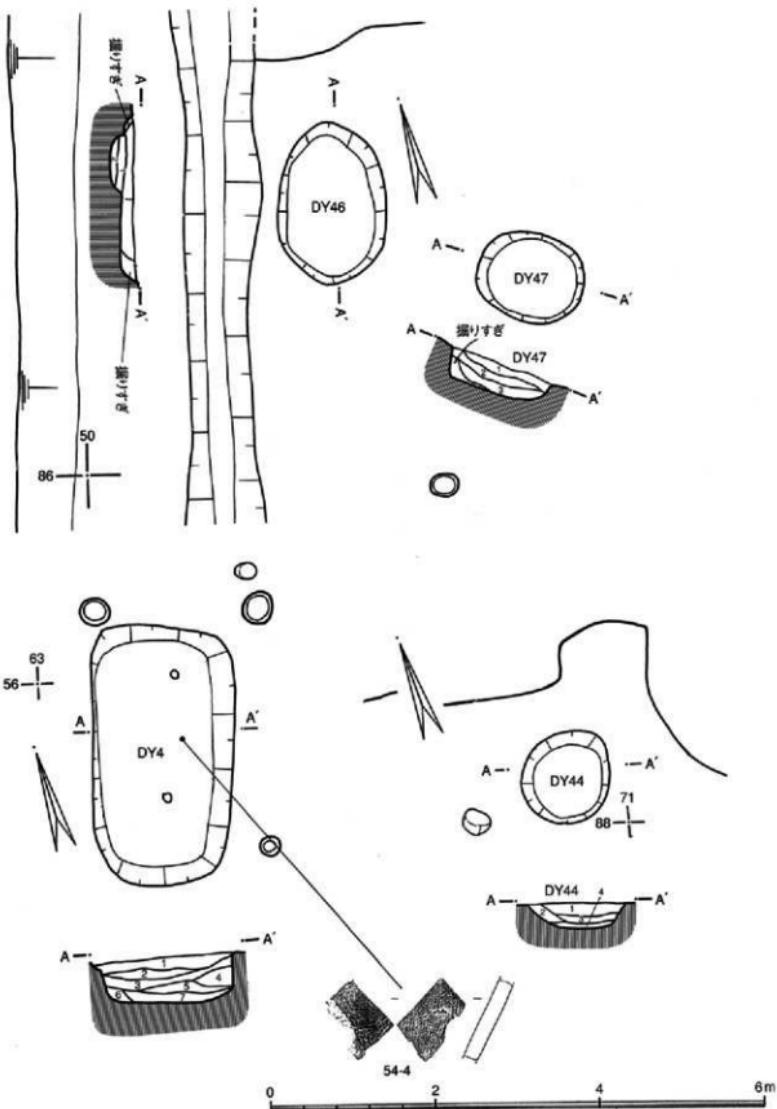
調査区の南方に位置するDY 10・37は調査区範囲外に延びることから全体を完掘することはできなかった。東側のDY 37はC類の中では最も大型で長径4.8mを有する。覆土は泥炭質の土層で、遺物は瓦質土器3点、内耳土壙1点と少量であった。人口堆積状況を呈する。



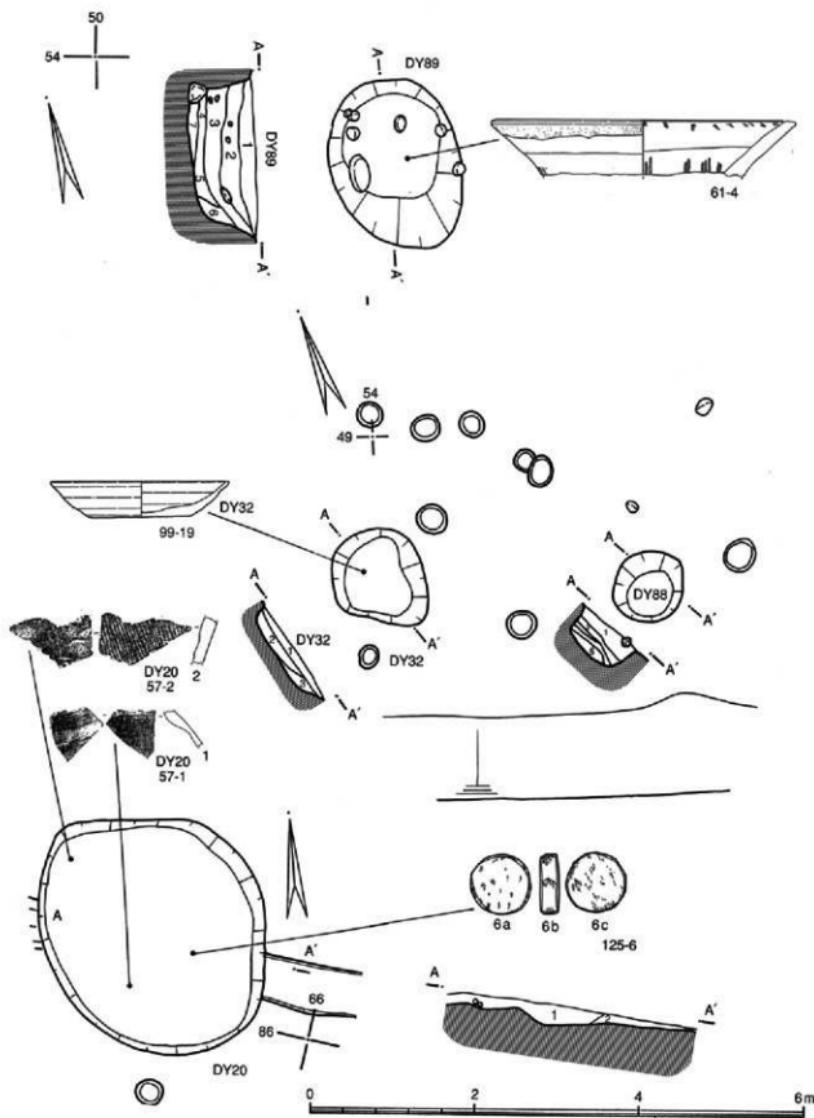
第36図 米沢城東二の丸 DY27～30・77, KY7 平面図(1)



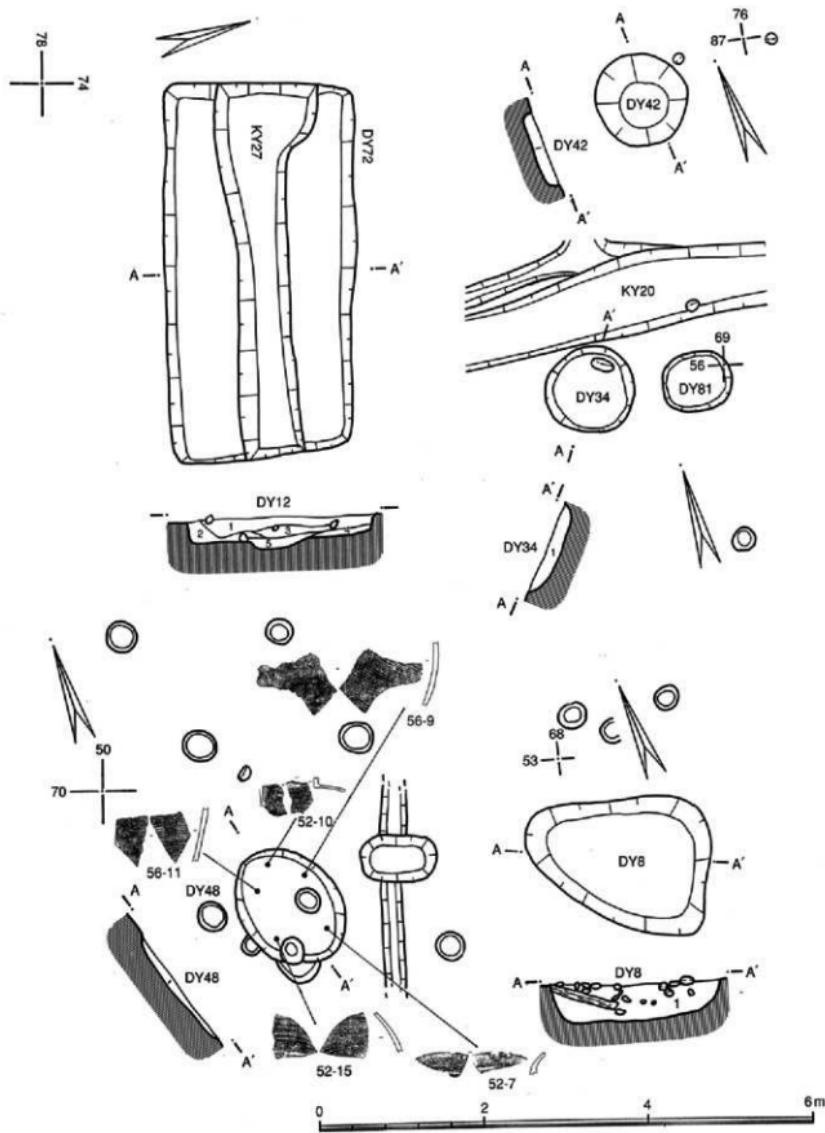
第37図 米沢城東二の丸跡 DY45・72・74・75 平面図 (2)



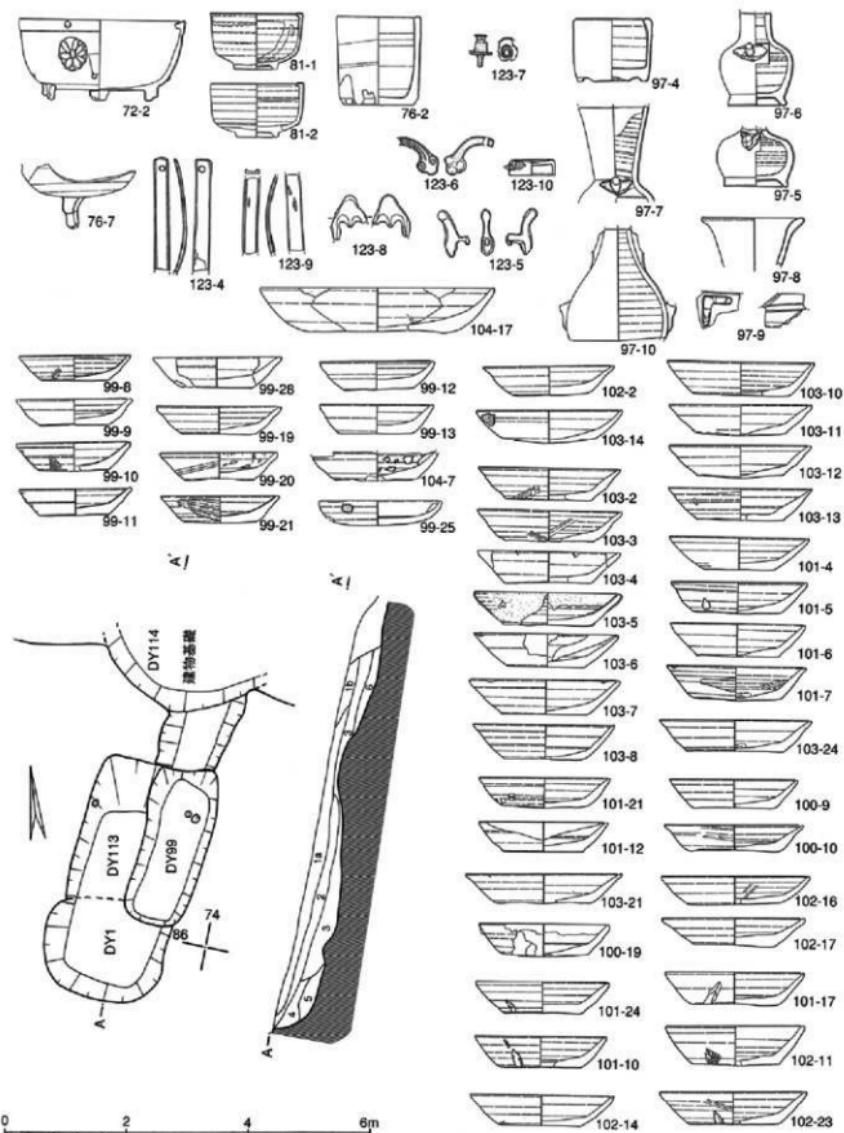
第38図 米沢城東二の丸跡 DY4・44・46・47 平面図 (3)



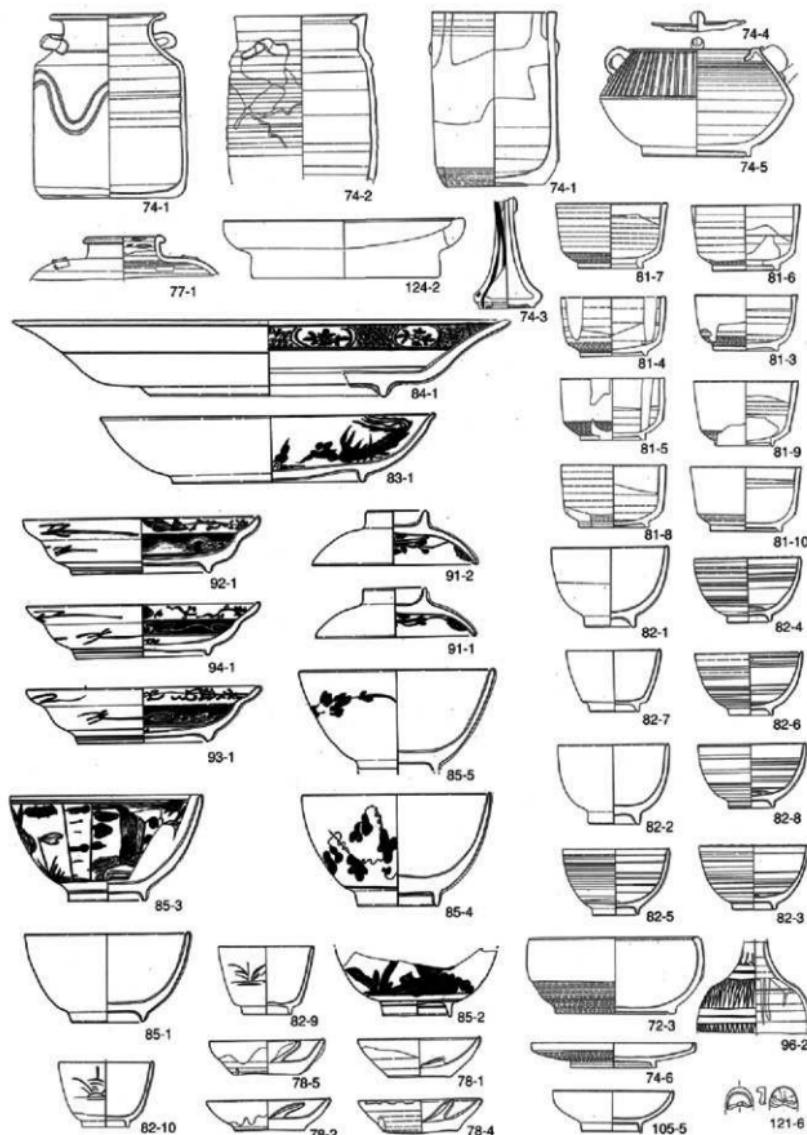
第39図 米沢城東二の丸跡 DY20・32・88・89 平面図 (4)



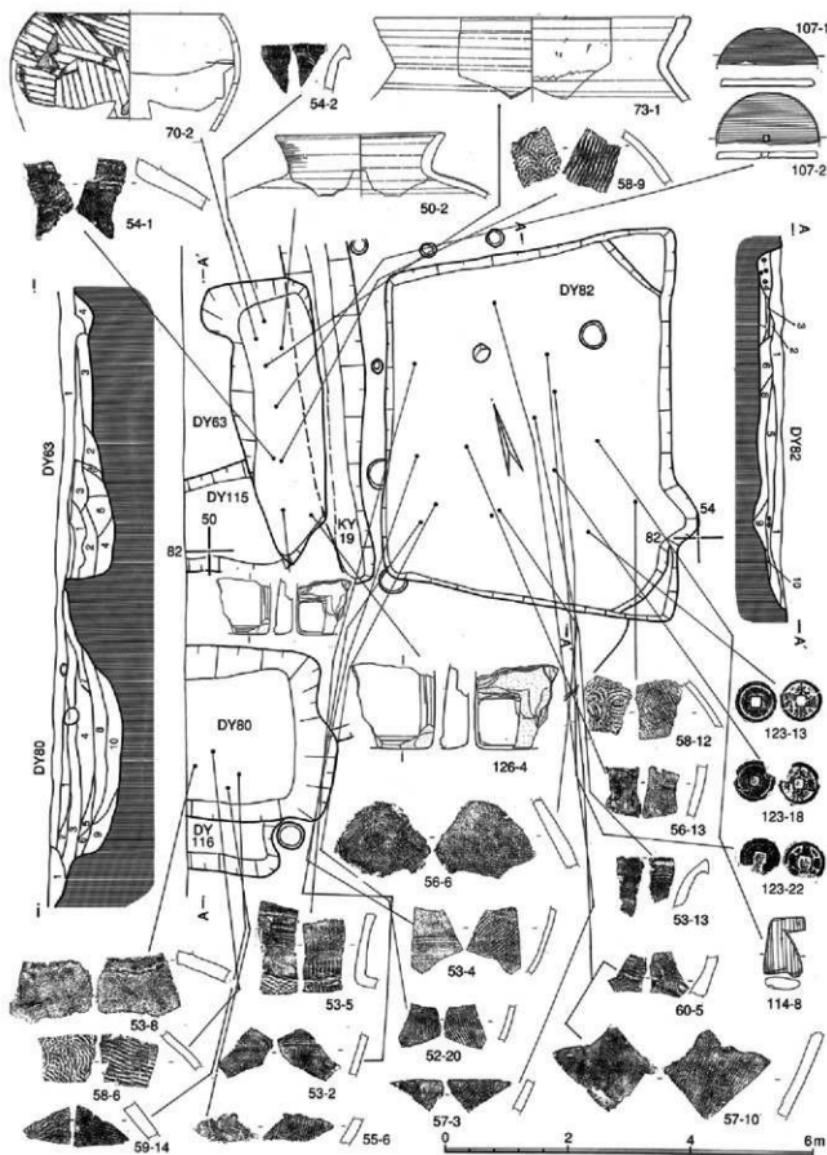
第40図 米沢城東二の丸跡 DY8・34・42・48・72・81 平面図 (5)



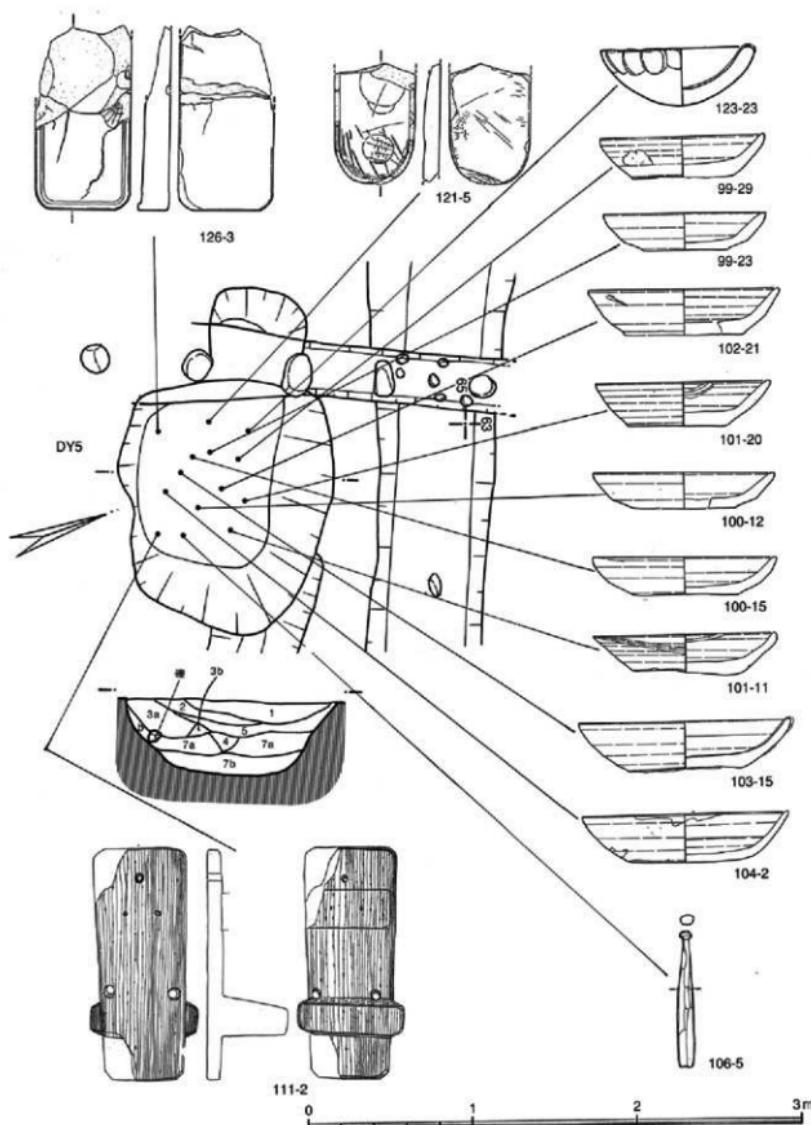
第41図 米沢城東二の丸跡 DY1 平面図。DY1 出土遺物実測図 (6)



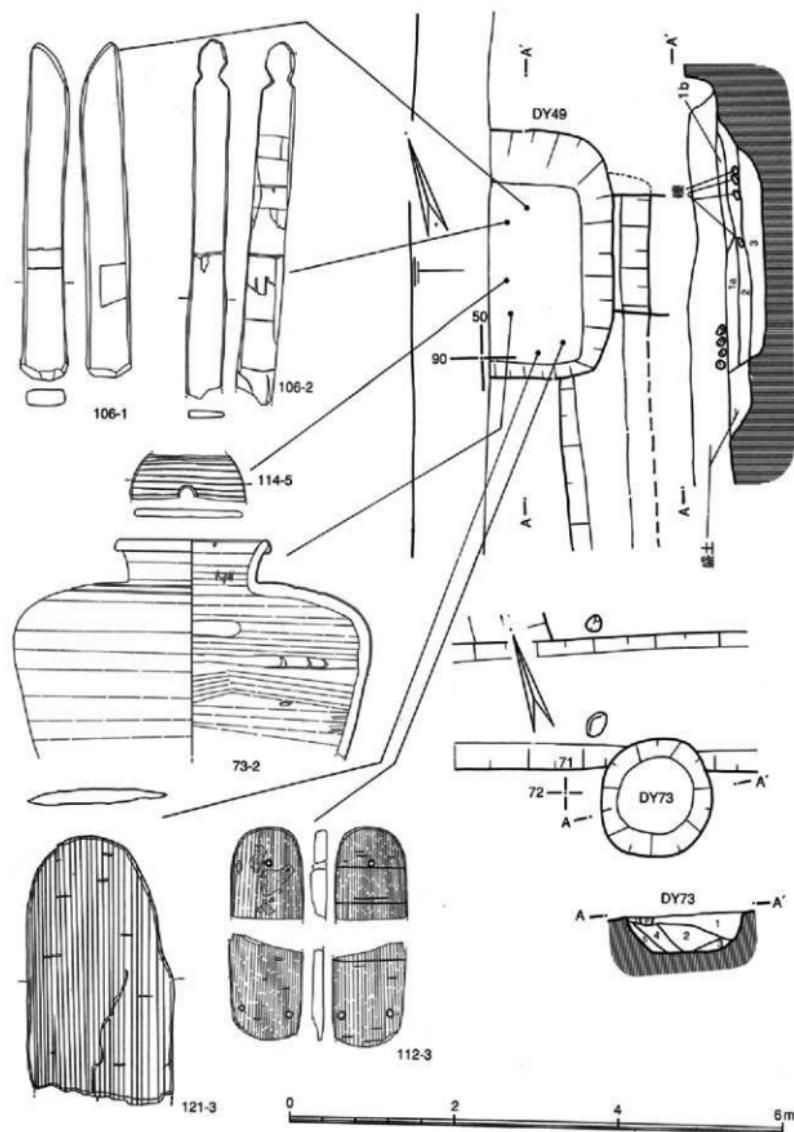
第42図 米沢城東二の丸跡 DY1 出土遺物実測図(7)



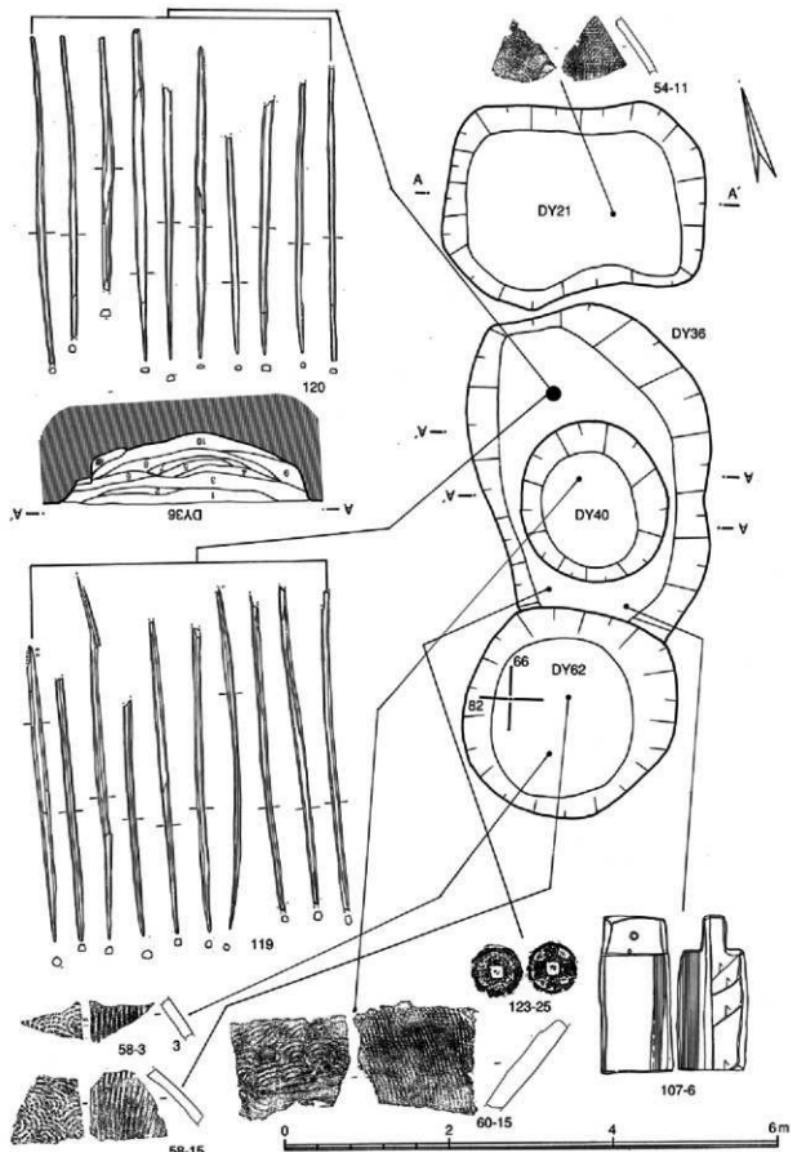
第43図 米沢城東二の丸跡 DY63・80・82・115・116 平面図 (8)



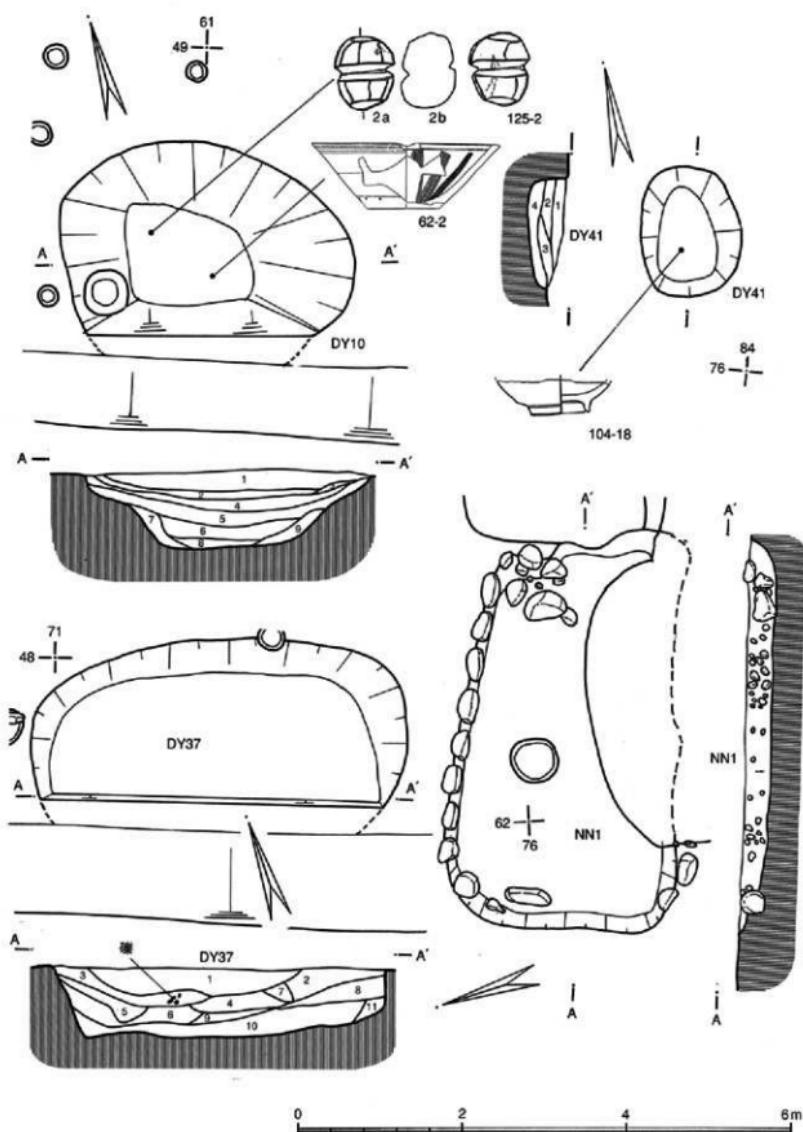
第44図 米沢城東二の丸跡 DY5 平面図 (9)



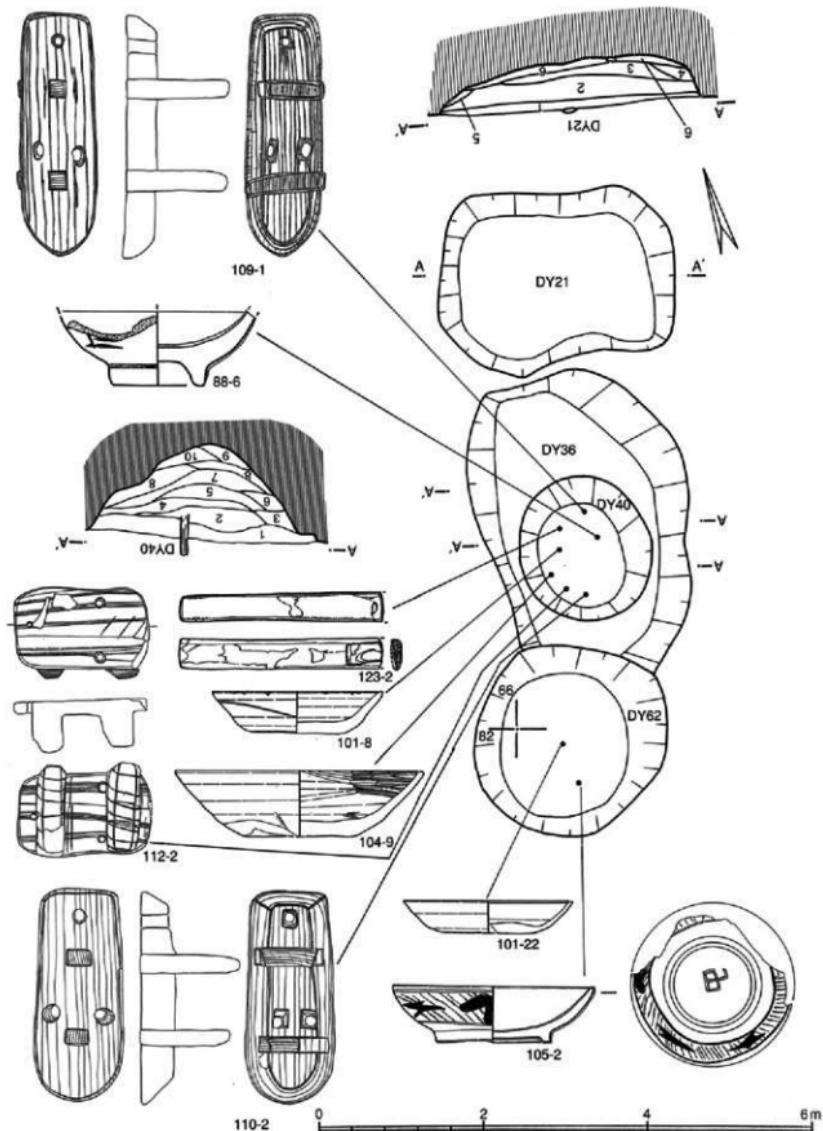
第45図 米沢城東二の丸跡 DY49, 73 平面図 (10)



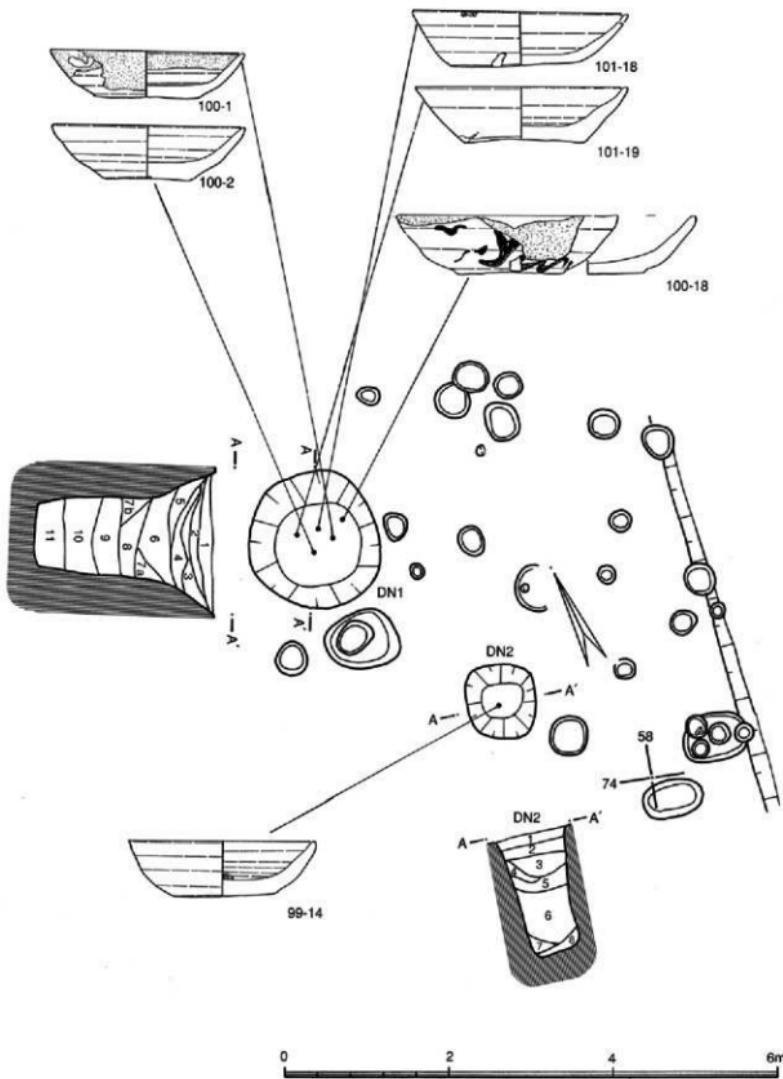
第46図 米沢城東二の丸跡 DY21・36・40・62 平面図 (11)



第47図 米沢城東二の丸跡 DY10・37・41・NN1 平面図 (12)



第48図 米沢城東二の丸跡 DY21・36・40・62 平面図 (13)



第49図 米沢城東二の丸跡 DN1・2平面図 (14)

DY 10 は西方に位置し、自然堆積状況を示す。底面から第 73 図 2 の石製こもつづろ、第 62 図 2 の瓦質摺鉢が出土している。両者とも 16 世紀の遺物が認められた。掘立建物跡に関連する土壌とも考えられる。

以上、今回の調査区から検出した土壌群について述べた。これらは溝状遺構と同様に各寺院に伴うものであり、構築目的は火災による焼失品、破損品を廃棄するために掘られたB類のDY 1・40 等があげられる。これらの土壌から言えることは、陶磁類や木器類を意図的に廃棄したことが伺える。

人形・刀形の木器品を出土したDY 49 は祭祀の意味合いを有する場所に構築された土壌と考えたい。また、DY 4 は貯蔵を目的とした土壌である。先述した目的で構築され続けた結果が、合計 90 基になったと想定される。

(5) 池跡（第 23・44 図）

NN 1・NN 2 の 2 基が認められた。後者は KY 8 と重複する形態で最大幅 5.8 m ある。覆土からの遺物はない。NN 1 は石組を有する形態で東西 4.2 m、南北 2.7 m を測る方形形状を呈する。底面は平坦である。周辺は削されており、関連する溝状遺構は確認できなかった。

底面に建物跡の柱穴が確認された。堀方もやや大型であることから平安期とも想定される形態の柱穴であった。年代としては伴出した遺物がないことから、断定はできないが掘り込んでいる面から、DY 1 の年代が想定される。

(6) 井戸跡（第 59 図）

4 基を検出し、半裁できた 2 基を図示した。他の 2 基は礫層が固くつめこまれた覆土で半裁が不可能であった。DN 1～4 であり、平面形状は DN 1 が円形状、他の 3 基は方形に掘り込んだ素掘り井戸跡である。

DN 1 は調査中央の北西部に位置し、南東に 1.8 m 離れて DN 2 がある。深さは 2.0 m を有し、4 基の中で最も深い。8 層まで半裁し、セクション図を作成後丸掘りして、その後半裁し底面まで掘り進んだ。底面に曲物や礫を配した遺構は認められなかった。

遺物としては第 75 図 18 の墨書きかわらけが出土している。文字というよりは呪術的な要素を持つ形態のかわらけである。他に 4 点のかわらけが出土している。F群 C3 類に細別される形態であり、同類が DY 1 からも出土していることから想定すれば DY 1 の時期に埋められた井戸跡と考えられる。

DN 2 は方形形状の掘方である。深さは 1.7 m を有する。DN 1 と同様に底面に施設は認められなかった。6 層上面から F 群 A3 類のかわらけが出土している。この器形も DY 1 から出土しており、新旧関係は明確でない。他の 3・4 も DN 2 と同様な形態であるが、DN 3 の底面には木組の痕跡が認められた。4 基とも人工堆積である。

(7) ピット群（付図）

545 基認められた。建物跡を構成した遺構と認識するが、関連性は見いだせなかった。

5 検出された遺物

今回の調査区からは総計 7,547 点が出土している。そのうち遺構内出土は 4,121 点であり、全体の約 6 割を占める。遺物は大別すると A 群から K 群の 11 形態に分けられる。A 群（須恵器・土師器）421 点、B 群（瓦器質土器）423 点、C 群（陶磁器類）2,380 点、D 群（染付陶磁器）771 点、E 群（青磁）125 点、F 群（かわらけ）1,801 点、G 群（木器類）873 点、H 群（箸）655 点、I 群（鉄製品）26 点、J 群（石製品）35 点、K 群（硯）37 点となる。さらに、細類を加え列挙した順に述べたい。なお、詳細については第 1 表～第 11 表を作成したので参照願いたい。

◎ A 群（第 50 ～ 60 図）

本群は A 群 1 類（土師器）、A 群 2 類（須恵器）に細別される。前者は 1 点、後者は 420 点であった。破片で占められ実測図を作成できたのは 9 点にすぎない。第 127 図の土器調整手法分類図に基づいて観察表を作成した。

A 群 1 類（第 50 図 1）

土師器壺形土器 1 点が出土している。赤褐色の色調で外面を縦位のケズリ、内面を縦位のハケメ調整によって仕上げている。大浦編年のⅢ期に併行する奈良末葉から平安初頭に位置する。

A 群 2 類（第 50 図 2 ～ 第 60 回）

須恵器を一括した。器形としては、壺類・壺類・壺・蓋がある。出土数としては高台壺片が 8 点、壺底部片 21 点、蓋 2 点、他は拓影図で示した壺片・壺片で占められる。

◎ B 群（第 61 ～ 71 図）

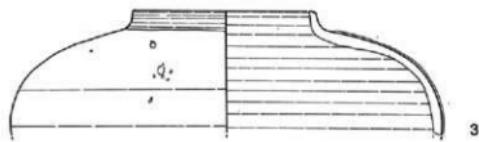
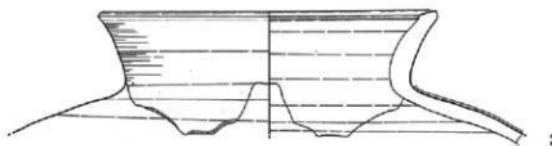
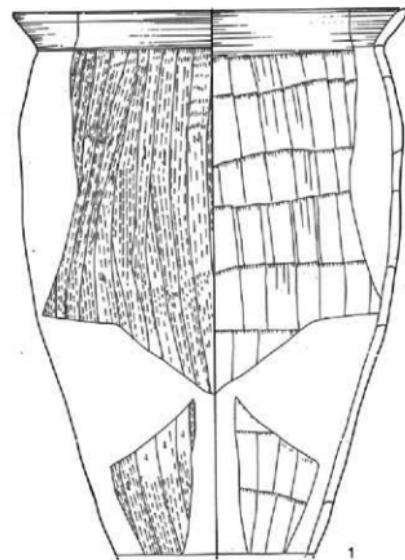
器形から 10 形態に細別される。B 群 1 類（摺鉢）、B 群 2 類（内耳土壠）、B 群 3 類（黒色土器）、B 群 4 類（土風呂）、B 群 5 類（手焙・焙烙）、B 群 6 類（瓦器質雜器）、B 群 7 類（瓦器質壺形土器）、B 群 8 類（瓦器質壺形土器）、B 群 9 類（瓦器質漆塗土器）、B 群 10 類（七厘）となる。列挙した順に説明を加えたい。

B 群 1 類（第 61 ～ 第 63 図 2）

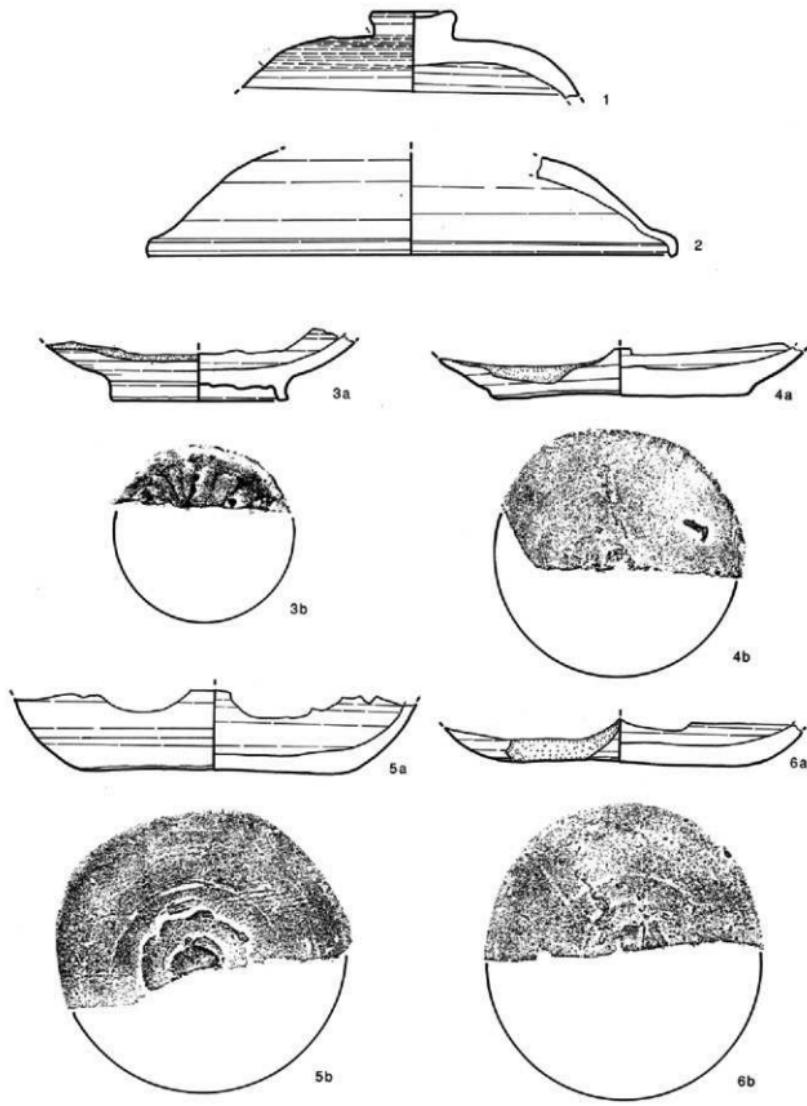
41 点出土している。そのうち 9 点について復元し、実測図を作成した。外面は横位、斜位のハケメ調整、内面に 4 条、5 条の幅の広いカキメを施し、使用面を整形した摺鉢である。器高が高い第 61 図 1・第 62 図 2 や、低い同図 3 の器形が認められる。焼成窯は不明である。中世から近世初頭に位置する摺鉢と考えられる。使用痕跡は底部に集中して観察される。二次焼成を受けた痕跡が多く認められることから土壠としての機能を有していたと考えられる。中世から近世初頭の遺物に位置づけられる。

B 群 2 類（第 63 図 3 ～ 第 67 図 3）

264 点出土した。その中で 19 点を図化し、復元できたものは 1 点であった。外面が黒色で調整法が観察しにくいのが多い。出土数は本群の中で最も多く認められた器形である。当市の中田町大浦 C 遺跡で完形の内耳土壠が出土している。それを参考にすれば内面の取手は 3 箇所整形し、2 箇所が隣接、もうひとつは対面した形態とみられる。内耳部分にひも等の使用痕跡は認められない。従って、カマド等にのせて使用する土壠であろう。

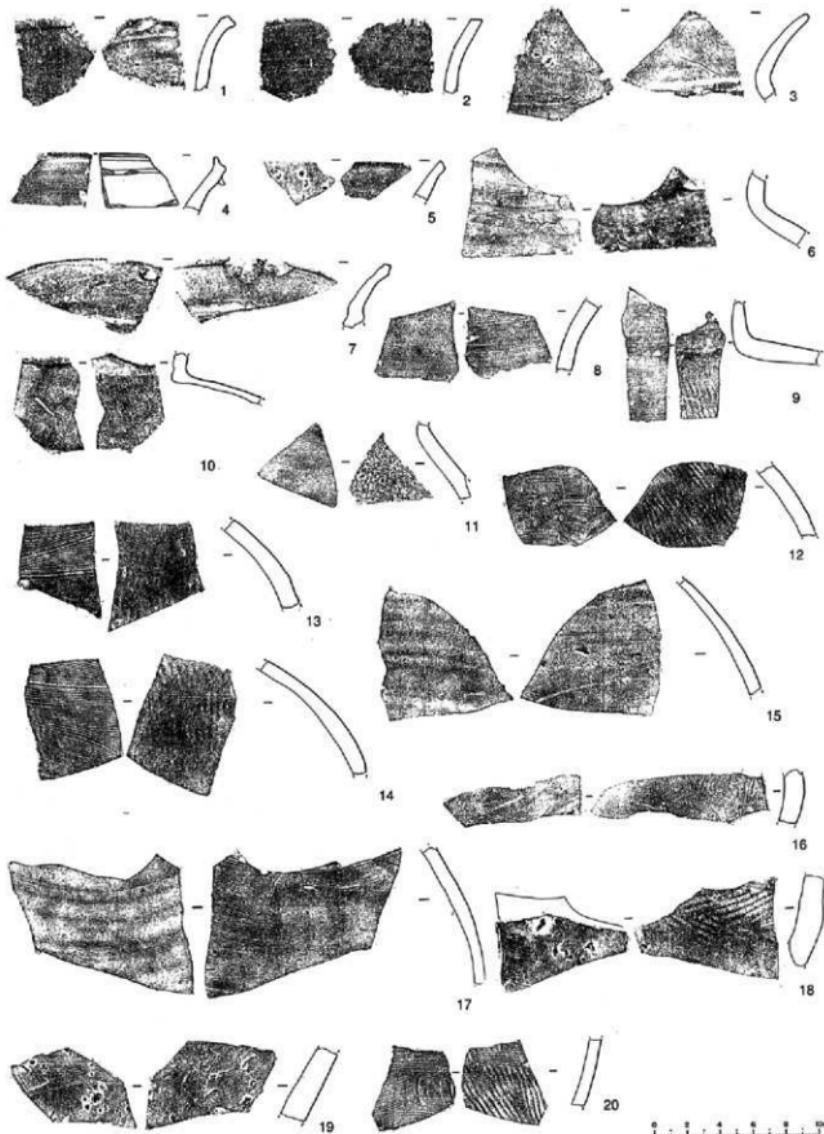


第50図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（1）

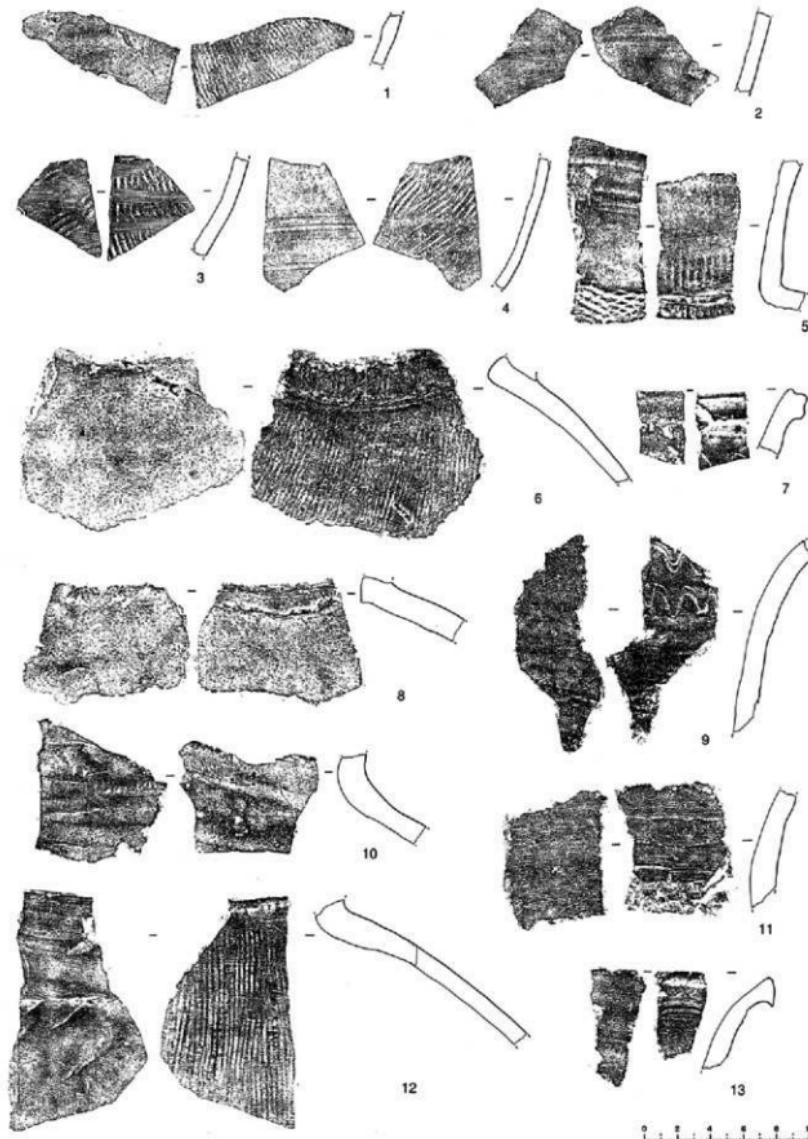


第51図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (2)

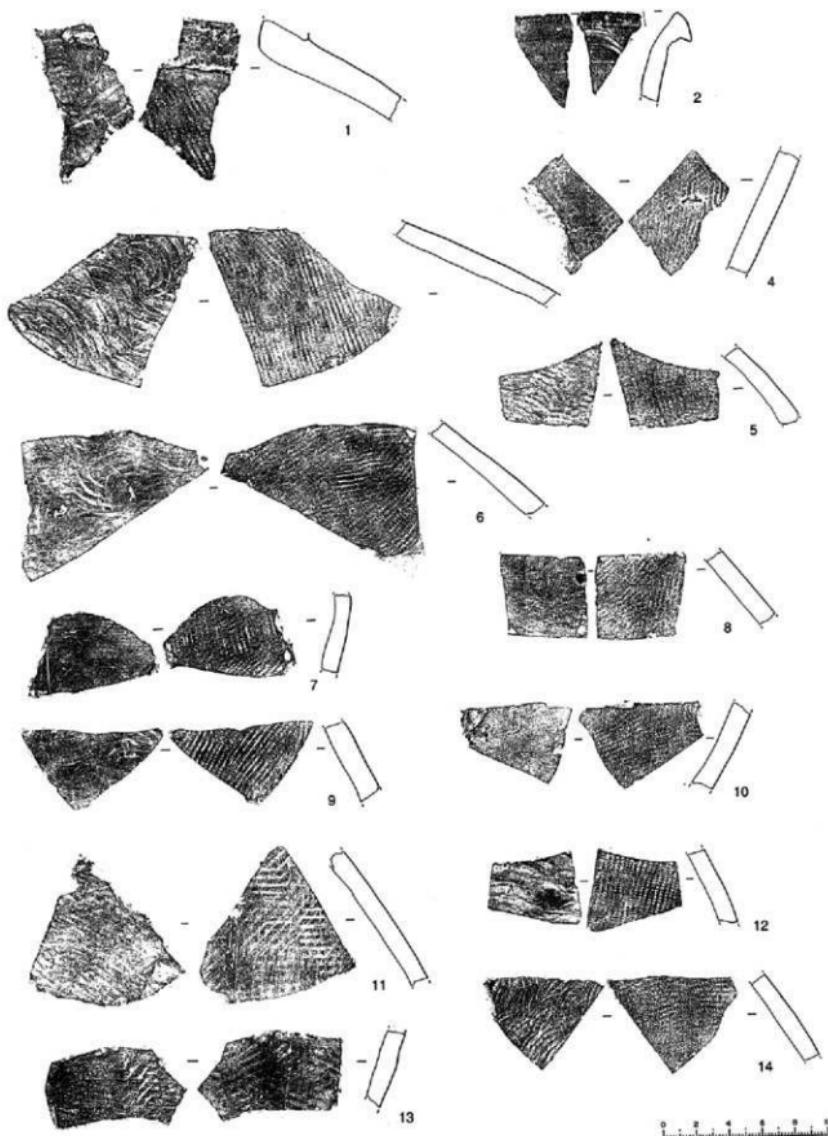




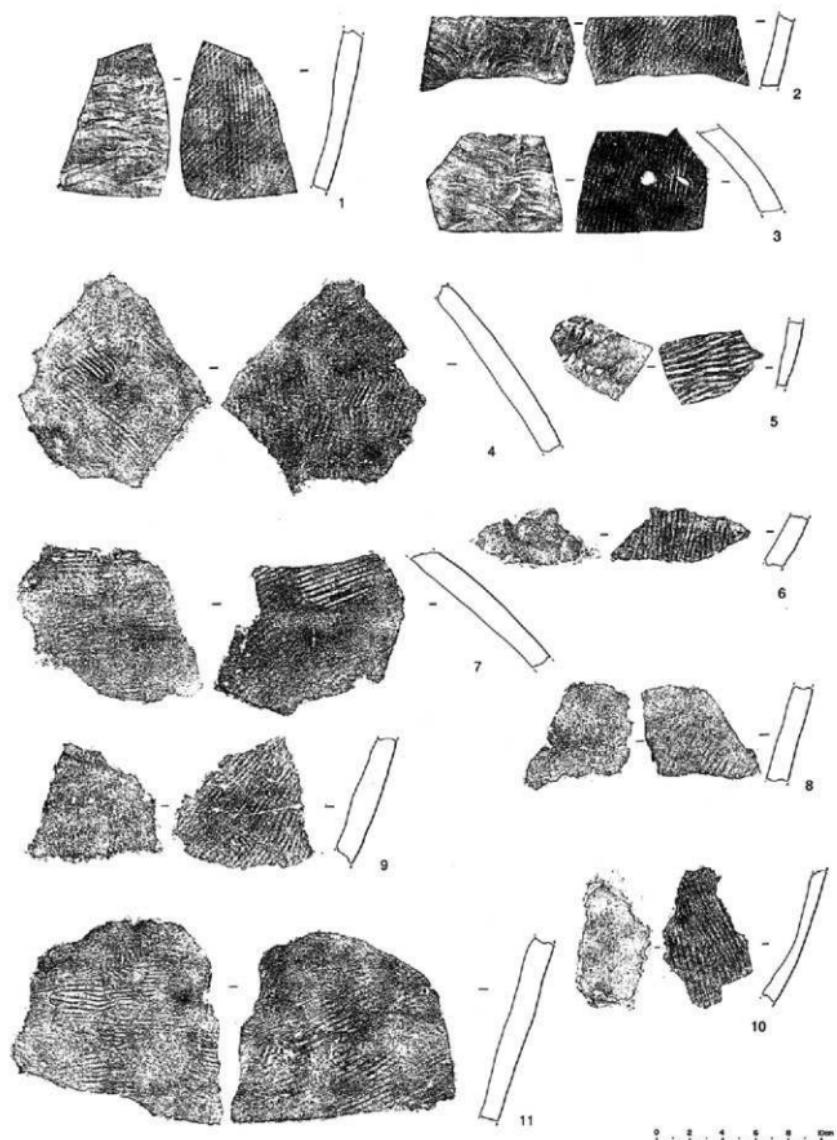
第52図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(1)



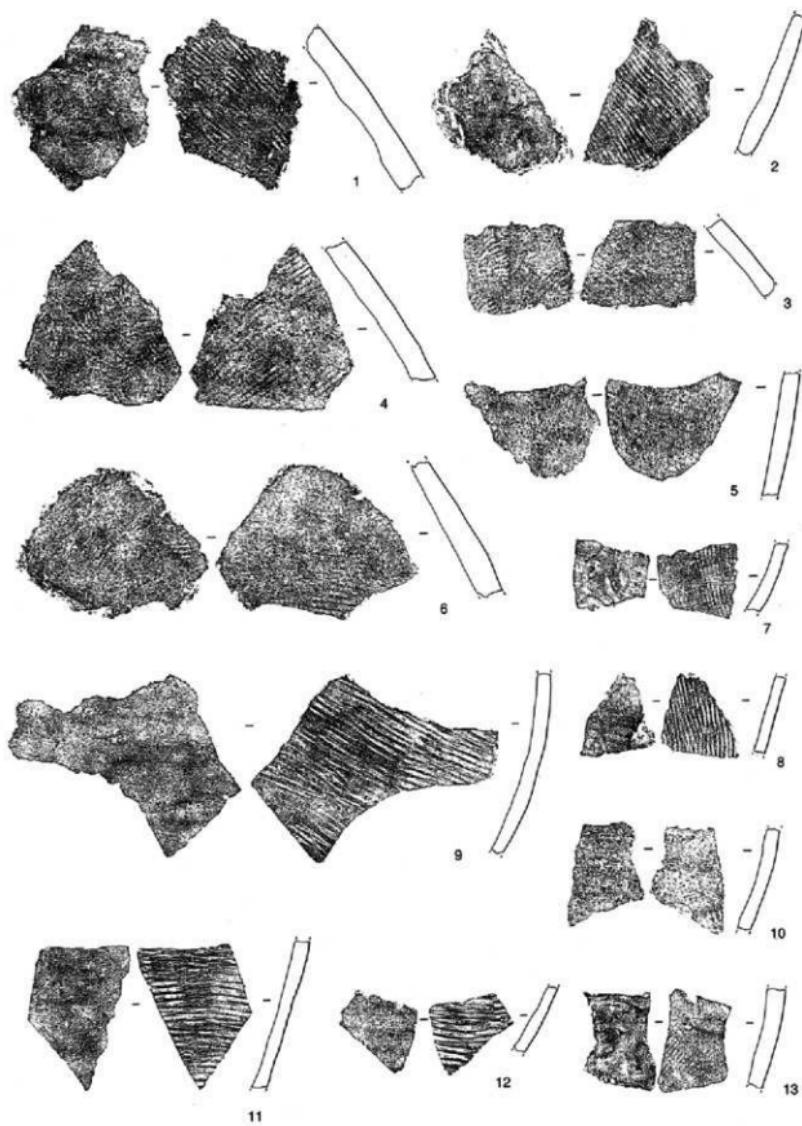
第53図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図 (2)



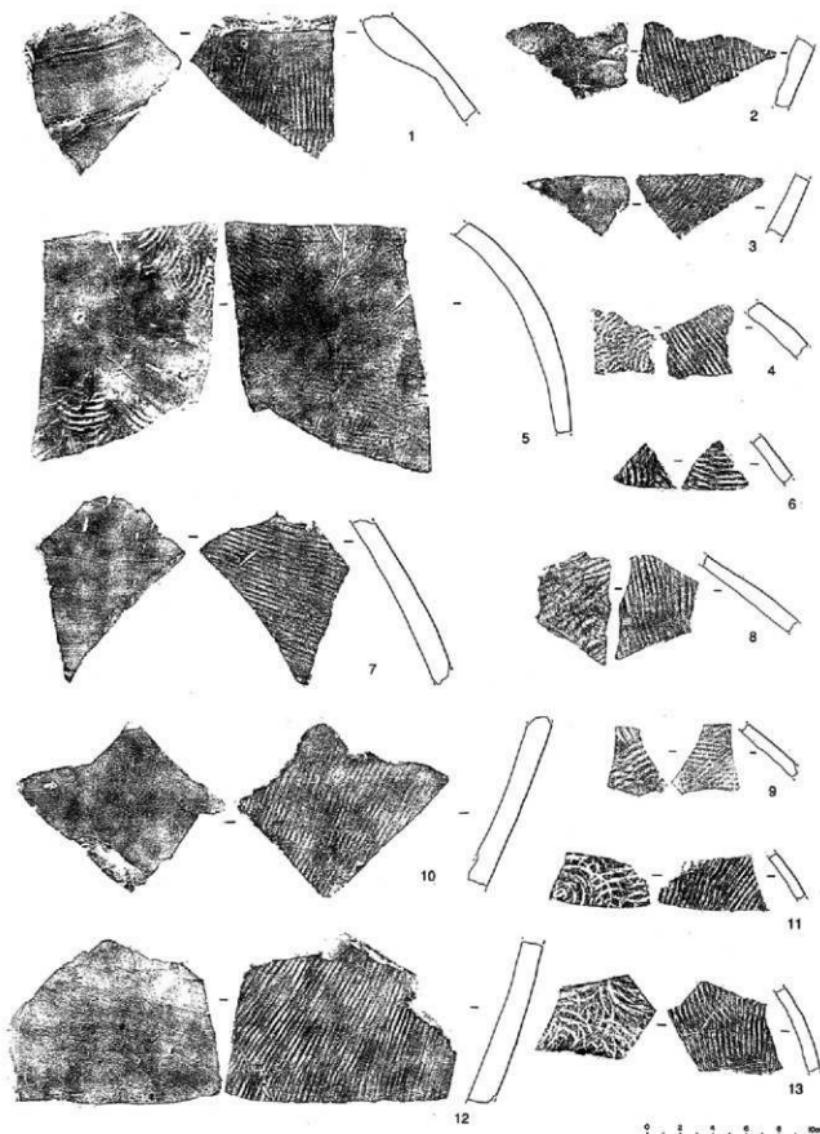
第54図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図（3）



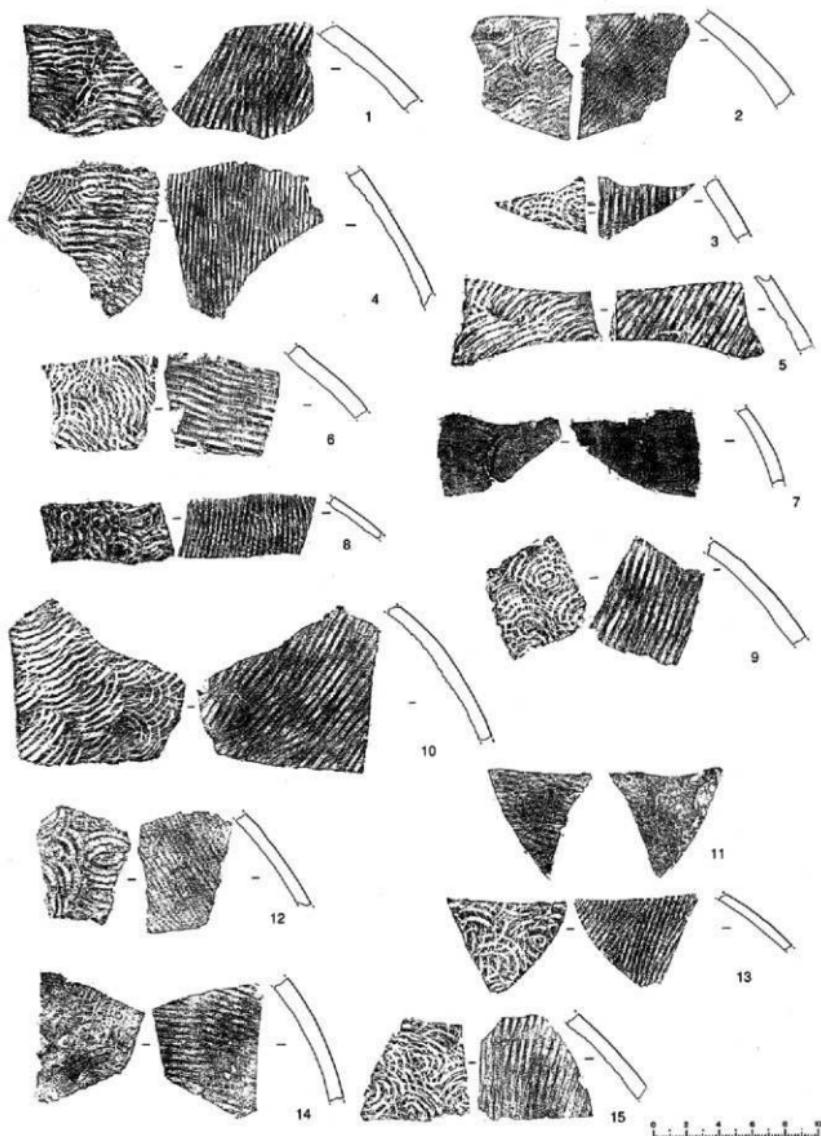
第55図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(4)



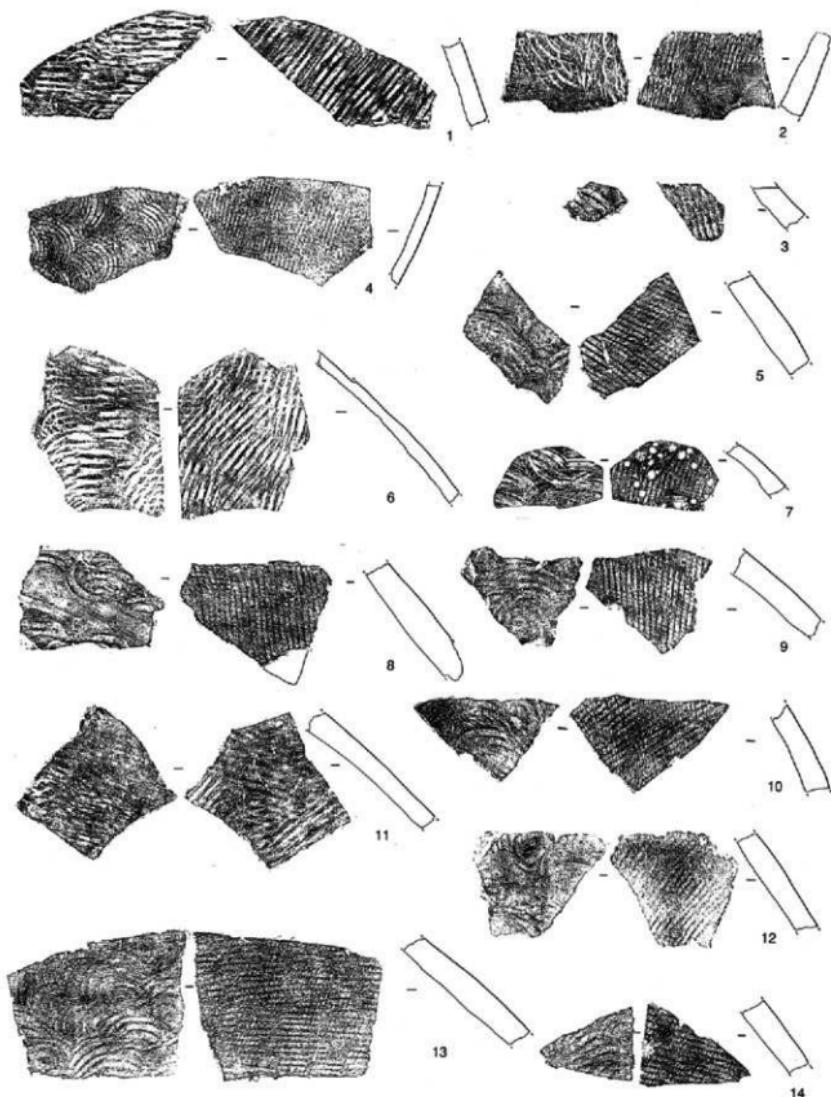
第56図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(5)



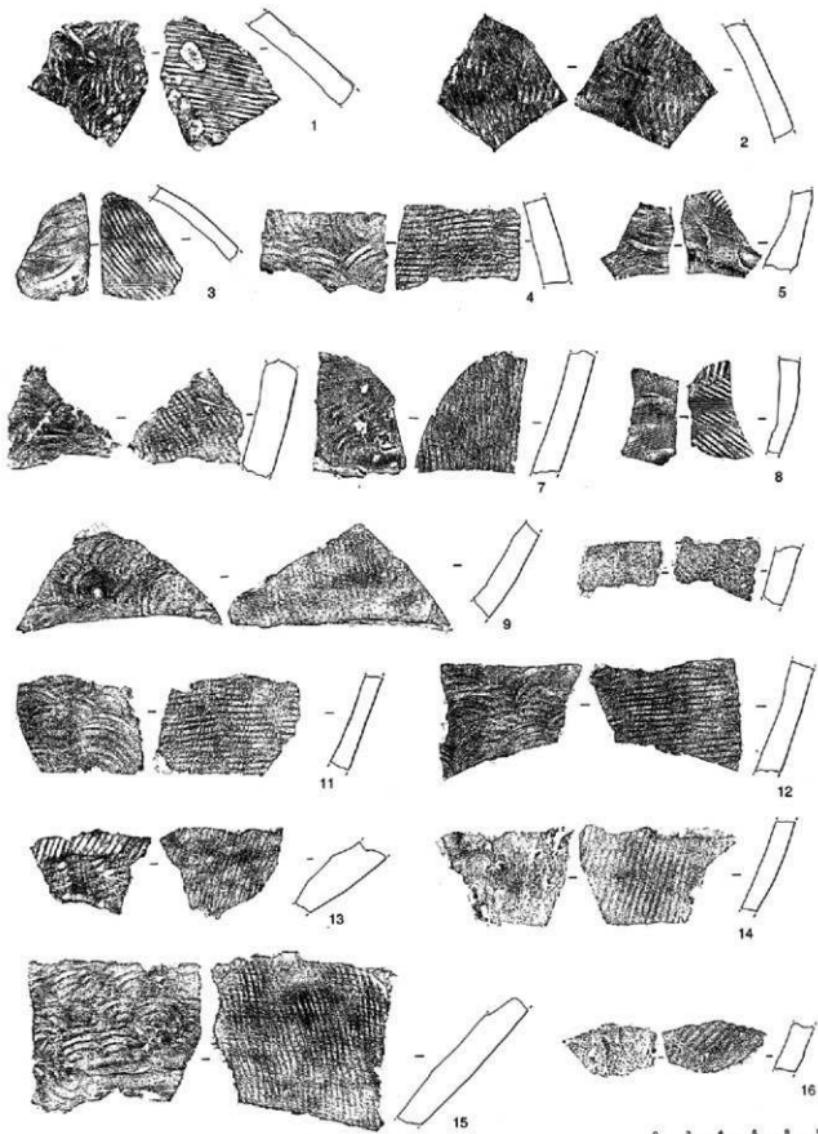
第57図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図 (6)



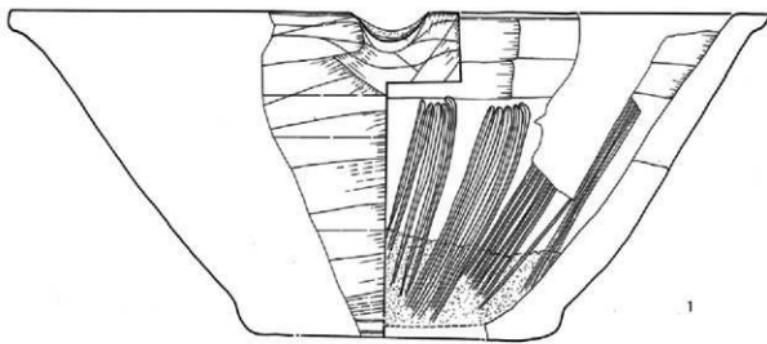
第58図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図(7)



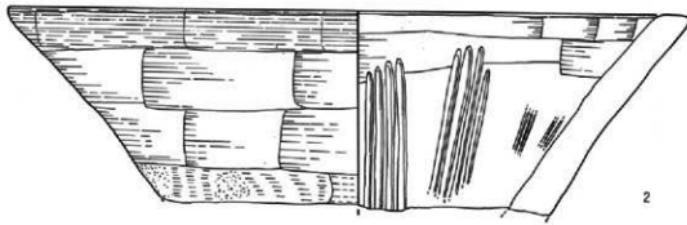
第59図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図 (8)



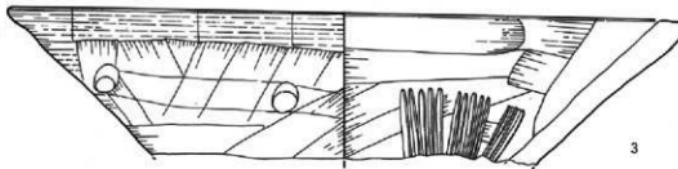
第60図 米沢城東二の丸跡出土遺物拓影図 (9)



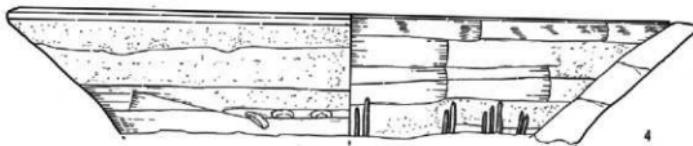
1



2



3

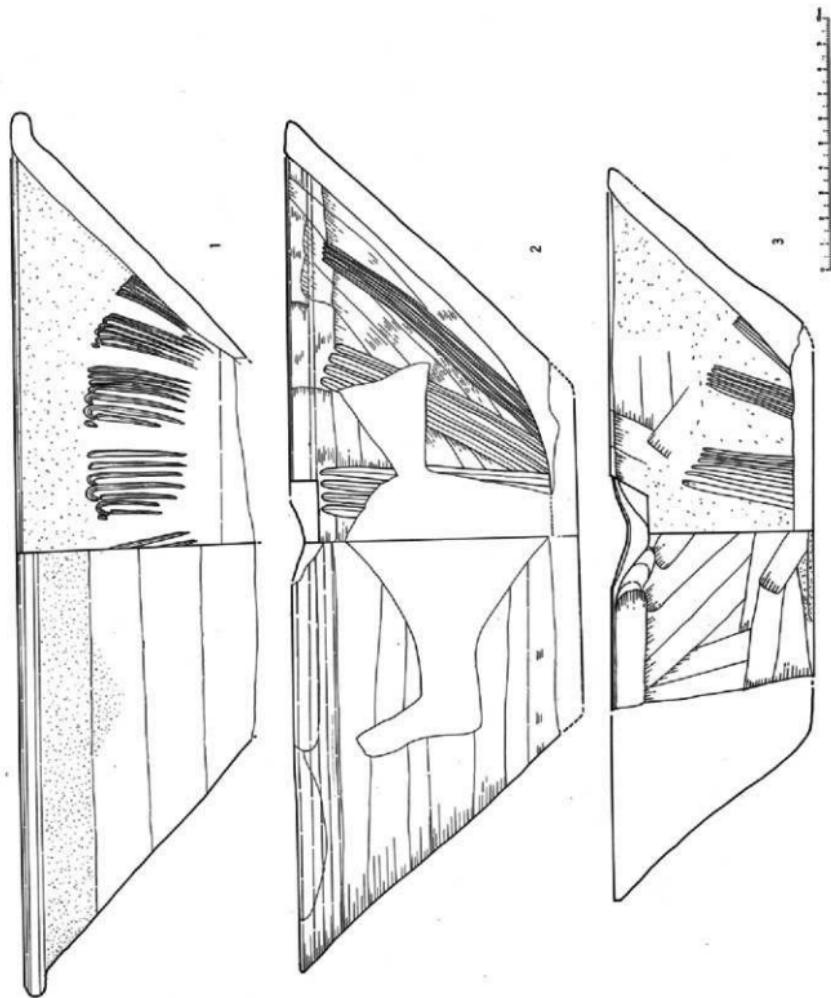


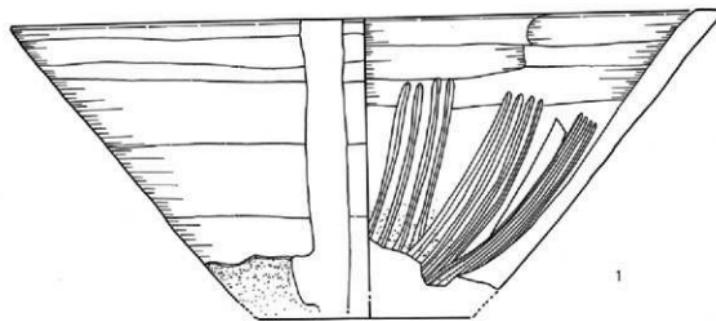
4



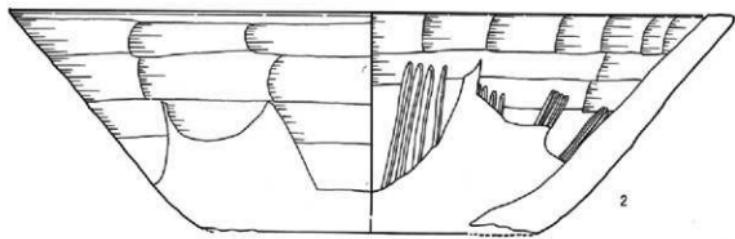
第 61 図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (1)

第62図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (2)

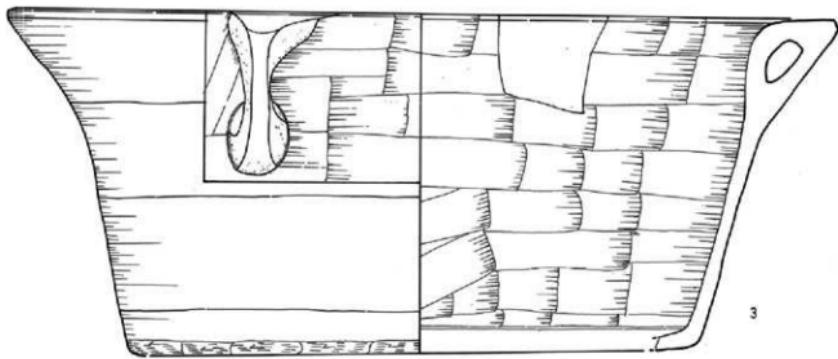




1



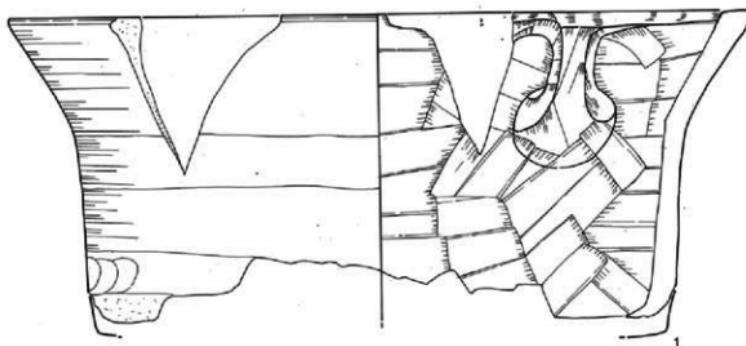
2



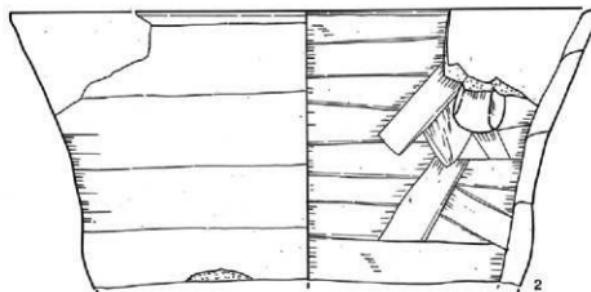
3



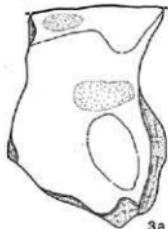
第 63 図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (3)



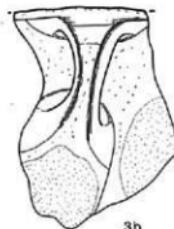
1



2



3a



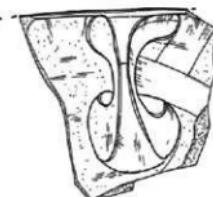
3b



3c



4a



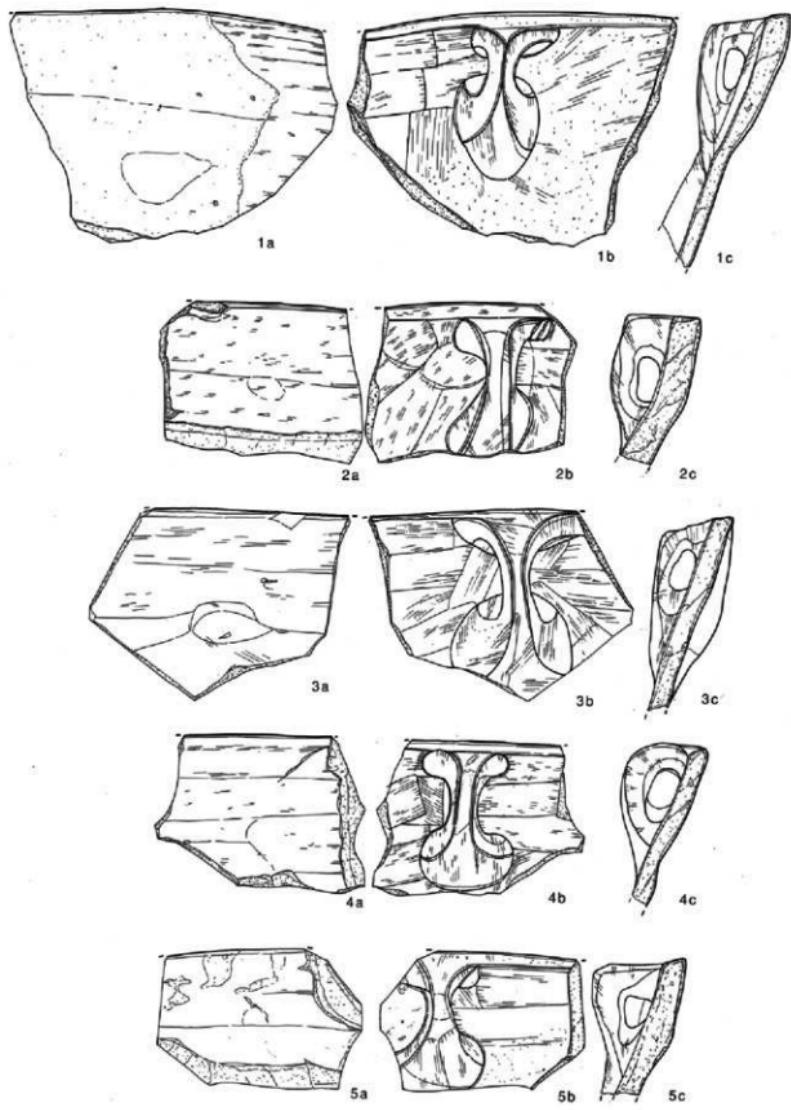
4b



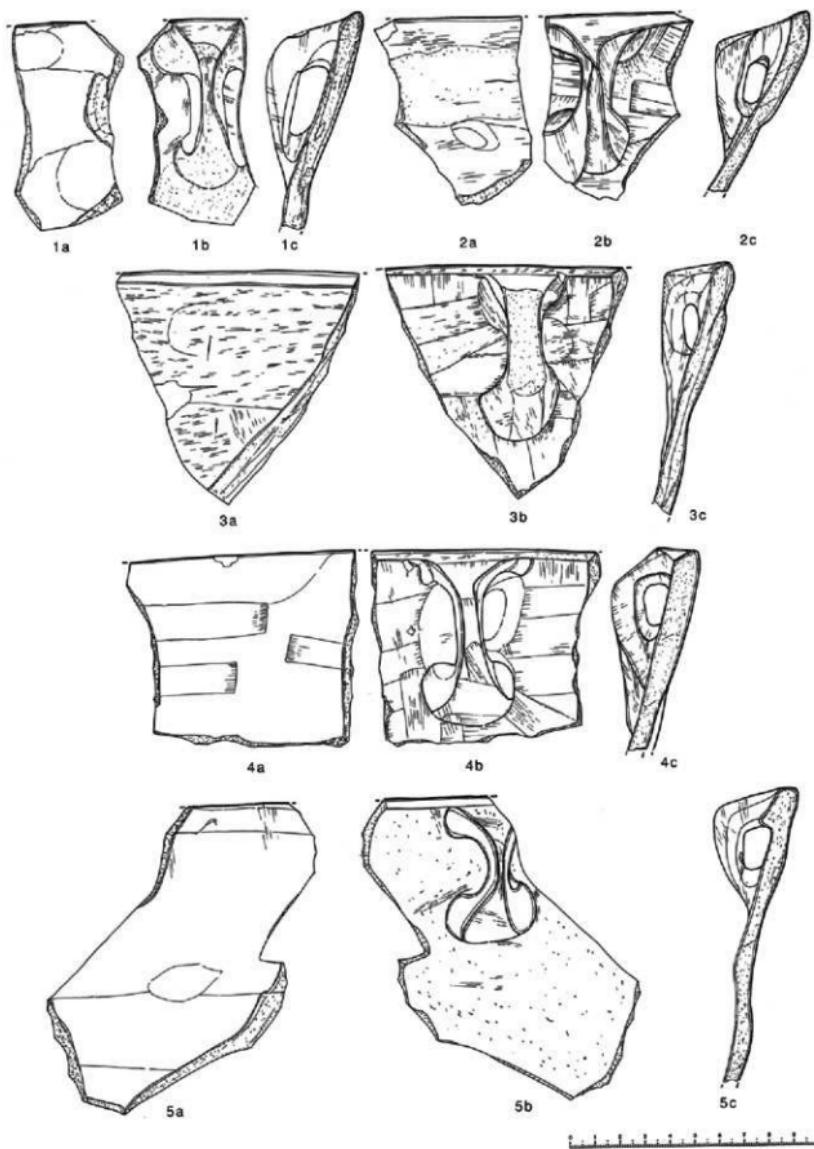
4c



第64図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(4)



第65図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(5)



第66図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)